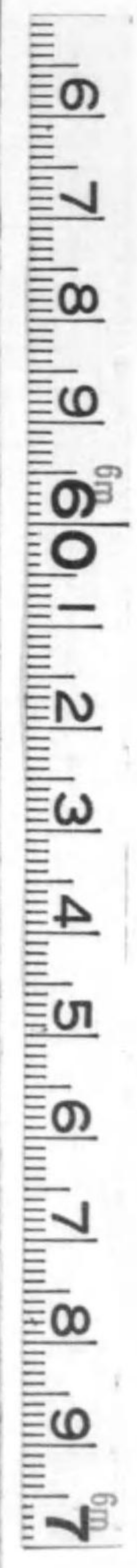


324
542

森下景端訂正
片岡正占編輯

黒住教葬祭式



始



324-542



黑住教葬祭式目次

第一部 葬祭式

第一節 一般心得……………三

第二節 教師心得……………八

甲、特葬祭式

第一節 歸幽奏上式……………七

第二節 地鎮式……………八

第三節 戒諭式……………九

第四節 誄詞式……………一〇

第五節 祓魂式……………二

第六節 遷棺式……………三

第七節 入棺式……………四

第八節 發葬式……………五

大正
1918
内交

乙、中葬祭式

第九節	葬場式	二七
第十節	埋葬式	三〇
第十一節	清祓式	三一
第十二節	家祭式	三二
第十三節	每十日祭式	三四
第十四節	五十日祭式	三四
第十五節	忌明清祓式	三四
第十六節	家廟合祀式	三五
第十七節	百日祭式	三七
第十八節	靈舍合祀式	三八
第十九節	墓所式	四〇
第一節	戒諭式	四一
第二節	誄詞式	四一

丙、並葬祭式

第三節	祓式	四一
第四節	遷魂式	四二
第五節	入棺式	四三
第六節	發葬式	四三
第七節	葬場式	四四
第八節	埋葬式	四五
第九節	清祓式	四六
第十節	忌明清祓式	四六
第十一節	家廟合祀式	四六
第十二節	墓所式	四六
第十三節	靈舍合祀式	四六
第十四節	百日祭式	四七
第一節	戒諭式、誄詞式	四九



丁、其他の祭式

第二節	祓遷魂式	四九
第三節	遷魂式	四九
第四節	入棺式	四九
第五節	發葬式	五〇
第六節	葬場式	五〇
第七節	清祓式	五〇
第一節	式年祭式	五一
第二節	正辰祭	五一
第三節	時祭式	五一
第四節	例月祭式	五一
第五節	本教大祭式	五一
第六節	各所講祭典式	五一
第七節	家廟巡拜式	五四

第二部、詞類

第八節	復祭式	五五
第九節	復祭奏上式	五五
第十節	靈舍遷魂式	五七
第十一節	改葬式	五九
第十二節	本國改葬式	六〇
第十三節	招魂祭式	六一
第十四節	祓式	六二
第十五節	祭典式	六三
第一節	歸幽奏上祓詞	六四
第二節	歸幽奏上祝詞	六四
第三節	地鎮式祓詞	六六
第四節	地鎮祭文	六六
第五節	戒諭文	六六

第六節ノ一	誄	詞	六
第六節ノ二	誄	詞	七
第六節ノ三	誄	詞	七
第六節ノ四	誄	詞	七
第六節ノ五	誄	詞	七
第六節ノ六	誄	詞	七
第六節ノ七	誄	詞	七
第六節ノ八	誄	詞	七
第七節	遷魂式祓詞	詞	七
第八節	主神遷魂奏上祝詞	詞	七
第九節	招魂詞	詞	七
第十節	遷魂祭詞	詞	七
第十一節	發葬日靈主告辭	詞	七
第十二節ノ一	發葬告辭	詞	七
第十二節ノ二	發葬告辭	詞	七

第十二節ノ三	發葬告辭	詞	七
第十二節ノ四	發葬告辭	詞	七
第十二節ノ五	吊詞	詞	七
第十三節	靈魂安命詞	詞	七
第十四節ノ一	埋葬葬詞	詞	七
第十四節ノ二	埋葬葬詞	詞	七
第十五節	清祓詞	詞	七
第十六節	靈主告辭	詞	七
第十七節	靈舍每日拜詞	詞	七
第十八節	墓參拜詞	詞	七
第十九節	十日祭告辭	詞	七
第二十節	二十日祭告辭	詞	七
第二十一節	三十日祭告辭	詞	七
第二十二節	四十日祭告辭	詞	七
第二十三節	五十日祭告辭	詞	七

第二十四節 忌明清祓詞.....七

第二十五節 五十一日祭告辭祖先靈主.....六

第二十六節 同新靈主.....六

第二十七節 家廟安鎮祭告辭.....六

第二十八節/甲 百日祭告辭.....六

第二十八節/乙 百日祭告辭.....六

第二十八節/丙 墓碑建設告文.....六

第二十九節 主神奏上祝詞.....六

第三十節 諸靈前合祀告辭.....六

第三十一節 新靈主告辭.....九

第三十二節 墓所祭文.....九

第三十三節 式年主神奏上祝詞.....九

第三十四節/甲 一周年祭告辭.....九

第三十四節/乙 式年祭告辭.....九

第三十五節 每季正辰祭告辭.....九

第三十六節 時祭告辭.....九

第三十七節 時祭式年合祀告辭.....九

第三十八節 例月祭告辭.....九

第三十九節 每日祖先靈拜詞.....九

第四十節 各所講祭典祓詞.....九

第四十一節 主神奏上祝詞.....九

第四十二節 諸靈舍告辭.....九

第四十三節 家廟巡拜詞.....九

第四十四節 復祭式祓詞.....九

第四十五節 復祭奏上祝詞.....九

第四十六節 靈舍復祭告辭.....九

第四十七節 遷魂詞.....九

第四十八節 靈舍鎮祭告辭.....九

第四十九節/甲 改葬詞.....九

第四十九節/乙 改葬詞.....九

第四十九節 丙 改 葬 詞……………101

第五十節 招魂祭祓詞……………101

第五十一節 招 魂 詞……………101

第五十二節 招魂祭祭文……………101

第五十三節 招魂祭祭文……………101

第五十四節 還 魂 詞……………101

第五十五節 招 魂 詞……………101

第五十六節 同靈鎮祭告辭……………101

第三部、行列式及具品

第一節 特 葬……………109

第二節 上 葬……………115

第三節 中 葬……………119

第四節 並 葬……………121

第五節 祭 具……………124

附 錄 服忌令其他……………171

第六節 歛 具……………126

第七節 葬 具……………127

第八節 遺體に着せしむる品……………130

第九節 繪 圖……………131

例言

本式の心得

一、嚮に本教葬祭式の編輯あれども所謂客式なるを以て特祭には用ひ難きが故に、今回其式を三等に分ち、特中並と組織し、以て喪家且教

師の都合を得さしめむとす、是本書を編述せる所以なり。

二、右三等に區別を立たるに附、行列式も同様に其等差あるを以て、列の進退増減は立てしかど、概列なれば猶喪家の都合を以て、葬具祭具等

の精粗多少は時宜に従ふべし。

三、書中祭式に本義と畧儀との別を立てたり、其一二の例を挙げば、遷魂式と發葬式との區別是なり。遷魂式と發葬式とは、同時に執行はざる

が本義なり。然るを喪家の都合を以て、遷魂發葬兩式を同時に爲る者あり。是は畧儀なり。又入棺式に付き棺に寢棺坐棺の二種あり、寢棺は

本義にして、坐棺は畧儀なるの類是なり。自餘は之に准て辨知すべし。

四、式とは儀容更まされる名稱なり、所謂行儀なり。儀容とは、吾人對面する時には、互ひに其身其心をも改め、正して應答を爲す是を式と云ふ。然



れば、神人不二の神理を以て、神と人と對合するにも儀容なかる可らず。是故に葬祭式にも式なかる可らざる所以なり。

五、第二部祭文中に祝詞と題したるは、神に對ひて奏上詞なり。告辭と記せるは、靈魂に告ぐるが故なり。又詞とのみ書たるあり、遷魂詞發葬詞誄詞の類是なり。是も同義なり。併し只詞とのみ云ふ時は、説と云ふ意こもれり。譬ば誄詞の如し、死者在世中の功績善行美事を列記して、其靈魂に對ひ説く詞と云ふ意なり。依て其死者有功無功、貴賤上下、老幼、各異なるを以て、數章を編述せり。其章々を熟視して、誤謬ざらむ事を諒せよ。

六、祭式中に、祓式又十日祭式等を擧て、二十日祭式三十日の祭式を記述せず。又式年正辰春秋祭等も外式に準據して執行するが故に略せり。七、此書は童幼婦女と雖も解し易からしめむが爲に、務めて文章の体格を略述し、且字傍に平假字片假字を附したり。請ふ識者鄙言拙文なるを捨て、雖ども道理を取りて、其用に宛られむことを。

明治二十二年二月

編者識

黒住教葬祭式

黒住教管長 黒住宗篤 閱
大教正五位 森下景端 訂正
權中教正片岡正占 編輯

第一部 葬祭式

第一節 一般心得

葬禮は人生の終焉、登天歸地の大禮にして、重典なれば、喪家之を忽緒に爲べからざるは云ふを俟ざるなり。されば、喪家は之を神道教師に依頼して、追慕の敬禮を竭し、懇切に執行すべし。又依頼せらるゝ教師も、亦之を受け、懇篤輕慢なく、諸事之を取扱ふべし。依て其葬禮の旨要を標記し、以て喪家と教師とに示す、各自注意して粗漏なからむことを要す。

一、本教教師教徒は、豫て了知るゝ如く、第三版教規細則第五章第十二條の趣旨を躰し、病者あらば先之に醫藥治療の欠べからざることを了得、加ふるに教祖神直授の神傳を以て、禁厭を施し、心力を盡すといへども、其靈驗なき時は、天命と覺悟し、人生の終焉たる道理を辨知して

左の取扱を爲すべし。

二、病者危篤とならば、病牀の内外を安靜にして、病者の心神をして正念失はざる様注意すべし。

三、病者息絶なば哀を擧げ、一家内の者男女ども皆質素の服を着し、華飾をさるべし。親族の中禮を知たる者相禮者ど爲りて、喪事々務の事を掌るべし。親族朋友等に訃告及棺葬具等を調ふる事、皆相禮者の處分を聞くべし。

四、病者命終れる後、といへども、病牀の儘二十四時間は納棺すべからず。
納棺せぬは蘇生もや有らむと思ふが故なり

但禁厭者醫師親族者死者の傍に伺候すべきが本義なれども時宜に従ふべし。

五、死者の遺體は務めて多く搖動べからず、沐浴は爲さざるが本義なり。若汗垢あらば、濡巾を以て能く面部を始め身体を拭ふべし。髪を理むるは妨げなしといへども、爪は剪るべからず。綿巾を以て首を包み、絞

を布て其上に憩はしめ、四隅を取て之を包み、擧て棺中に納むべし。但新衣帶及襪を着け、又は禮服等を着さすべきが本体なれども、少

略せる該雛形を棺中に入れ置くも妨げなし。

六、死者に着せしむる衣服は男女ども新衣に帶を着け、面部を覆ひ臥たる儘(坐棺ならば端坐の儘)衾褥に包み、棺中に歛むるをよこす。

但棺中に收むる物品脱齒齋緒其外現世中愛翫せし物を納むべし。
雖も金銀銅錢の類は用捨すべし。

七、棺内に納むべき物畢りなば徐々に蓋をなし釘をしめ合目に瀝青を塗りおくべし。

八、納棺竟れば一間を構へ屏風を建回し傍に守刀を置き其棺前に机を据ゑ御酒洗米鹽水其外其家々の分限に應じて供物を爲すべし。

但遺體の臭氣を避んが爲に香または線香を焼くべし夜に入らば燈火を點すべし。

九、病者歸幽の由を其地方の所轄役場へ定規の通り届け出づべし又成規の通り教師出張願も必書面を以て申出へし。

但本部各所講其所屬の教師に依頼すべし又は喪家の都合により他の教師を頼む事あらば所屬教師に照會すべし。

一〇、教師至らば先其家の尊卑分限に應じ等差(並特葬中)を議定し葬具等

六
の増減其制に従ひ之を調理せしむへしまた入棺發葬の時日墓地の
區域を速かに定むへし。

但棺の造り方は其家々分限に應じて或は二重又は三重五重七重
にても好みに任すへし又葬儀は現世永遠の離別なるが故に教

師篤く注意し喪家をして遺憾無からしめむことを要す。

一、靈主及び墓標面の書式は教師の指揮を受けて認むへし。

二、靈號は齋主の撰定を請ふへし決して他人の僭稱自己の杜撰を爲
すへからず。

三、招魂は其祭具調進を急にし成るへく早く行ふべきを本義とす然
れども喪家の都合にまかすへし。

四、誅詞を死者に告すは招魂以前に執行すへし。

五、喪主は父母の喪には長子の勤むるが至當也妻子兄弟姉妹其他附
籍たりとも血脉の遠近を問はず戸主は喪主たるへし。

但事故あるか又獨身にて相續人之なき死者は生前特に懇親にせ
し者代理たるへし。

一六、歸幽の旨を本部また各所講各地附屬に従ひ通達し教祖大神を祭

祀し歸幽奏上式を執行し幽冥の救護を仰ぐへし該祭には忌服なき
親族必ず参拜すへし。

一七、喪主は喪服を着するを本義とす然れども止むを得ざれば通常服
を用ゆへし親族及び従者等又家人等も相當の衣服を着すへし。

一八、昇夫は白丁烏帽子を着すへしと雖ども略すれば袴のみにても苦
しからず。

一九、吊容に茶飯をすむるは外來を謝し勞を慰むる禮なれば喪家應
分の設をなすべしと雖ども來吊するもの滋味を食して快樂をなす
べき時にあらざれば決して珍味を以てもてなすべからず。

二〇、招魂式を行ふ後は發葬の時迄饌を備へて祭るへし。
但其家々の分限に應じ供物を爲すへし。

二一、葬地を定めぬれば地鎮祭を行ふべし是は新墓地を定めし時なり。
舊來の墓地なれば地鎮祭は執行せずと雖ども妨なし。

二二、但地鎮祭を執行する時は忌服なき親族参向すべし。
新舊共に墓地を定めたる上は穴を掘るべし穴は深きをよしとす
穴の旋巡には幕を張り竹を四方にたて注連繩をはりおくべし。

但堅固にする時は穴中を石構にするこどもあるべし。
三、棺は寢棺を本義とすしかれども喪家の都合により坐棺に造くるも妨げなし。

二四、入棺は喪主を初じめ親族の者取扱ふへしと雖ども其家々の都合により介添を仕ふこどもあるへし。

二五、忌明に至らば速かに靈舎へ合祀すへし。
但忌明は五十一日目を本義とす。

第二節 教師心得

一、喪家は其より歸幽の旨を告來り葬儀を依頼すれば本部は大教會所各地方は其所講に於て先教祖大神を祭祀し歸幽奏上式を執行し死者の靈魂の爲に幽冥の神助を仰ぐへし。

但此時喪家に告て忌服なき親族をして參拜なさしむへし又喪家の都合に依り埋葬後と雖ども必ず執行すへし然る時は教師出張以前に其旨を本部(講所)に申し出へし。

二、奏上式畢れば速かに喪家に到り葬儀の等差(並特中)を喪家の相禮者に議り發葬の時日及祭員の多少を定め祭具葬具等を調造すへき物品

を示し諸事遺漏なく注意して指揮すへし。

但等級を定むれば行列書を認むへし。

三、祭員は死者現世中の汚穢を祓除靈魂をして幽冥の神徳に預らしむ永遠不滅の神と成りて該家の守護たらむ事を祈願し死者の靈魂に満足を得さしむる祭儀を行ふ者なり故に其禮式を懇篤に誠敬を竭し教祖大神に祈請し靈魂を慰め元々の處に安鎮なさしむるを

至要とし且遺族を扶けて哀情を慰ましめ遺憾なからしむべし其他百事注意して鄭重に執行すべし。

四、喪家の貧富貴賤に應じて祭式に整畧有りど雖ども固より死者の靈魂を安鎮し遺族の心を慰むるに於ては差異なき様に祀を執行すべし

五、祭員は遺族の哀情を扶けて慎終追慕大禮を勤むる身なれば万事心を付けて龜漏なきを至要とすべし。

六、祭員六級以上は齋服冠着用するを本義とす。
但喪家の都合にて畧するときは狩衣立烏帽子にても妨げなし。

七、同七級以下從大講義は淨衣正服たりど雖ども畧式は直垂を用ゐるも妨げなし。

故(贈)位爵苗字某命靈主

但諡号あらば何某所に挿入すへし

裏面

年号何年何月何日生

同何年何月何日歿及年齢

但歿の字は貴賤上下の差別なく用ゐるなれども等差を區別す

るときは三位以上に薨五位以上に卒六位以下無位の士民迄

は死と記すへし女は左の通表面に里方の氏名を入れ裏面に

は何苗字何某妻又妾ならば妾と書べし。

故苗字氏何比賣靈主

裏面

年号何年何月何日生

年号何年何月何日歿

但妻妾の二字は貴賤上下の差別なく用ゐれども等差を區別す

れば五位以上の嫡妻を室と書き妾を側室と記すべし六位

以下士民は妻妾とすべし教師六級以上但權少信教以上も

之に准すべし。

故(贈)何教正苗字何某命靈主

故(贈)何信教苗字何某命靈主

裏面書式前に同じ依て是に畧す以下之に准へ

中葬靈主書式

故何位爵苗字何某比古靈主

故(贈)何講義苗字何某大人靈主

故(贈)何信徒苗字何某比古靈主

故(贈)何職苗字氏何某比賣靈主

但教級有りし死者贈職有らば級名を冊除し職名に換ふるも妨

げなし無職無級の人左の書式に記すべし。

故苗字何某比古靈主

故苗字氏何某比賣靈主

並葬靈主書式

三級信徒より級外二等まで

故(贈)權訓導苗字何某比古靈主

故(贈)何級信徒苗字何某比古靈主

故苗字何某比古靈主

故苗字氏何某比賣靈主

但十五年以下七年迄の男女子は特中並の差別なく左の如く書

故苗字何某那の子靈主

但七年未滿那の子の女子は左の如く書くべし。

故苗字何某那の子靈主

故苗字何某那の子靈主

墓年号何年月日何某長男と記すべし。

故贈位爵苗字何某之奥津城又墳墓

但墓標も之に准へ裏面書式は靈主の書式に同じ尤死者の履歴

等記載する奥津城ならば生死年齢等は文中に書加ふるが故

に別に記入するに及ばず中葬以下も何某大人産比古等

銘族書式奥津城又墳墓等の字に換ふるのみ依て此所に贅せず

故贈位爵苗字何某之概

右は上中下の差別なく書く義に異体無ければ是例に准へ旗

の地合は白羽二重白絹木綿麻布等喪家の分限に應じて裂る

べし猶斂具葬具祭具行列等の事は附録に就て見るべし。

甲、特葬祭式

第一節 歸幽奏上式

歸幽奏上は貴賤上下賢愚男女の差別なく教祖大神に奏上死者生前の汚穢を祓ひ幽冥の神助を祈仰るの式にして死者の靈魂を安鎮するに最も緊要なる祭事なり。

當日神前を装束す

先祭員一同着座

次祓主案前に進み祓戸大神を遙拜す

次一拜拍手

次祓詞を奏す (第一節)

次盥水行事

次大麻行事 但解除係之を務む

次祓座を撤す

次齋主神前に進み着坐

一同拜伏

以下應之

次 齋主祇候し畢て復坐

次 供饌

次 神事を唱ふ

次 祝詞を奏す (第二節)

次 撤饌

次 退下

此式に參拜する人は喪家の親族にして忌服なき者立會べし。

第二節 地鎮式

此式は墓地を定め墳を掘る初めに其旨を地主神に告る祭式なり此時も喪家の親族にして忌服なき人立會すべし。

先墓地の四隅に忌竹を立て注連繩を引廻し木綿を垂で中央に薦を敷き高案を構へ柵をたて神籬とし前に案を置き神供の臺とす敷設畢れば祭式をはじめむべし。

但被式は歸幽奏上式に同じ依て之を畧す。
先 祭員一同着床

一 同應之
一 同平伏

次 齋主神籬の前に進み再拜短手竟て復床

次 供饌

次 神言を唱ふ

次 祭文を読む (第四節)

次 再拜短手

次 撤饌

次 神籬を撤す

次 退下

但右兩式は相當なる供物に正略法を設け執行すべし。

一 同拜伏
一 同應之

第三節 戒諭式

此式は喪主及び家族親族等の方向を定めしめて追慕の心得を示すが故なれば葬儀に着手せぬ以前に執行すべし。

但齋主は傍坐するのみにて副齋主戒諭文を朗讀するを本義とす中
先 正副齋主を始め殯歛の前に着坐
先 正副齋主を始め殯歛の前に着坐

次 副齋主殯歛の前に進み一揖側面に就く
 次 齋主以下着坐
 次 戒論文を朗讀し畢て復坐 (第五節)
 次 退下

第四節 誄詞式

誄具調進畢り時刻至れば先喪主を始め家族親戚侍者等禮服を着し靈
 嗽き遺體に對ひ一揖すへし。
 先 齋主を始め祭員殯歛の前に着坐、主以下全上、
 次 齋主殯歛の前に進み再拜
 次 誄詞を告ぐ (第六節) (第六節の二)より(第六節の七)迄
 次 再拜短手
 次 喪主以下拜禮
 次 祭員一同拜禮
 但し誄詞は喪主又は親戚の人讀むを本義とす然れども齋主に
 依頼する事あらば之を勤むべし。

第五節 祓式

喪家の神壇の間にて執行するを本義とす但し喪家の都合により止む
 を得ざれば遺體を置く所に於て行ふも妨げなし然る時は祓式の裝束
 敷設を爲す以前に盥水大麻を以て其構場所を清むべし裝束敷設は神
 籬高案八足盥水大麻供饌等を爲すが本義なれども喪家の都合により
 遙拜のみにても苦じからず自餘の祓式も之に准ふ。
 先 祭員一同着坐
 次 降神行事
 次 神饌を供す

此の間管攝
 此の間奏樂

次 祓詞を奏す (第七節)
 次 盥水行事 係員靈主靈床をきよむべし
 次 大麻行事 但全上
 次 撤饌
 次 昇神行事
 次 祓具を撤む

此の間奏樂
 此の間管攝

但し祓具は皆河海に流し捨つ又降昇神行事に菅搔供撤饌に奏樂あるを本義とす然れども喪家の都合にて畧するも妨げなし。

第六節 遷魂式

此式は靈主を設けて死者の靈魂を招き鎮祭するなり依て別間を洒掃し其間の上座に靈床を設け置き靈移の後靈主を移す坐となすべし又殯歛の前に白麻白木綿又は薦を敷き高案に靈主を安置し左右に紳を立て五色絹又は紅白の絹畧すれば紙にても下垂を着け(特葬ならば鏡劍玉を着く高案の上に構ふへし又は花瓶に時花之なき時は造花を建つるも妨げなし祭式の大正畧に依て増減すべし
先 齋主々神の前に進み一揖
次 遷魂奏上詞を奏す (第八節)
次 再拜短手
次 退下
次 齋主を始め喪主以下殯歛の前に着坐
次 齋主殯歛の前に進み一揖

次 靈主の扉を開き遺体に對して据おく
此の間菅搔

次 齋主再拜魂詞を告ぐ (第九節) 一同拜伏
此の間奏樂

次 齋主玉串を奠す
此の間奏樂

次 喪主親族玉串を奠す
此の間奏樂

次 祭員一同拜禮
此の間奏樂

次 撤饌
此の間奏樂

次 齋主靈主の扉を閉づ
此の間奏樂

次 副齋主靈主を捧げて靈牀に移す
此の間奏樂

御酒洗米等を供て發葬の時刻をまつべし又副齋主無き中葬
以下は靈主を靈牀に移すは齋主兼務すべし以上の式畢れば。

第七節 入棺式

先 遺體を棺に納む

但衣服は白綸子白綾白縮緬白絹木綿杯其喪家應分の物を服す

次

棺内に褥を敷き面部に白絹を覆ひ新衾を以て緇遺體を包み靜かに棺中に納め充袋茶香粉散石灰を以て遺體の動ざるやうに詰むべし寢棺ならば枕を据ゑ仰向に臥さしむ坐棺ならば衾を省くも妨げなし。

但棺内に納むる物品は筆墨硯紙其他生前に愛蓄せし品又脱齒

次

棺を槨に納む 臍緒等なり金銀銅鉄の制物は用捨すべし納むべき物竟りなを置き裏衣を納め畢らば正坐に發子を構へ棺を据ゑ其上に墓誌

向ひむが爲に前字を記しおくへし寢棺ならば足の方を棺面とす
次 退下

第八節 發葬式

此式は葬日遺體を埋葬地に送るが爲に出棺前に於て其理由を靈主に告げ又遺體の分魂にも申し人生永遠別の式なれば哀情を察知し懇切に執行すべし。

先 齋主を始め靈前に着坐

次 喪主家族親族着坐

次 齋主靈主の前に進み再拜短手開扉

此間奏樂

次 供饌

次 齋主靈主の前に進み再拜

此間奏樂

次 撤饌

此間奏樂

次 閉扉

次

退下
齋主棺前に着坐

一同從之

喪主以下着坐

齋主棺の前に進み再拜短手

供饌

齋主發葬詞を告ぐ (第十二節)

玉串行事

喪主家族親族玉串

祭員一同

撤饌

齋主を始め起坐

喪主家族親族棺前に進み一揖側に侍坐す

右は遷魂式と發葬とを同日にせざる式にして之を本義とす又

遷魂と發送と同日にするは畧式なれども喪家の都合にて兩式

此間奏樂
此間奏樂
此間奏樂
此間奏樂

先

齋主を始め棺前に着坐

喪主家族親族着坐

齋主棺前に進み再拜短手

供饌

齋主發葬の詞を告ぐ (第十二節の二)

撤饌

齋主以下起坐

喪主家族親族棺前に進み一揖側に侍坐す

典禮正列係(兼務)行列附を讀み各員携ふべき品物を授け庭上に列

を立てしむ

但夜中ならば門内外庭上に燎火を燃く又は燈燈を點すべし。

出棺

此時樂を奏す棺は玄關又は露地内に大輦に据る屋を覆ひ裝飾

竟れば昇人進み默拜して昇出す。

此間奏樂
此間奏樂

第九節 葬場式

葬祭所に於て埋葬前に行ふ式なり葬家の都合により豫て設立したる

葬祭所の外郊の前又は便宜の地にて行ふも適宜たるべし。

左右に大神に五色絹を着け祭場の地には薦をしき正面の上壇にはひ

庭上に登子をおき棺を据る所とす。五色絹に鏡劔玉を着くべし

先行列近づけば樂を奏す着棺すれば門外に出迎ふ葬場詰の祭員前

導して棺を登子に据さしむ。但此時典禮正列係に令して銘旗墓標其他の葬具等を便宜の所

に立しむ備櫃は帷内に昇き据齋主祭員着すれば典禮の案内

を待て各々着床す夜中ならば燎火灯燈等を點す。

次 次 次 次 次 奏樂 齋主を始め着床 喪主親族着床

正副齋主棺前に進み一揖 前扉を開き一揖して復榻

次 次 次 次 次 供饌 齋主棺前に進み再拜 安命詞を告ぐ (第十三節)

但外柳宮作にて扉を付け内に簾及び幌を垂れたるにあらざれば此條を畧す。

但此葬場式城地にて行はゞ直埋葬式を執行ふへし小畧すれば

此間奏樂

此間奏樂

此間奏樂

三十
居室にて行ふも妨なし齋主は埋葬の場に關係なきが故に墳
地に到らざるも妨げなし。

第十節 埋葬式

此式は喪主を始め親族及び家人等の專行ふ所なりと雖も祭員其場に
臨みて埋葬詞を告ぐべし葬祭所と埋葬地と距離あらば行列其所に到
着すれば祭員墳區係出迎へ先導して棺を墳前に据る喪主及び親族家
人又會葬人等各標木を立て其所を區別し扣所とすべし。

先 祭員墳區係及喪主親族會葬人墳場に到る
次 副齋主棺前に進み埋葬詞を告ぐ (第十四節)

一同應之

次 再拜短手

但此時葬主親族手を添ふ墳區係よく注目して輕忽なる事なか

次 副齋主切麻を墳内に投散すへし

次 喪主親族土を撥む

次 墳區係墓誌を收め土工をして埋めしむ

次 墓標を建て銘旗を立てるも妨げなし

次 四面に垣を周らし注連繩を曳廻し正面に鳥居を造り左右に木燈

籠を立て眞榊其他の葬具を陳列し式畢らば不用品は取除べし

次 副齋主墓標前に進み再拜短手

次 喪主親族拜禮

次 會葬人一同拜禮

但墓守をして侍衛せしめ夜は點燈及庭燎を焚かしむべし。

第十一節 清祓式

此式は出棺後祓主及び解除係家に留りて執行ふへし該家内總て葬儀
に關係せる祭員其他一同を清め祓ふか爲なり故に死者に就きて汚物
の残れるあらば掃除して清潔に爲し水火を改め祓主を始め一同沐浴
すべしと雖も略すれば手洗ひ口嗽き然る後平常に構へたる神床又
は便宜の間にて祓坐を設くべし
先 祓場を設くる事常の如し

次 次 次 次 次
 被主及係員着坐
 被主案前に進み遙拜す
 被詞を讀む (第十五節)
 盥水行事
 大麻行事

但解除係之を勤む祭員及家人家内の間毎を清む又葬送より歸れば各員を被ひ清めて門内に入る又時宜によりて沐浴する
 此間奏樂

第十二節 家祭式

此式は葬儀の上執行する祭典なり依て清祓の後に行ふなり。
 但葬家の都合により埋葬の翌日に爲すも妨げなし。
 先 齋主を始め一同着坐
 喪主又親族着坐
 齋主靈前に進み再拜短手。
 此間奏樂

次 供饌
 但親族其他の人より備品あらば別案を構へ供ふへし。
 此間奏樂

次 齋主靈主に告辭 (第十六節)

次 再拜短手

次 齋主以下神言を唱ふ

次 齋主玉串を奠す

次 喪主及親族玉串を奠す

次 祭員一同拜禮

次 撤饌
 此間奏樂

次 但喪家の都合により猶豫することもあるべし。

次 閉扉
 此間奏樂

次 但玉串供饌共に其儘猶豫する時は閉扉を爲さず。

次 退下

但靈前の裝飾は五十日祭迄は其儘に置くべし又時の花の類は時々指替へし。

第十三節 毎十日祭式

自十日 至五十日

歸幽の日より十日毎に祭員喪家に到り祭る式なり。但五日百日祭迄は毎日家族に於て相應の饌物を供へ十日毎に祭員を請じて祭るべし齋式は家齋式に同じ依て是に略ぶきつ毎旦暮喪主及家族等禮拜するには靈拜詞を申し死者の爲に教祖大神の神助を請ひ軽忽なからしむべし。

第十四節 五十日祭式

是迄五十日に至れば忌明と稱へ清祓を爲し新靈主を家廟へ合祀する事世間通常と成りたれども本教に於ては満日迄は忌あるが故に通常五十日祭を執行し五十一日を以て忌明清祓並に合祀式を執行するを本義とす祭式は毎十日祭に同じけれども十日より四十日祭迄供物又奏樂等を略す時は五十日には町肆に執行すべし。

第十五節 忌明清祓式

早旦(五十一日) 家内を掃除し水火を改め髪を理め爪を剪り沐浴訖れば祓坐

を設くる事前と同じ但其家々の都合に依れば五十日祭を本日に合併して執行するも妨げなし。

先 齋主を始め祓坐に着く
次 家主及親族家人坐に着く

次 盥水行事
次 大麻行事

次 但祓所及び家内の間毎を祓清む
次 祓主案前に進み祓戸神を招降す

此の間管攝
此の間奏樂

次 祓主祝詞を申す (第廿四節)
次 解除係切麻を祭員及家主親族に授く各自順次に之を取て拂ふべし

次 但左右と三度拂ふべし。
次 解除係切麻盥水を以て其家の内外を清む

次 撤饌
次 祓主祓戸の神を送昇す

此の間奏樂
此の間奏樂
三十五

次 次
退下 祓具を撤す

第十六節 家廟合祀式

此式は五十日祭訖りたる翌日執行すべし新靈主を祖先の靈舎に合祀
るを云ふ先靈舎の前に木綿（又は薦）を敷き鏡劔玉を着け左右に立て又榊
に木綿を垂て其間の四隅に立て注連繩を曳回らすが裝飾付なれど
も該家々の分限に任せ適宜に爲さしむべし。

先 齋主を始め家主及親族着坐す
齋主靈舎の前に進み再拜短手
家廟に對ひ合祀の旨を告ぐ （第廿五節）

次 新靈主の前に一同着坐す
齋主靈前に進み再拜
動坐の旨を告ぐ （第廿六節）

次 再拜短手
副齋主靈主を捧げて靈舎に移す

此の間奏樂
一 同應之

次 開扉
次 供饌
次 齋主靈舎の前に進み再拜
次 安鎮詞を告ぐ （第廿七節）
次 一拜拍手
次 神言を唱ふ
次 齋主玉串を奠す
次 家主及び親族玉串を奠す
次 撤饌
次 閉扉
次 再拜短手
次 退下

此の間奏樂
此の間奏樂
此の間奏樂
此の間奏樂
一 同連聲

第十七節 百日祭式

此式は五十日祭に同じ依て之を畧す本日は墓標を除け墓碑を建つべ
し事故有りて後ることも一周年祭の期は過す可らず偕奥津城を造る形

三十八
は土を圓形に築立其廻りを耳石にて丸く築上（頂上に芝草を植る）墓碑を建
つべし又松櫛の類を植るもよし然る時は墓碑を前に建つべし又植木
なくして墓碑のみ建る事もあるべし。

先 齋主墓標の前に進み一拜
次 告文を讀む （第十八節内）
次 再拜短手
次 墓碑を建つ
次 齋主並家主及親族拜禮
次 退下 是條迄は特葬式の順次なり

第十八節 靈舎合祀式

此式は各所講社の神殿の側に鎮祭せる祖靈舎に靈主を安置する云ふ
安鎮するには必教祖大神に依頼せざる可らず故に歸幽すれば先其旨
を上奏し後に葬祭を行ふ故に此時も上奏し益靈魂安撫の神助を請祈
奉り然て後靈祭を執行すべし式は歸幽奏上式に同じきを以て此所に
畧す此理由ある事を了得て神祭式を履行する家に於ては該家の靈舎

此式は百日祭後に執行すべし事故
有ば春秋皇靈祭には必執行すべし

にも教祖神の神號を必鎮祭するを本義とす 教祖神々前の式訖れば

先 齋主を始め齋員並家主親族祖靈舎の前に着坐

次 齋主祖靈舎の前に進み再拜

次 開扉 此間奏樂

是より前新靈主を祖靈舎の正面に据置く。

次 齋主諸靈主に行列の詞を告す （第三十節）

次 齋主新靈主を靈舎の内に安置す 此間奏樂

次 再拜短手 一 此間奏樂

次 供饌 此間奏樂

次 新靈主に告辭 （第卅一節）

次 神言を唱ふ 此間奏樂

次 齋主玉串を奠す 此間奏樂

次 家主及親族玉串を奠す 此間奏樂

次 齋員拜禮 此間奏樂

次 撤饌 此間奏樂

次 閉扉 此間奏樂

次 退下

第十九節 墓所式

此式は家廟合祀式畢りて後執行すべし然れども本日混雑なれば翌日に至りて執行するも妨げなし前以て墓域を掃除し假屋を構へ祭具等を用意なし置くべし當日早旦墓前に案を設け薦をしき置べし家主及親族参向の上墓守に令て供物を調へ盥水又時花あらば竹筒にさして供ふべし。

但此時祭員全行すべし。

先 齋主又は祭員墓前に進み再拜

次 供饌

次 祭文を讀む(第廿二節)

次 家主及親族順次に玉串を奠し拜禮すべし

次 撤饌

次 退下

乙、中葬祭式

中並兩葬式に於ても特葬式に準據て歸幽地鎮戒論祓遷魂入棺と順次に執行するを本義とす然れども中並の兩式は日數且時間等を厭ふが故に畧法を以て左記の通りになすと雖ども成るべくは特葬式に倣ひ取扱ひあらむことを希望す。

第一節 戒諭式

特葬に異ならざれども只戒諭文を朗讀するを齋主の任とするのみ。

第二節 誄詞式

特葬に同じ。

第三節 祓式

先 被主被戸大神を遙拜す
次 祓詞を讀む

次 鹽水行事
次 大麻行事
次 被具を撤す
次 退下

第四節 遷魂式

先 裝飾に當りて眞柩に着る鏡劍玉を除くの外特葬に替ることなし。
次 齋主を始め喪主及親族殯斂の前に着く
次 齋主棺前に進み一拜拍手
次 靈主の扉を開き遺體の方へ向く
次 遷魂詞を讀む △ 微音結文三唱
次 但中葬以下は奏樂を畧す喪家の好みあらば奏すべし。
次 靈主を正面に向く
次 再拜短手
次 齋主玉串を奠し拜禮
次 喪主及親族會葬人順次に玉串を奠し拜禮

次 靈主の扉を閉
次 靈主を捧て靈牀に移す
次 安坐訖れば酒饌を供す
次 退下

但裝飾同上

第五節 入棺式

遺體を棺内に納むる作法に於ては特葬に替る事なしと雖ども死者に
着せしむる衣服白綸子白綾白縮緬の類を畧き白絹白麻木綿等を用う
べし然れども喪家に於て着用なさしむるは妨げなし又棺内に納むる
物品も適宜たるべし墓誌も喪家の適宜たるべし。

第六節 發葬式

先 齋主を始め喪主及親族着坐
次 齋主棺前に進み再拜
次 供饌
次 發葬詞を讀む

次 玉串を奠す
 次 喪主以下
 次 撤饌
 次 退下
 次 贊者行列を整ふ
 次 但夕ならば庭燎を焼く又た點燈を揚ぐ
 次 出棺

第七節 葬場式

先 裝飾構前に同じ五色絹を紅白絹に換用うべし外は替ることなし。
 行 行列近づけば葬場詰の祭員出迎へ先導して城前に登子を構へ棺
 を据さしむ
 但贊者令して銘旗墓標其他葬具を便宜の所に立さしむ式畢ら
 ば取除くべし
 次 齋主を始め喪主及親族會葬人着榻
 次 齋主棺前に進み一揖

次 供饌
 次 齋主棺前に進み再拜
 次 安命詞を讀む
 次 埋葬詞を讀む
 次 玉串を奠す
 次 喪主及親族會葬人
 次 撤饌
 次 退下

第八節 埋葬式

先 祭員喪主及親族城場に至る
 次 棺を城に移す但此時喪主親族手を添ふ
 次 贊者切麻を城内に投散すべし
 次 喪主親族土を搔む
 次 墓誌を収む
 次 墓標を建つべし

但銘旗は目的の爲に立て置くも妨げなし。
次 齋主墓標の前に進み再拜短手
次 喪主親族拜禮
次 退下

第九節 清祓式

特葬式に同じ。
毎十日五十日祭式迄 同上
但裝飾付備物祭員々數を應分にするの差ひあるのみ。

第十節 忌明清祓式

第十一節 家廟合祀式

但裝飾付の中五色絹鏡劍玉等の物品に取捨あるのみ。

第十二節 墓所式

第十三節 靈舍合祀式

第十四節 百日祭式

是條までは中葬式の大略を記せるなれど喪家の都合により特葬式の中を採用ゐることも差間は之なきなり。

丙、並葬祭式

歸幽奏上式地鎮祭式は中葬式に同じ只祭員を減じ祭式を畧するまでなり。

第一節 戒諭式、誅飼式

中葬式に同じ。

第二節 祓式

中葬式に同じ。

第三節 遷魂式

中葬式に異らざれども供物を少畧すべし。

第四節 入棺式

中葬式に替る事なけれど只死者に着せしむる衣服白麻白木綿又は金巾に替ふるのみ其他異なる事なし。

第五節 發葬式

但供物を畧す。

第六節 葬場式埋葬式

第七節 清祓式

家祭式毎十日五十日祭以後百日祭迄式に替る儀なし只諸事畧便に執行し喪家の煩を厭ふのみなり。

丁、其他の祭式

第一節 式年祭式

此式は一周年三年五年十年二十年の追祭を執行する式なり此式は其相當せる靈主を靈舎より家内の清所に移して祭典を執行すべし祭式は百日祭に同じ。

但滿年にして祭るを本義とす又此時に當り春秋の時祭を爲さむと思はば合祀るも妨げなし。

第二節 正辰祭

此式は毎年死亡者の退去せし本日なるを以て靈舎に於て靈祭を執行するを云ふ教師を招待して其家主應分の祭事をなすべし。

第三節 時祭式

此式は毎年春秋二季(三月春季皇靈)祭の日先祖代々の靈主を合祀する大(九月秋季皇靈)

祭なり。

但事故あらば別日にても苦しからず又式年時祭共に執行する時は
先主神教祖大神を祭るべし。

第四節 例月祭式

此式は式年祭の外にして祖先歴世親族等の靈主を合せて月並の小祭
を執行する祭なり其日並は一月一日二月二日三月三日と十二月十二
日迄なり。

但當日差間あらば日をかへて祭るも妨げなし供物は適宜たるべし
時の花なども供ふべし。

毎日靈舎拜禮
此拜禮は朝暮怠る可らず。

第五節 本教大祭式

此式は本教に於て毎年三月廿四五兩日は教祖大神の大祭執行の日な
るを以て當日は中教會所講義所等に於ても相當に御饌を供へて祭典

を執行すべし。

但本社へは必參拜すべきが本義なるを以て大祭前後日を撰びて有
効の靈をも合せ祭るべし又各信徒の邸に於ても各家靈舎に應分
の饌を供へて禮拜すべし。

第六節 各所講祭典式

此間奏樂

先 祭員一同被場に就く

次 未だ奏樂之れ無地方は之を畧す。

次 各信徒參拜の者着坐

次 被主案前に進み被戸神を遙拜す

次 祝詞を奏す (第四十節)

次 盥水行事

次 大麻行事

次 被具を撤す

次 齋主神前に進み再拜短手

次 開扉又は捲簾

此間奏樂

次 供饌を唱ふ
 次 神言を唱ふ
 次 祝詞を奏す (第四十一節)
 次 玉串を奠す
 次 齋主諸靈舎の前に着坐
 次 齋主靈舎の前に進み再拜
 次 開扉又捲簾
 次 供饌
 次 諸靈舎告辭 (第四十二節)
 次 神言を唱ふ
 次 齋主玉串を奠す
 次 各信徒玉串を奠す
 次 齋員一同拜禮
 退下

五十四
 此間奏樂

此間奏樂

此間奏樂

此間奏樂

此間奏樂

此間奏樂

第七節 家廟巡拜式

此式は教師適宜に執行すべし。

第八節 復祭式

此式は是迄佛祭の各家改祭するを云ふ也改祭せんと爲るには先是迄の檀寺へ成規の通り復祭通知書を出さしめ然て後祭儀依頼の書を受手し該家に至り祖先親族の靈主を製造其他諸祭具等をも調度なさしめ日を期して本人に協議の上該家に参向して
 教祖神前に復祭の旨を奏上し次て佛前に復式の次第を告げ其より招魂式を行ひ安鎮祭典式をなすべし以上四式を合て是を復祭式と云ふ。

第九節 復祭奏上式

此式も前條特中並祭式に準據して執行すべし。
 先 當日神牀を裝飾すべし
 次 神牀の正面に教祖神々號を鎮祭し前の高案に神籬を立つ神號なければ比毛呂木のみにても妨げなし

次 但神籬ばかりなれば招神すべし
此間管攝 五十六

次 定刻祭員一同祓場に着坐

次 戸主家族着坐

次 祓主案前に進み祓戸大神を遙拜し畢て祓詞を奏す

次 盥水行事

次 但神牀及靈舎靈主を清め畢て祭員を清む。

次 大麻行事 同上

次 祓具を撤す

次 齋主神の前に進み再拜短手

次 齋主神前に進み再拜短手

次 供饌

次 但中等以下は奏樂は畧すも妨げなし。

次 齋主を始め神言を唱ふ

次 齋主祝詞を奏す (第四十五節)

次 玉串を奠す

次 戸主以下 同上

次 撤饌

次 但中等以下は齋主のみ奉奠して餘は畧すも妨げなし

次 再拜短手

次 退下

第十節 靈舎遷魂式

先 靈舎の前に進み着坐

次 齋主佛壇の前に進み復祭告辭 (第四十六節)

次 祭式係後取り人新靈主を高案に並べて佛壇の前に置く

次 齋主佛前に進み靈主を靈前に向け一拜拍手

次 遷魂詞を告ぐ (第四十七節)

次 靈主を閉扉して正面に直す

次 齋主を始め親族再拜短手

次 係員靈主を捧げ小床に移す

次 齋主を始め小床の前に着坐

此間奏樂 五十七

次 齋主靈主の前に進み再拜短手

五十八
此間奏樂

次 但中等以下は奏樂を畧すも妨げなし。

此間奏樂

次 齋主鎮祭文を告ぐ (第四十八節)

此間奏樂

次 神言を唱ふ

此間奏樂

次 齋主玉串を奠す

此間奏樂

次 戸主家族玉串を奠す

此間奏樂

次 但中等以下は奏樂を畧すも妨げなし。

此間奏樂

次 撤饌は猶豫するも妨げなし。

此間奏樂

次 但撤饌も前段に准ふ。

此間奏樂

次 再拜短手

此間奏樂

第十一節 改葬式

此式は多く官途に就き各府縣に寄留せる人又は然あらずして各業上によりて寄留せる人々の死去し遺體を假に其地に葬り置き後に本國に送達せむとする期に當り執行するをいふなり。

但改葬せむとするには太政官第二十五号明治十七年十月四日達墓地理葬取締規則第四條五條に準據し該所轄警察署の許可を受くべし取締規則附録によりて見るべし。

先 墳墓の四方に竹を葉付立て注連繩に下垂を着け正面に高机を構へ荒薦を敷設す

次 祭員墓前に着く

此間奏樂

次 齋主墓前に進み再拜短手

此間奏樂

次 供饌

此間奏樂

次 改葬詞告ぐ (第四十九節の甲)

五十九

次 神言を唱ふ
次 撤饌
次 退下

是迄は假葬場の式なり本國に歸りて後の改葬式は次條に記す所に據て執行すべし

此間奏樂
六十

第十二節 本國改葬式

何國にても其寄留地より死者の遺體歸着の上は(海陸とも)直に葬地に送り葬儀執行爲すが本義なり然れども遺族の都合によれば一應葬場に送り時日を定め執行する事もあるべし其は其時の遺族の心に任すべし葬儀式は寄留地に於て一應濟たりと雖も該家の都合にて再葬の式を執行せんとならば前條の葬式の例に准ふべし。

先 祭員一同祖先の墓前に着く
次 齋主(靈主或墓)前に進み再拜
次 齋主改葬詞を諸靈に告ぐ
次 再拜短手 (第四十九節の乙)

次 齋主棺前に進み一拜
次 供饌

此間奏樂

但奏樂は無しと雖も妨げなし。

(第四十九節の丙)

次 齋主棺前に進み遺體に改葬の詞を告ぐ
次 齋主玉串を奠す
次 喪主以下玉串
次 會葬人拜禮
次 撤饌
次 棺を壙に移す
次 土工をして埋めしむ
次 墓誌を收む
次 墓標を建つ
次 齋主次て喪主親族拜禮
次 退下

此間奏樂

第十三節 招魂祭式

此式は軍役に戦死せし兵士の靈魂を招祭する式なり本社は東京九段坂なる靖國神社に鎮祭爲し給へれど猶各府縣に設置の鎮臺并營所に於ても該所轄より出たる兵士の靈魂を招集し毎年祭典執行する其式なり地方の都合により本教々々師を招聘し來るとき參向して執行すべし。

當日早旦祭場の域内の四面に葉つき竹を立七五三繩を引廻し中央の正面に高案を構へ案上に神籬を据ゑ祭典中の靈坐とす祓場は別所に設くる事通常の如し。

但祭員の着床は祭場の右に司令長次官以下は左の方と心得べし祓式の時もかはる事なし。

第十四節 祓式

先 司令長官を始め祭員祓場に進み着床
 次 祓主案前に進み降神行事
 次 再拜短手
 次 供饌

此の間奏樂

次 祝詞を奏す (第五十節)
 次 盥水行事
 次 大麻行事
 次 撤饌
 次 昇神行事
 次 祓具を撤す
 次 退下

此の間奏樂

第十五節 祭典式

先 司令長官を始め祭員一同着床
 次 齋主案前に進み再拜
 次 招魂の詞を誦む (第五十一節)
 次 再拜短手
 次 傳供長以下供饌
 次 祭文を朗讀す (第五十二節) (第五十三節)
 次 神言を唱ふ

此の間奏樂
 此の間奏樂
 此の間奏樂
 此の間奏樂

種々乃物乎置高成天捧奉其乎平久安久聞看止恐々々毛白須

第三節 地鎮式祓詞

祓主勤之

掛卷毛恐支祓戸四柱大神等乃御前爾畏々々毛白左今度何某退去乎留以
天此地乃新墾築固米奧津城處止爲久欲爾須留附大地主大神乃御祭仕奉
止其幸爲留神事爾禍事無久手躓足躓無久執行米波志給止反白須

第四節 地鎮祭文

齋主勤之

此乃地乎宇須波支坐須大地主大神乃大前爾恐々々母白左何某伊今月乃
何日身失禮奧津城處乎定止牟覓求留此處毛志代々乃祖等乃遺體
乎莖留米都地志爾在波此處叙布佐波支處此乎置天善地波在止議定乎奴故
如此申狀乎所聞食諾此給比造留石垣乃崩留事無久動事無久天地乃共
其儘爾令在給止反恐々々毛白須
新地ナラバ(此所)毛志云々善地波在(自)迄ノ文(此處)叙善地乃善地
此所乎措波天在(自)止)ノ十七文字ニ換テ記入ス可シ

第五節 戒諭文

副齋主動之

教祖曰く太陽は萬物の親神なりと依りて按ふに心も日月より來り給
ふ心なり形も天地自然と生み給ふ形なれば無理に捨るにも及ばずと
論し給へるは即ちわが我と思ふわが身も天のわれ我物とては一物も
なしとの神詠と一般にして心の元は日神形の元は天地日月水火の神
徳により出たる物にして天造身化なる事を示し給へるものなり人智
人力の及ばざるものなる事を論し給ひ心も形も天地日月の物にし
て我物とては一物もなしとの給ひしなり然れば天地の物なる事疑ひあ
る可らず然る時は天命に背かず天命に任せ奉るか人の道なりとの意
なり何をか天命といふ天の御擬作を大切に勤めて天の御心に背かざ
るをいふ故に何事も生るも死ぬるも天命なれば苦に成る事なし只何事
次第行くも返るも生るも死ぬるも天命なれば御引取りなるべし又世
も天に任せ此世に置ても入用になき小子ならば御引取りなるべし又世
の爲に少しにても相成者ならば快よく相成ものとのたまひしは教祖
の天命に任せ給ひしなり然る故に天地一躰生通の神と成て人に齋れ
給はる事を思ふべし皆の人あるに迷ひ無きに迷ひ生に迷ひ死に迷ひ
迷ひ盡して身の終る事を知らず元來天地より來りし心なれば形は假

の器物にして此處に顯れたるのみ其中の活物が心なれば此心を大切
にすべし此心が大神の御分心なれば大神と同魂同躰なる事を了得て
天に任すの外に樂みはなしとの給ひしなり是即ち樂天安命不生不滅
生通の御教なり然れども現身なりし時身にも心にも行ひし事ごもの
善行は少くして惡き所爲の多からむには神人一躰同根同躰の場に進
むもしらに退くもしらに思ひ感ふものも有りぬべしさるは人智は限
りありて形にのみ心をよせ我を離れぬにより思ひ感ふもの少ながら
す之により道の誠を取外して天に任する事能はず兎角御分心を穢し
天の御擬作を怠り彌勤めに勤め行ふべき忠孝の本を忘るより過犯
し罪穢をも免れざるなり總て枉事罪穢は神の惡み嫌ひ給ふが故に教
祖神も善事は務めても猶取たまへ惡しき事をば拂ひ給ふよと論じ給
へるなりすべて善惡應報は此現世のみのものにあらず幽冥に於ても
其賞罰は通るべからぬは所謂幽顯一致の神理なり之に依て之を思へ
ば人の靈魂は日神の御心の凝結て心となり日月水火兩靈の神徳に依
てなれる形なれば我物にあらず天の物なる事を能く悟りて現世にあ
る間は親子兄弟親族日々家内の心得かたを辨へ教と道との規をよく

守り各自其職業を恪しむ日々難有き事を取外さぬやうに爲し幽冥
に隠れぬる後も神に任せ奉り神の恩頼に漏るゝ事なければ生死とも
に疑はす唯一心に成て神に任せ奉るの外なき事を納得するを斯道尊
信の教徒とは申すなり既に古歌にも生れ來ぬ先も生れて住める世も
退るも神のふところの中とよめるが如く大神の御腹の中にすみて他
し處に行へきものにあらざる事を思ひ幽顯一致神人不二と悟る時は
彌々神助を願ふべきなり神は人の爲善かれがごとおもほして夜晝の
差別なく守り幸へ給へば死者の跡を吊ふには速く教祖大神に乞祈奉
りて其人の世に有りし時過犯しけん罪穢有らむには見直し聞直し給
ひ高き神の列に入らしめ建き威徳をも世に輝かさしめ給へと祈まつ
るを肝要の務めとすべし其祈を爲さんには豫て御訓誠の七箇條五事
の教意を能く心得て道の修行をなす時は愛眷深き神明いかで見捨給
はんや必諾ひ愛み給ふ事疑ひあるへからず如此る時は唯死者の爲に
上なき善徳のみならず祖先より受繼く罪科をも償ひ吾身天命に従ひ
形体退去と雖も同じく天地同根万物一躰の神の列に入りて初め訣
れし親族にも再ひ見る事を得て共に歡び樂天安命生通の神と同徳同

席の位置に進まるゝが本教の眼目なれば教祖大神に依頼して誠の日
月と共にならん事を希ふべきものなりあなかしこ

第六節の一 誄詞

誄詞ハ其人々々由テ異ルモノナレバ其時々ニ作ルベシ誄詞トハ死者
ノ履歴ヲ累述スル哀言ナリ
安半禮何某乃命(大人)比古乃美魂耶奈杼現世乎捐天幽冥隱坐無如何
氏加我等乎置天獨退去坐耶奈族家等乃心忘留際毛涙爾久
禮感毛留人乃真心我留故爾忍比堪受奈然波在豫豆吾教乃御祖乃
常乃御論乎思比諦波禮形波乃器物豆爾志心曾古大神由受天備留反多主禮
波其主乃不生不滅事乎悟里天地爾宇知任世奉波天地止肩乎並留布神止
成天何事毛自由自在無止告給御言乎思波冥乃事波神爾仕世奉給
波思比或久毛倍有自自諾比坐天冥豆爾只一簡留天心乎以天教祖神爾給
給比高支神乃列爾入坐事波欸比無久美名毛遠世爾殘志給止反唯
爾思布心乃千々乃一言行誄言仕奉乎久平隱爾聞看止白須△

第六節の二 同

此誄詞ハ一級ラズリ試補迄相混シテ用ナク若シカヤラズリ教級ノ者モ準シテ

黒住教故何職名何某命(大人)比古乃靈乃前爾黒住教職名某告奉留事在
里聞給止申須汝何某乃神靈也現世爾存問波尋常乃人波爾且斯道
乃教乎以天世乃衆庶乎教導支禁厭乃術以天許々良乃人等乃心乎身毛哉
活志扶那給比御効績波誰耶人毛能知豆汝命(比女比古)波乎百年千年毛哉
止思比頼乎志△

第六節の三 同

此詞ハ女教導職並ニ禁厭教徒ノ死者ニ用ユベシ

黒住教故教職名何乃何比女乃靈乃前爾黒住教○○告奏事有里聞
給久告汝妹乃靈魂耶現世爾存志時若草乃女志爾在禮男爾勝天里可
美真心乎振起乃斯道乃教乎堅久守世乃諸人爾七條五事乃御訓御誠乎
說明志及禁厭乃術心乎竭志夥多乃人乃心乎活志身毛扶那給比其功
績波誰志也人毛能久知豆汝妹乃身波百年千年母毛止思比頼乎志△

第六節の四 同

此誄詞ハ中等下等ノ男女一般ニ用ユベシ

阿波連何級信徒何某(比古)乃靈魂乃前爾白汝(比古)爾哀言申左久委
詳爾聞給反止申須汝君耶波日月兩神乃造化爾依豆心毛形骸毛授那給比
何某(長男女)止去志年號月日乎生日乃足日止何某乃家乃愛子止分
婉給禮(波奴)父乃喜比不管朝夕爾撫給比養給志故爾璞乃年月乎累福成
長給志比程爾此乃家乎柘乃木乃彌繼々爾(家女)妹夫相親味相昵比相語
比何時迄毛氣含竹氣込集比節乃長人止存反給比子孫親族迄毛汝御身
乃齡波高砂住吉乃松乃相老豆爾志千年毛哉止請祈遠多里之△

第六節の五

同 此誄詞ハ家督ヲ其子ニユベシリ

安半禮何級教徒何氏乃前戶主(前戶母)何(比古)靈魂乃前爾黑住教○○○
何某誄言乃千々乃一言申左聞給反白須汝(比古)靈魂乃前爾黑住教○○○
速子孫爾親子草乃讓比比必安久面白久樂久妹夫相親美相語合々部何
時迄毛存生坐止親族等毛喜之比多里△

第六節の六

同 此詞ハ未ダ嫁セザル又附籍ノ人ニ用ユベシ

阿波禮何級信徒何某(比古)乃靈乃前爾○○○某告寸事有利委詳爾聞給反
汝(比古)波此乃家内乃某乃子止生出生給比成人給比故爾他家毛柘乃木

乃彌繼々爾給支乎(波奴)他家爾嫁給支乎(波奴)事故有天如此奈
賀良爾存生年平送迎反給乎志△

第六節の七

同 此詞ハ十五年未滿ノ男女子ニ用ユベシ

阿奈安波禮何某(耶女子)乃靈乃前爾告汝君耶波何某乃(長男女)止年号月
日爾何氏誰我家子止日月二柱神乃造化爾依天生出給比銀杏乃父君
作葉乃母刀自波申毛更里奈祖父母親族爾至迄愛子得多里若竹乃縁兒
得止多里喜比勇美色爾標結朝夕爾生志立天成人家繼(次男)若竹乃家名分
又天ハ半他家耶爾遣(左)女(子)ナ登取耶爲志(次女)三女他家耶爾(天)止以傳支給乎志△

第六節の八

同 六節ノ以下ノ文ヲ時宜ニ從ヒ至ル△印ノ

不意先頃由邪氣耶爾觸給比(比古)最悶熱成給比(比古)以氏大御神教祖神
請祈申天禁厭乃術波申毛更利那醫師毛迎種々爾手盡志治志奉止
藥乎獎米又家族親族等毛宇知集比食物毛勞支傳支本乃身爾活志
扶那奉止其詮毛八佐加之歎息止成波止思比掛毛泪乃雨爾袖乎

七十四
綾波止良
波半思
波左支
然波
在禮
豫天
教祖
乃御
論乎
思惟
波是
毛天
命止
誦米
給反
毛分魂
氏汝靈
魂此家
內乃
詣都
每爾
其禮
毛享
給比
愛給
止反
千々
乃一
言乎
申止
申須
墓所
爾子
孫乃
指乃
留都
爾其
禮毛
享給
比愛
給止
反千
々乃
一言
乎申
止申
須

第七節 遷魂式祓詞

祓主動之

挂卷母畏支祓戸四柱大神乃大前乎拜美奉豆白久乃此郷乃何某何月
何日爾現世乎去爾留依豆其靈乃爲爾教祖大神及產土大神爾乞祈奉豆
靈主乎造設豆遠支世迄毛此家内乃鎮米子孫乃八十連屬乃守護神止齋
比奉眞須牟如故申豆今乃葬禮爾預留諸人乃過犯留世穢有波乎祓比
清米給止須牟如故申豆今乃葬禮爾預留諸人乃過犯留世穢有波乎祓比
神乃心爾任世給比天翱利寄來留事乎令得給止反恐々毛白須

第八節 主神遷魂奏上祝詞

齋主動之

吾教祖止坐須宗忠大神乃御前爾恐々毛白久今何某我靈魂乎此乃靈
波爾綿垂手乃懸毛思利波然波在行如此去坐臥神爾任世給止波半親族乃心
限志在波爾將爲便無志今波只後乃御祭乎美麗久仕反汝靈乃御心乎慰
米奉留外波不長爾鎮里給比及葬留御遺骸毛汝君乃分魂乎止米給比從
乃守神止常孫親族等現身爾坐志時乃御姿乎飲慕奉其哉爾與都城所
今以後波子孫親族等現身爾坐志時乃御姿乎飲慕奉其哉爾與都城所
乎退支給愛參拜每爾其禮乎飲慕奉其哉爾與都城所
厚支御鍾愛乃陰爾隱比彌高支神乃列爾進美給比荒比健比給布事
無久平穩爾遷里鎮利坐止告須高支神乃列爾進美給比荒比健比給布事
辭別氏告久如左此靈主爾遷志奉御伽仕反奉止真故如此告須狀乎聞給止反申
坐奉里何日迄親族等側去受御伽仕反奉止真故如此告須狀乎聞給止反申
須

第九節 招魂詞

齋主動之

阿波禮何某乃乃靈乃前告久如去坐臥神爾任世給止波半親族乃心
波爾綿垂手乃懸毛思利波然波在行如此去坐臥神爾任世給止波半親族乃心
限志在波爾將爲便無志今波只後乃御祭乎美麗久仕反汝靈乃御心乎慰
米奉留外波不長爾鎮里給比及葬留御遺骸毛汝君乃分魂乎止米給比從
乃守神止常孫親族等現身爾坐志時乃御姿乎飲慕奉其哉爾與都城所
今以後波子孫親族等現身爾坐志時乃御姿乎飲慕奉其哉爾與都城所
乎退支給愛參拜每爾其禮乎飲慕奉其哉爾與都城所
厚支御鍾愛乃陰爾隱比彌高支神乃列爾進美給比荒比健比給布事
無久平穩爾遷里鎮利坐止告須高支神乃列爾進美給比荒比健比給布事
辭別氏告久如左此靈主爾遷志奉御伽仕反奉止真故如此告須狀乎聞給止反申
坐奉里何日迄親族等側去受御伽仕反奉止真故如此告須狀乎聞給止反申
須

第十節 遷魂祭詞

齋主動之

七十五

跡 爾乎多今暫留置且仕反奉久思止反印ノ分ニ

第十二節ノ三

此文ハ第十二節ノ一及ニニ繼合セテ取扱フベシ

○現身乃慣止如賀在支反由無禮今日乎葬日止定氏内外乃棺
乃板厚久廣久清久堅久作里具氏瑞乃御坐處止仕奉玩物賞物種々乃
物取添氏與昇奉里御館(此家)以下葬出坐米御葬地乃底津石根爾石垣
築固米瑞乃標垣結繞志長千世乃住處止齋比氏汝靈魂乃御名波放受左
失受波爲氏永世乃欽慕爾爲止嚴支石彫墓乃表止子孫乃八十連屬爾何
時迄毛參詣御祀仕奉久留倍事議設坐乎奉止爲氏家族親族乎始米友
垣又諸人迄毛現世乃御別波後自今乎限乃御波爾洩自各自慎美敬比
任奉氏捧持御旗乃列正久並立行幕持乃掃道乃御波爾洩自各自慎美敬比
護奉利送里奉止須故是以天御送乃御祭仕志供奉御物乎御心毛平
穩爾聞看志何事毛思欲事無久出坐須道乃八十洞恙無久後毛安久幸久
罷通氏真之平久鎮坐止世白須

第十二節ノ四

發葬告辭

齋主勤之

言卷波悲禮故職名何級信徒何某乃靈乃前爾申久左現世乃慣止爲氏形
軀波乎何時迄毛留米置在波今日乃降爾御葬式仕奉止須後毛安
申須狀乎御心毛穩爾聞看天罷坐路乃程波八十久万無延滯後毛安
久幸久出立罷通氏真之奧津城處爾鎮利坐世止御別爾進留珍乃御酒御食
乃種々乎所聞食止白須

第十二節ノ五

吊詞

諸人勤之

此詞ハ親友其外誰ニテモ葬式ノ時又ハ後日ニテモ死者ヲ吊フ時用之

安波連何某乃靈魂乃前爾白汝君也現身爾坐志時波最親支友垣爾之
美麗支御姿毛乎清明支御聲毛乎見聞朝暮言問交志乎里如何留邪氣爾觸
氏身毛乎心汚志給比奉昨枯多乃波乃顏色紅葉乃光榮句加在志里御姿毛乎今
日波萎米心花乃句比無枯乃乃色無我成給比最迫豆御聲爾多聞
止波耶言問見毛禮乃御答毛無久吹毛絶果禮將言便將爲便爾立氏只
比賤手卷線言味乃御答毛無久吹毛絶果禮將言便將爲便爾立氏只
獨啼毛妖止思欲杼米是毛人乃真情波加此歎比加申寸狀乎相諾比給比從

今後波教祖大神乃御側去任給比不滅神乃列爾加波給比天地止共爾
限無支樂乎成志給止申須受良仕給比不滅神乃列爾加波給比天地止共爾

第十三節 靈魂安命詞

齋主動之

阿波禮黑住教故職名何級信教何級信徒何某命大人比比古耶豫豆教
祖乃論志給反事乃如久心則神明本主爾志形無支物我留故爾古乃心
毛形無志今乃心毛形無志今乃心毛形無志今乃心毛形無志今乃心毛形無志今乃心
神乃造化爾志今乃心毛形無志今乃心毛形無志今乃心毛形無志今乃心毛形無志今乃心
給波幸有無乃中爾住支倍無物乎無志奈無支心止爾靈乃有留事乎令知
共爾止波有支留倍者爾不任神乎悟身志臨終留時心乎亂事無久變事
無久此身波乎天地爾打任世天止共爾不心乎離總豆斯道乃本意乎器動
波禮此身乎我波乎天地爾打任世天止共爾不心乎離總豆斯道乃本意乎器動
豆爾志心乃入物止思志布倍唯心古大神受豆奉爾人乎現身乃世乃慣止
御論有志事乎慎美思志布倍唯心古大神受豆奉爾人乎現身乃世乃慣止
免禮得傳神止成里給支倍由毛神理波久禮感此憂悲幸是毛人乃真心波爾在
術毛無久其言葉乎聞支倍由毛神理波久禮感此憂悲幸是毛人乃真心波爾在

素與乃物志我物有波留得奴命波禮支豆將爲便不在波今波
唯御靈乃御爲爾善事乎議爲豆只管教祖大神爾任世奉乃外無加留事那
抑人乃身乃此世爾顯禮出留事乃志乃化爾之父母乃心毛爾任世得受
妻子親族等乃力毛及總豆天命乃有波禮天命乃任爾長美大神乃廣久厚
支恩賴乎請祈奉豆今波與里本乃元乃心爾任世給比生々大神乃心爾飯
里給比唯筋一筋教祖大神爾總給比樂毛我樂止不思欲只天地乃樂乎受
給反白須事乎相諾比給反白須

第十四節 一 埋葬詞

副齋主動之

言波泪汲禮思波反悲禮悔乃八千度歎毛將爲便無波禮汝神靈波家內乃靈
壘爾齋鎮米置豆今如此遺體乎藏留奴柩乎奧津城乃奧深久葬奉止長幸故從
今波汝靈魂乃千世乃住處止生族家族等乃參拜仕奉其事乎聞看天石垣
乃動久事無久鎮里坐止世白須

第十四節 二 火葬詞 (其土地ノ分)

何々某乃奥都城乃御前爾申左久今日毛參來天拜美奉乎良久平久安久聞
看止申須

第十八節

墓參拜詞

同上

八十四

第十九節

十日祭告辭

祭主勤之

阿波禮現身乃世利波加定米無支物波有受阿波禮人乃壽命利波加賴難支物
波有禮里汝命大人比古乃神靈乃前白左某也去志何月何日何時
乎此顯世乃限止爲乎幽冥爾歸支給波最母哀久之甚母慨久親族等
八尺乃歎息爾歎如毛止爲幸便不知遂爾御掟乃任爾靈波乎靈主爾遷
奉里遺跡波乎墓所爾葬奉志加毛猶生族等乃心波爾現身坐志乃御姿
乎思出津見留物聞事々爾附左有間然仕波志反右有波如可爲
志加乎里杯朝暮語合部一昨日二日乎送都爾日波速毛過物行今波
十日乃御祭仕留布日成里實爾乃矢波流中々御心毛平穩爾聞看
坐奴左乃靈乃前爾打比人乃樵積奈木乃中々御心毛平穩爾聞看
珍都御酒御食種々乃物爾時乃花折豆奉久御心毛平穩爾聞看
汝靈魂波現世爾存生間波神乎敬比人乎愛給教祖乃御掟乃七條御教

乃五事乃神理乎了寧爾思比悟異教爾率受古橫道爾或布事無久唯
筋爾誠乎勤乎坐波禮教祖大神毛褒給比愛給幸事乎且波嬉久且波悅
思比彌々益々高支神乃列爾進味給比天地止共爾不生不滅乃歡比樂乎
毛極米給久布倍倍教祖大神爾請祈奉善久其神靈乎治米祭止爲留狀波見行
志聞看豆荒比健比給布事無久平穩爾鎮利坐豆子孫乃八十連屬爾家毛乎
身守給比幸反給止反白須

第二十節

二十日祭告辭

齋主勤之

此乃小牀爾齋奉留何乃某何々乃神靈乃前爾申左久既爾十日乃御祭仕
奉乃昨日今日乃味止乃思乎留今日波速毛二ツ日乃御祭日止成利爾部實爾月
日乃轉替事乃速事波手乎折豆數留禮毛浪路乎渡留黑船乃中爾焚留奈石
炭乃速久今乃魂乃幽冥爾巡里車乃別禮支事御鍾言都毛在波爾今波與利
最追豆汝靈魂乃幽冥爾巡里車乃別禮支事御鍾言都毛在波爾今波與利
比奉留心乃緒乎緩天倍親族等御前爾宇知集比御跡乎追手乃任爾事乎慕
四ソ日乃御祭仕奉良如申狀乎相諾比給比今日乃御饗止備反奉留珍
津御酒珍津御食乃雜々乎御心毛平穩爾聞看豆此家内乃守護神止成豆

八十五

子孫乃八十連屬守給比幸反給白須

第二十一節 三十日祭告辭

同上

阿波禮何々某乃靈主乃前爾申久左汝靈魂隱坐志其日利與日々並見波禮今日
奈三十日乃御祭仕奉留日止成爾里故是以豆今日乃御饗止親族捧持豆
獻留神酒神食及海川山野乃物爾至迄備反奉留狀乎御心毛平爾所聞食
宇豆那比給比日爾添豆教祖大神乃深支厚支御惠乃蔭爾隱比呂坐豆不生
不滅乃神止成豆此乃家門乎高久廣久茂志八桑枝乃如久合立榮給比夜
乃守日乃守爾守給比幸反給申須

第二十二節 四十日祭告辭

同上

故何某乃靈主乃前爾告久左日月波速毛過行者毛加今日波四十日乃御祭日
止成里爾故是以氏家族親族等來寄集種々乃多米津御食乎机代爾置
高成底備反奉汝靈乃御心乎慰米奉留狀乎平穩爾聞看氏今日乃御饗
乎飲給反告須

第二十三節 五十日祭告辭

同上

畏哉何某命大人比古耶耶乃靈前爾白佐久今日毛波五十日乃祭儀仕奉止
爲豆領美敬比奉豆御前爾親族等寄集比侍氏比種々乃珍御酒御食爾時
乃花(持)申(祭)糸竹乃音乎添豆備反奉久御心毛平穩爾聞看豆明日波與利
代々乃祖親族乃靈魂等止相共爾御心乎相昵比御力乎協世給比此家内
乃守護神止成豆家門毛乎子孫乃八十連屬夜乃守日守爾守給比幸反給
止反白須
辭別豆遠祖歷世乃祖親族乃靈等毛今日乃御饗乃珍物乎相嘗爾所聞食
宇豆那比給比止反白須

第二十四節 忌明清祓詞

祓主勤之

挂卷毛恐支祓戸四柱大神乃御前爾恐々毛白久左今日波何某我退去氏葬
式執行志比其日里與五十日乃祭毛昨日限乎留以豆此家内波素利與戸主乎始
生族家族爾至迄黃泉戸喫爾穢志水毛乎清久清爾改止米須故如此申須
狀乎平久聞看氏嚴乃魂乎幸比給比清米給止反恐々毛白須

第二十五節

五十一日祭告辭

祖先靈主

齋主勤之

何氏乃遠祖歷世乃祖等親族等乃靈乃前爾申久汝神靈等毛所知看如
久某乃神靈退去志其日與波禮今日波早五十一日止成里爾那故是以
天新靈主乎此乃靈舍爾遷志鎮奉我留爾如申狀乎聞看諸比給反申須

第二十六節

同

新靈主

齋主勤之

何氏某乃靈主乃前爾申久昨日汝靈魂乃五十一日乃祭任反訖波禮今
日波例乃任爾祖先等乃坐須靈舍爾遷志奉利留奈故如此申須狀乎聞看止
申須

第二十七節

家廟安鎮祭告辭

齋主勤之

昨日止云比今日止暮互明日川流氏激美無波支月日祭里爾既爾五十一日乃御
祭毛昨日限爾成畢波禮今日波此乃靈舍爾汝君乃靈主乎齋比鎮米奉禮
故如此申狀乎御心毛平穩爾聞看諸比給世々乃祖先等家族乃靈等止
相共爾親美呢比給比教祖大神乃深支御鍾愛乎被里布給比此家内乃守神
止成豆子孫乃末世迄毛御祭乎欲給進留珍乃御酒御食乎諸靈等止相

嘗爾聞食止申須
辭別氏白久左御相坐爾坐須遠祖歷世乃祖等家族乃靈等母今日乃御饗乃
珍物乎相嘗爾聞看止世申須

第二十八節ノ甲

百日祭告辭

但戶主後條ヲハ此儘其外ハ

齋主勤之

阿那安波連何々某命大人比比古乃靈乃前爾申左久梓弓眞弓楓弓月累豆利
今日波速久百日乃御祭仕留布日止成爾那故是以親族打寄汝靈魂乃神
心乎慰米奉止爲豆御酒波瓶曲爾盛据御食波土器爾高久盛上海乃物河
乃物山乃物野乃物鏡餅時乃花乃色香毛添豆備反奉爾久御心毛安爾所
聞看豆汝神靈乃顯世爾存在志時掟給志比御績乃蔭爾隱比家業乎恪味
勉天彌爾緋心安久樂久在經流事波專高久貴支恩賴爾依豆里奈利喜
比添美御祭仕奉狀乎聞看豆子孫乃繼々彌々倍家門乎高久廣久茂志八
貝葉枝乃如久合立榮給比夜乃守日乃守爾守給比幸反給反申須

第二十八節ノ乙

同

同 上

此乃家内乎守給比幸反給反申須

第二十八節ノ丙

墓碑建設告文

同上

此處爾葬奉禮何某乃與津城乃前爾申左久汝靈魂退去給比志故爾御掟
乃任遺體波是乃處乃底津石根爾埋米奉氏假爾御名乎標乃杙建設置
乎留今日波例乃任爾千世万世毛不放不失不朽碑文建豆汝神靈乃御名
申常磐乎堅磐爾殘志奉子孫乃八十連屬爾參拜美奉止長幸思我故爾如此

第二十九節

主神奏上祝詞

齋主勤之

桂卷毛恐支教祖宗忠乃大神乃御前爾恐々毛白左今日波志此乃教會所
(講義)所說教場爾附留何某我百日乃祭爾成我留故爾其靈主乎持齋支此
乃靈舍爾鎮米齋比奉止須如故此申狀乎相諾比給比子孫乃繼々遠永支世爾
留反大御心毛彌々益々寵美給比守給比幸比給比乃繼々遠永支世爾
例乃任爾祭乎享左志給比乞祈奉乎久聞看止恐々毛白須

第三十節

諸靈前合祀告辭

齋主勤之

此乃靈舍爾集鎮里坐諸靈等乃前爾申左今日波志何某乃靈乃教祖神乃
御左右近支所爾侍世奉仕反奉米乞祈申志故如此申乎左久諸比給比
今由後波相共爾坐氏柔比親比大神爾仕奉米志給比止反申須

第三十一節

新靈主告辭

齋主勤之

故(贈)官職位爵何信教(外何級信徒又級)苗字(氏)何某乃靈主乃前爾申左久汝靈毛
知須如久教祖大神及諸靈等爾申此乃靈舍爾靈主乎齋奉利奈故如此
申須狀乎聞看(聞給比)氏諸靈等止相親比相共爾大神乃御側爾侍比幽冥
乃深久厚支御鍾愛乎享給比止反申須

第三十二節

墓所祭文

齋主勤之

阿波禮何々命(大人)比比古千世乃住處止仕奉留與津城乃前爾白左此處志
毛遺體乎埋留所志在波禮女常毛荒自損止留大磐乎築立瑞垣乎結繞氏守護
奉乎久今日波何周年乃御祭日毛爾成乎留以最仔清久明久掃清米眞
神及時乃花波刺立珍御食物毛備反奉戶主乎始米親族及親比志多志味
給比諸人等爾至迄參集比天拜美奉久御心乎平穩爾聞看且某等我心
波爾忘々事無久緩武事無久例乃任爾仕奉波止爲毛仔年乃久支間爾不意毛

靈等毛聞看諾比給比進里置御酒御饌乎相嘗爾所聞食止申須

第三十四節ノ乙 式年祭告辭 三年以後ノ祭 同上

此乃靈舍爾齋比奉利坐世奉留何某命大人比比古乃靈乃前爾申久左汝某伊
去志何年何月何日爾現世乎去坐氏今波幽冥乃神列爾加波鎮坐須故爾此
家乃守神止常爾尊比敬比仕奉留今年乃今月乃今日波三年(十五年三十年)乃
御祭仕奉流倍其日毛爾奈回利來波親族家族諸人毛乎御前爾集氏反▽△汝
命云々祭以下一年

第三十五節 每季正辰祭告辭 同上

此乃靈屋爾齋比鎮米坐世奉留何某乃靈乃御前爾申久左汝命(大人)退去
給比其月日爾回來我留故爾御前爾御酒御食種々乃珍物乎備反拜味奉
留狀乎平久安久所聞食諾比給比此乃家内乎守給比幸反給比白須

第三十六節 時祭告辭 同上

此時祭ハ春秋皇靈祭當日執行スルモ妨ケナシ

此乃靈舍爾鎮坐寸何氏乃遠祖世々乃祖等親族乃靈等乃前爾申久今
年毛今日生日止齋比定米豆春祭(秋祭)仕奉留爲豆御前爾▽△珍乃御酒御
食海河山野乃物種々爾餅比鏡及時爾遇留花毛添豆進留狀乎各自御心
毛平穩爾相嘗爾聞看豆此家乃戶主乎始米親族家族爾至迄一比和比春
華乃咲津(秋月)乃心清明久打集比子孫乃八十連屬爾家業勉豆遠永支世
爾御祀美麗久令仕奉給比家門乎高久廣久令起給比夜乃守日乃守爾守
給比幸反給比白須

第三十七節 時祭式年合祀告辭 同上

何氏乃遠祖歷世乃親等親族乃神靈等乃前爾申久今年毛今日乎生日
止齋定豆春祭乎仕奉留(秋祭)合併何某乃神靈乃何年乃回爾當
乎以豆御前爾

第三十八節 例月祭告辭 同上

此乃靈屋爾坐須此家乃遠祖世々乃祖等字加良也加良乃神靈等乃前爾
白左久毎月乃例乃任爾今日波御前爾珍御酒御食乎備反奉豆御祀仕奉

留狀乎平久安久相嘗爾所聞食止申須

第三十九節

每日祖先靈拜詞

戶主動之

此乃靈舍爾坐須遠祖世々乃祖等親族乃神靈等乃御前爾白久左此家内乃
人等己我背向支爲留事無久和比昵比親美合比各々己我受得志職業乎
勤味勉米我喪无久事無久令在給比日々乃御祭令奉仕給止反恐々毛申須

第四十節

各所講祭典祓詞

祓主動之

挂卷母畏支祓戸四柱大神等乃御前爾恐々毛白久左今日母波志教祖宗忠神
乃御祭爾併世諸靈舍乃祭毛仕留祭員等乃枉事穢在波半乎祓反給比清米
給反恐々毛白須

第四十一節

主神奏上祝詞

齋主動之

此乃教會所講義所爾齋比奉留挂卷毛畏支教祖宗忠大神乃御前爾恐々
毛白久左今日波汝大神乃大御祭乎留以氏御側留諸靈等毛爾珍御酒御食乃

種々乎備反饗爲須止故如此白狀乎開看止白須

第四十二節

諸靈舍告辭

齋主動之

此乃大教會所講義所乃靈舍爾齋比奉留諸靈等乃御前爾黑住
教職名某慎美敬申久佐八十月日波在毛禮杯今日乎生日乃足日止定豆一
年乃大祭仕奉爲申廣前嚴乃眞神乎荒山乃清地利伊取伐來豆五色
乃絹乎取下垂左右爾指立野山爾生立留木々乃花乎手折來豆大瓶爾插
美御酒波大甕爾滿並御食波大土器爾盛足志波餅鏡波籬高爾重々豆及海
川乃鰭乃廣物狹物山野爾生留物波甘菜辛菜御水波玉瓊爾多々反堅盤
波堅固爾盛上百取乃机代爾並据奉及笛吹琴搔鳴波打遊比親族諸人毛乎
集々豆汝靈等乃御心乎慰米奉奈留毛爾故如此申豆今日乃御祭仕奉狀乎平
久安久聞看豆從今以後汝靈等波現世乎離豆幽冥乃神列爾入坐部禮乎
祖大神乃大御心母愛美給比撫給豆彌高爾高位爾進米給比彌廣爾廣所
乎得米志給比現身乃世爾坐志間飽受口惜久思欲志事母有米今波萬
事等御心乃任爾足比調心安久樂久坐事止思比奉久平穩爾聞
看輔比給比汝神靈等乃現世爾坐志久樂久坐事止思比奉久平穩爾聞
看輔比給比汝神靈等乃現世爾坐志久樂久坐事止思比奉久平穩爾聞

業乎子孫乃八十連屬爾絕留事無久令繼給比教祖乃御掟乃七條教乃五
事毛堅久守家名汚左勤締里清支名毛乎高支功乎今乃世爾立後乃世爾傳
米給比家門乎高久廣久茂八具葉枝乃如久令立榮給比每年乃今日乃御
祭美麗久志令仕奉給止反親族諸乃真心乎取持氏稱言竟奉止真久申須

第四十三節

家廟巡拜詞

每年靈社大祭中各家
靈舍巡拜ノ所用之
同上

此乃靈舍爾鎮坐寸遠祖代々乃祖等親族乃靈等乃前爾白久今日波每年
乃例乃任爾汝靈等乃鎮坐須靈社乃大祭仕奉夜晝乃差別毛不知神壽
豐壽々々奉齋比奉留其日在留故爾此御前珍御饗乎備反奉御心乎慰
米奉奈留毛爾故如此申狀乎平久安久聞看諾比給比此乃家乃戶主乎初米親
族乃悉皆守給比幸反給止反白須

第四十四節

復祭式祓詞

祓主動之

掛卷毛畏支祓戸四柱大神等乃御前爾恐々毛白久今日波何某我遠祖歷
世乃祖親族等乃是迄內典以豆靈祭志事乎悔今波由里神事以豆祭式執行
止波須幸故如此申豆仕留事爾過事無久違事無久令成竟給止反白須

第四十五節

復祭奏上祝詞

齋主動之

掛卷毛恐支教祖宗忠大神乃御前爾恐々毛白久今日波何某伊此家乃遠祖歷世
生日乃足日止齋定豆稱言竟奉規乃任改米齋豆大神乃所知食幽冥乃神
乃祖等親族乃神靈乎惟神乃教規乃任改米齋豆大神乃所知食幽冥乃神
事爾令仕奉給比廣支厚支恩賴乎令被給止祈申寸事乃由乎平久安久
聞看氏代々乃祖親族等乃異教爾汚々心乃罪穢乎御神德乎以豆拂比給
比清米給比天各々現世爾在經志時爾立志功績乃任爾嚴乃御靈乎幸反給
天彌廣爾廣處乎令得給比彌爾高支神乃列爾合進給比子孫乃彌繼々
爾守給比幸反給比輔比給比扶禱給比限無支不滅乃樂乎令得給止祈申
須狀乎聞看志宇豆奈比給止反恐々毛白須

第四十六節

靈舍復祭告辭

同上

掛卷毛畏支吾教祖宗忠大神乃撫給比愛給比何氏某乃遠祖世々乃祖親
族等乃靈乎此乃靈社爾齋比鎮申久左汝神靈等乃其祖先乎尋波奴禮悉皆
神代乃神乃後裔爾爲天未生毛生豆住留世毛退留神乃懷乃中留奈人我奈留

故爾教祖心日月來給比形天地自然乃神理爾依豆生附給布形
奈利示志給留事乎窺覺豆今般此汝神靈等乃御爲爾大神乃御寵榮乎
止祈奉豆惟神乃御定乃任爾改米齋比奉爾久比平穩爾聞看神乃列
乞給比自今以後波只管教祖大神乃御側爾仕奉給豆彌高爾高支神乃列
比給比自今以後波只管教祖大神乃御側爾仕奉給豆彌高爾高支神乃列
爾進給比彌廣爾廣所乎得給比遠永支世子孫乃八十連屬參出侍比御
祭美麗久仕奉止其奉爲留狀乎聞看豆御心毛平穩爾鎮利給反白須侍比御

第四十七節

遷魂詞

同上

何氏乃遠祖世々乃祖等親族乃靈等各々乃御名乎書世靈靈爾遷里給
比元々乃本乃心爾飯利給比生々豆神乃心爾任世給比千心常磐爾鎮坐
世云々

第四十八節

靈舍鎮祭告辭

同上

此乃新靈舍乎眞摺以天清米大麻以天拂比拂天嚴乃靈靈爾遷志鎮米齋
比奉此家乃守護神止常磐爾坐世奉留何氏乃遠祖歷世乃祖等親族乃神
靈等乃前爾申久左婚毛加志毛汝神靈等毛今日以後波新靈靈爾鎮坐

乃我故爾御心毛平穩爾所聞食止進流御幣帛乃乃御酒御食及山川山野
乃物爾汝靈等乃面影乎移志見倍鏡餅時乃菓物爾折爾咲出花乃色
香毛添天備反奉乎久相諾比相見志奈波今日乃祭乎給比此家乃家長
乎始米妻子女親族爾至迄各自受得職業乎怠留事無久緩幸事無久
勤米恪爾志給比惠美給比幸反給白須
日乃守爾守給比惠美給比幸反給白須

第四十九節ノ甲

改葬詞

同上

此乃何々山何々地乎假乃奧津城處止定米葬奉之利何某乃御前爾申左汝
靈乃遺體波其乃縣其國其乃郡區其乃村町何山乃地爾葬奉支留乎倍草枕旅之爾有
波將爲便乎奈支以豆暫時此處爾埋米奉加今般親族等其乃鄉爾歸爾留
附且汝乃遺體乎本國爾供奉仕反奉萬思比侍奈留毛故如此申須狀乎聞
看天即且御與爾載奉事乃由乎相諾比給比歸利坐坐道乃八十隅恙乎
事無久後毛安久幸久罷適志平久其乃國爾出立坐止世白須

第四十九節ノ乙

同

同上

何氏某乃遠祖歷世乃祖親族乃御靈等乃奧津城乃御前爾白久左此乃
戶主(家)刀自何某(奈)里何某公務爾仕奉等何府縣何國爾寄留爲志乎禮不意
久病爾(又)八重山遙爾比志依豆御掟乃任爾遺體乎葬米奉縣何國何那海
路遠(又)八重山遙爾比志依豆御掟乃任爾遺體乎葬米奉縣何國何那海
何乃地乎假乃於句津城處止葬米奉置禮然乍爾爲志奉留倍不有乎以
豆今般其處里與遺體乃供奉仕親族等乃歸給比今日吉日止此乃地
比相共爾埋米里與遺體乃供奉仕親族等乃歸給比今日吉日止此乃地
給反申須

第四十九節ノ丙 同

同上

何氏某乃遺體乃前爾告汝乃遺體乎何縣何國何郡何村乃何山爾假爾
埋米奉置柩加今般改葬奉利千世常磐爾此乃地乃祖先等乃側爾埋葬
奉止其奉利置柩加今般改葬奉利千世常磐爾此乃地乃祖先等乃側爾埋葬
後波此處爾葬奉禮歷世乃祖親族等止相親美一此給比遠永世爾鎮里坐
止世申須

第五十節 招魂祭祓詞

祓主動之

掛卷毛畏支祓戸四柱大神等乃御前爾恐々毛白久左今日波志天皇我朝廷
爾射向里比志多賊徒乎言向服從止軍乃役爾出氏國乃爲仇等止戰比死去志
兵乃招魂乃祭仕須止故如此申事乃由乎勤留祭員等乃過犯邪枉事
罪穢在波乎祓反給比清米給止申須事乃由乎勤留祭員等乃過犯邪枉事
天乃斑駒乃如耳振立豆所聞看止恐々毛白須天神地祇八百萬神等共爾

第五十一節 招魂詞

齋主動之

鳥我鳴東京九段阪乃上爾齋禮給布靖國神社爾坐天故此乃師團營所分
營里與御軍乃役爾出氏骸乎失給志比諸靈魂等今日乎生日乃足日止御祭
仕奉我留故爾天翔國翔來坐氏此乃神離爾暫鎮坐止遙爾招奉止久申須

第五十二節 招魂祭々文

同上

維紀元二千五百何十年大正何年何月何日乎生日乃足日止撰定且黒
住教何職何某諸神靈等乃御前爾白左久汝靈魂等波八隅知志吾大君乃
國乃御楯止成氏去志何年何國何所乃何某奠長爾煽動氏彼處此處里與數

多乃賊徒狹如須起立且伊向里比多時皇軍乃役爾赴向志村肝乃心身
毛乎竭志現身乎碎支戰死給爾比志依豆汝靈魂等乎此乃神籬爾招奉坐奉天
御祭仕奉御心乎慰米奉枕高天原乃御中止爲六合乃中爾伊照徹
天下所知食吾大神勅以國乎安止皇孫命天壤止與爾無窮奉者止
給比此乃豐原乃水穗國降志給食事波天壤止與爾無窮奉者止
乎伊頭乃道別爾道豆天嗣所食皇孫命天壤止與爾無窮奉者止
命給君臣乃道子乃天比給食事波天壤止與爾無窮奉者止
乃如久昨日乃波毛乎定給比米志比皇坐波也外國乃諸王等
動波彼國風傲天歸順者有然留賊徒乃有波皇軍兵卒等奉者
等波有里此波惟神乃大道爾背靈魂波其御近任爾軍役爾面比錄心
天部令服從給御掟奈故汝幸屍君乃近邊古死光額徒乎野爾
振起天海行波水附屍山行波草幸須大君乃近邊古死光額徒乎野爾
立背爾矢波不負止言建劍乃握利稜威比尾羽張賊徒乎野爾
山爾放里散志阪乃尾每爾追伏世川乃瀨每追撥比悉皆爾言向天
乃命給君臣乃道子乃天比給食事波天壤止與爾無窮奉者止

下乎乎平穩成命反左海乃水沫野邊乃露止捨給比毛志加靈魂波天地日
月止共爾不滅爾坐我故爾誠乎取禮給毛留爾任世我乎離禮陽氣爾成活
物乎捉衣給爾志依天神止爲志者等忌萬波里清萬波里捧持進留珍乃
乃今日乃御祭仕奉止爲志者等忌萬波里清萬波里捧持進留珍乃
大御酒大御食爾海河山野乃物鏡餅時菓物製菓子及時爾合食從今以後
々乃花及糸竹乃音毛添豆進久各自乃御心毛乎平穩爾所聞食豆從今以後
波幽冥爾志天皇朝廷乃湯津石村乃如久塞坐御門邊乎防禁給比
守給比大御代乎茂志御代乃足御代爾幸反給止恐々白須

第五十二節

同

文

兩日ノ祭ナラバ後日ニ用井ベシ

此乃神籬乃招奉坐奉留禮軍人等乃神靈乃御前爾申久今日毛御祭仕奉
爲豆廣前爾捧持豆進留御酒波瓶爾邊高知麩乃腹滿並倍御食波八十平
貧爾盛高成豆大海岸爾住者波廣物赤心乎世乃人々爾見支寸倍鏡餅
菜辛沖津藻菜邊藻及汝御靈等乃赤心乎世乃人々爾見支寸倍鏡餅
其外種々乃物爾至迄八取乃机代爾置足波志備反奉及御心慰爾乎鏡餅
心毛乎穩爾聞看止申須

第三部 行列式及具品

第一節 特葬

一 白杖 一白
八丁

白杖 一白
八丁

秉炬 一白
八丁

簪 一白
八丁

白杖 一白
八丁

秉炬 一白
八丁

簪 一白
八丁

二 教師

馬又八車

盪水教師

大麻教師

大神 二白人丁

馬 口付 二人

車夫 一人

前驅教師

從者 一直垂 一人

長柄持 一白人丁

香取 一白人丁

敷皮持 二白人丁

白旗 一白人丁

百十

大神 二白人丁

弓矢 雜色

教師

四 桃菊教師

馬又八車

副典禮

馬 口付 二人
車夫 一人
長柄持 一白人丁
香取 一白人丁

教師

赤旗 一白人丁

馬 口付 二人

車夫 一人

典禮

長柄持 一白人丁

香取 一白人丁

教師

供物辛櫃 四白人丁

教師

高案 一白人丁

全 一白人丁

樂人

六

高案 一白人丁

玉串案 一白人丁

樂人

樂人

樂人

白旗 一白人丁

七

樂人

樂人

白旗 一白人丁

樂器 二白人丁

馬車 鞭者

騎馬 口付 二人

長柄持 一白人丁

香取 一白人丁

敷皮持 一白人丁

贊者 馬又八車

神 一白人丁

全上 馬又八車

八

副齋主

神 一白人丁

百十一

白旗 一白人丁

赤旗 一白人丁

馬車 鞭者

騎馬 白丁二人

長柄持 白丁一人

香取 白丁一人

敷皮持 白丁一人

百十二

九

白旗 一白人丁

赤旗 一白人丁

齋主

後取祝詞箱持 兼從者二人

花造花 一白人丁

花鳥造花鳥 一白人丁

全 全白丁一人

十

花造花 一白人丁

花鳥造花鳥 一白人丁

全 全白丁一人

真神 一白人丁

隨人 騎馬

十一

銘旗 一白人丁

真神 一白人丁

隨人 騎馬

二十

太刀 一直 八垂

教師

教師

護喪

乘炬 一白人丁

喪護 全

全

柩 昇夫 白丁數名

杖持 一白人丁

教師

教師

護喪

乘炬 一白人丁

喪護 全

全

凳子 一白人丁

牽馬 白丁二人

墓標 白丁一人

全

凳子 一白人丁

近親

全

全

四十

奉幣 一人

從者 禮服

馬車 鞭者

喪主 從者 禮服

騎馬 白丁二人

近親

全

全

百十三

五十

從者 禮服 馬車 轎者 近親女
 喪婦 禮者 服 駕籠 昇夫 近親女
 後驅 車 馬 白口付 二人 長柄持 一人
 從者 直人 教 師 沓 取 一人
 敷皮持 一人

以下列外

六十

籠長持 一人

以下列外

會葬人名 以上

此外夜は乗炬灯燈等を加へ其増減其時に應すへし、又行列外死者の官位職爵に依て兵隊の並列を加ふる事も有るべし、其は該則もあれば其應分にまかすべければ、此處に略す、以上行列の本義とす以下之に準へ。

第二節 上 葬

白杖 一人

乘炬 一人

簾 一人

白杖 一人

乘炬 一人

簾 一人

二 教師 車

盪水教師

大麻教師

三 大 櫛 白丁二人

前驅 車 馬 白口付 二人
 教 師 夫 一人
 從者 直人

長柄持 一人
 沓 取 一人

白旗 一人

四 桃菊教師 車

弓矢 一直垂 八人

教師

百十六

弓矢 一直垂 八人

教師

五 典禮

馬 口付 二人
車夫 一人

長柄持 一人

教師

高案 一人

香取 一人

教師

供物辛櫃 四人

高案 一人

六 玉串案 一人

樂人

樂器 一人

樂人

禰 一人

白旗 一人

馬 口付 二人

長柄持 一人

白旗 一人

七

副齋主

車夫 一人

香取 一人

贊者車

全

赤旗 一人

敷皮持 一人

赤旗 一人

馬車 轡者

騎馬 口付 一人

長柄持 一人

花又造花 一人

花鳥又造花鳥 一人

八 齋主

後取祝詞箱持 兼從者二人

香取 一人

花又造花 一人

花鳥又造花鳥 一人

九 銘旗 一人

真禰 一人

隨人 直垂 車

真禰 一人

隨人 直垂 車

百十七

十 太刀 一直垂 一人

護喪

乘炬 一白 一人丁

柩 昇夫 白丁 數名

杖持 一白 一人丁

百十八

杵持 一白 一人丁

全

一十 登子 一白 一人丁

教師 全

墓標 一白 一人丁

奉幣 一直垂 一人

登子 一白 一人丁

教師 全

二十 喪主 從者 禮者 禮服

騎馬 二白 口付 一人丁

近親 近親

喪婦 從者 禮者 禮服 車夫 一人

近親女

近親女

近親 近親

近親女

三十

後驅教師 車 騎馬 二白 口付 一人丁 夫 一人

長柄持 一白 一人丁 杵取 一白 一人丁

籠長持 二白 一人丁

會葬人名 以上

從者 一直垂 一人

以下列外

右特葬上葬共に死者婦人ならば弓矢太刀を略きて長刀を加ふべし長刀は行列太刀の處に入るべし持手は白丁なり乘炬灯燈又兵隊等も特葬に準ず其他葬具の増減は適宜たるべし。

第三節 中 葬

白杖 一白 一人丁

乘炬 一白 一人丁

幕 一白 一人丁

白杖 一白 一人丁

乘炬 一白 一人丁

幕 一白 一人丁

百十九

二 教師 一車 一人夫

盪水教師

大麻教師

白旗 一白 一人丁

神 一白 一人丁

赤旗 一白 一人丁

三

白旗 一白 一人丁

神 一白 一人丁

赤旗 一白 一人丁

四 齋主

騎馬 一白 一人丁

又 一白 一人丁

車 一夫 一人

後取兼直垂 從者 一人

贊者

全

銘旗 一白 一人丁

花 一白 一人丁

乘炬 一白 一人丁

護喪

五

花 一白 一人丁

乘炬 一白 一人丁

太刀 一直 一人垂

柩 一白 一人丁

護喪

瓮子 一白 一人丁

六

瓮子 一白 一人丁

墓標 一白 一人丁

奉幣 一人

近親

七 喪主

又 一夫 一人

車 一夫 一人

近親

喪婦

從者 一人

車 一夫 一人

教師

車 一夫 一人

會葬人

右は中葬行列順次の大抵なり、喪家の都合にて花または鳥其他葬具適宜に従ひ、墓所用具供物等は前に運び置くべし。

第四節 並葬

乗炬一白人丁

一 白杖一白人丁

幕一白人丁

乗炬一白人丁

櫛一白人丁

二 教師

盥水一人

櫛一白人丁

白旗一白人丁

齋主 車夫一人

銘旗一白人丁

赤旗一白人丁

從者兼後取一直垂一人

乗炬一白人丁

護喪

贊者一人

墓標一白人丁

柩 白昇數丁夫名

乗炬一白人丁

護喪

近親

五 奉幣一人

喪主 直垂

會葬人名

以上

近親

烏帽子 教師の等級に應じて着せしむべし
笏又 教師の等級に依りて持たしむべし
足袋 着相品の品を用ゐるべし
白烏帽子 是は昇夫口付其他葬具持の着用品なり

喪者の着服

喪服は鼠色黒色を用ゐるは言ふを俟すと雖も官途の人は
官位職爵に依りて大禮服通常禮服男女共に公の御規則に輕重
あるべければ其に從ふべし、教師は上卷教師心得の六七兩條
に記せるを以て此處に略す

物

供 水 盥 酒 飯 魚 鳥

土器陶器硝子の類に盛るべし

土器に盛るべし

瓶子に入るべし

土器に盛るべし

海川の魚大小に拘はらず、新しきをよしとす、平皿に据うべし
山禽野鳥に拘はらず、是も新しきをよしとす

山葵薯蕷蕨椎茸香蕈横茸の類

菜大根蕪胡蘿蔔午芽芋瓜茄子の類

苾海苔若和布昆布の類

柿梨棘栗蜜柑金柑乳柑橙の類

干鯛小魚干海老瑣管の類

氷豆腐氷菘蕪干心太干瓢湯皮の類

蒸菓子干菓子の類

梅桃櫻山吹花菖蒲萩百合菊其外何花にても時々々の花をたつ

但その品物により、紙又は柏三角柏其他時宜に従ひ、何の木

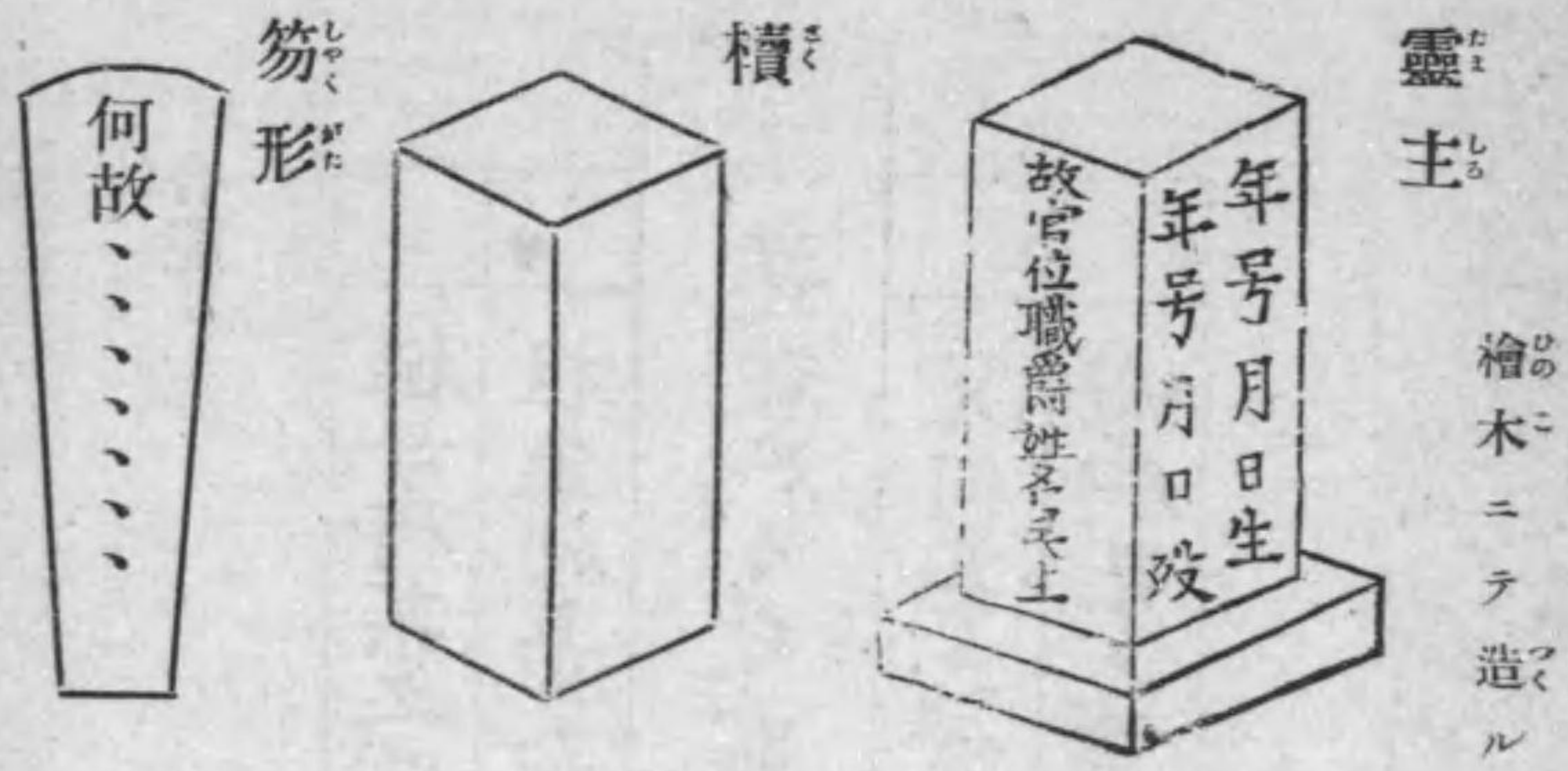
葉にても都合に任せ敷用ゐるも苦しからず尤品により敷

物を要せざるものもあり注意すべし

右にあけて記せる祭具歛具葬具着服また供物等の條々と左に繪がけ

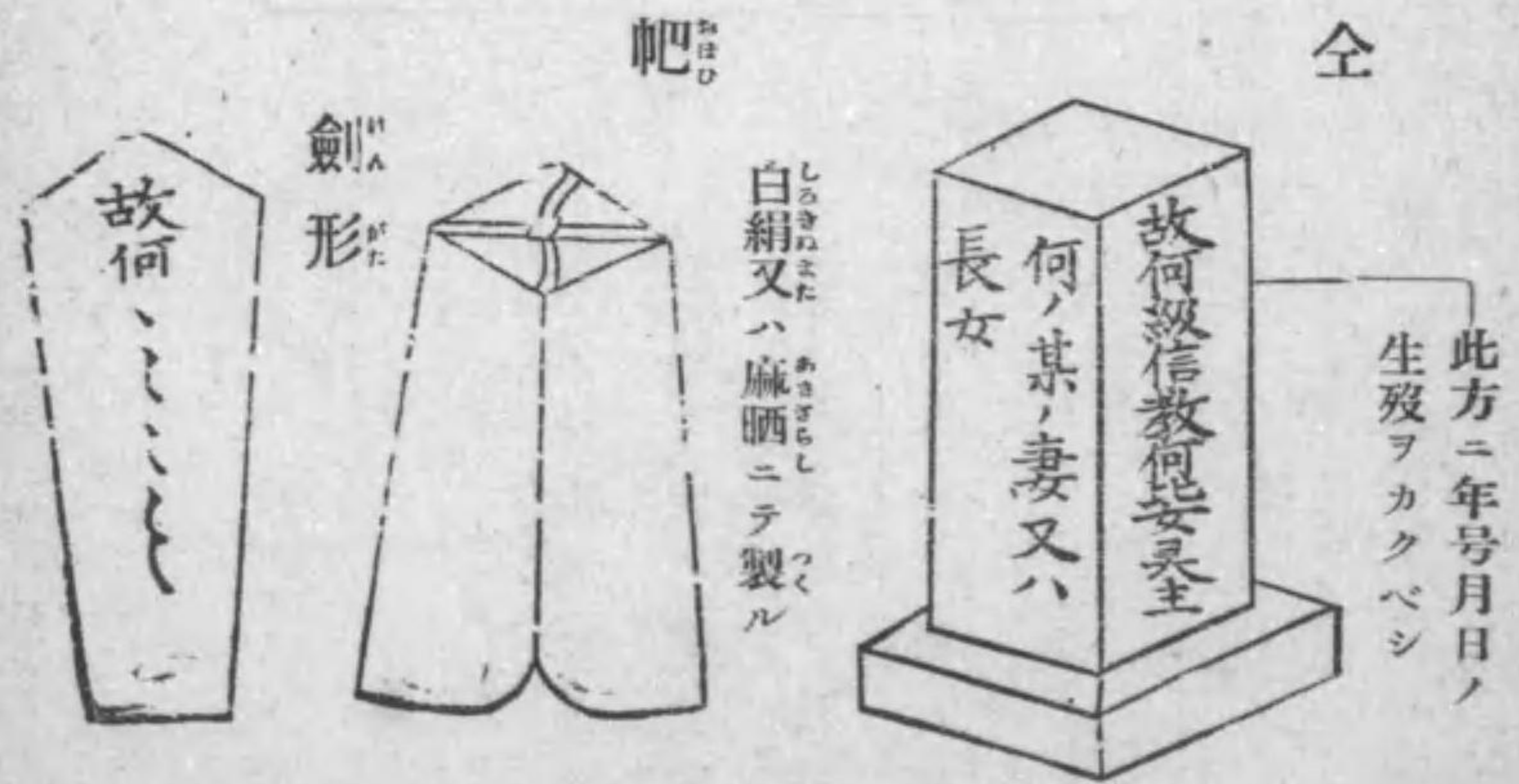
各圖とを併せ参考すべし

第九節 繪圖



靈主

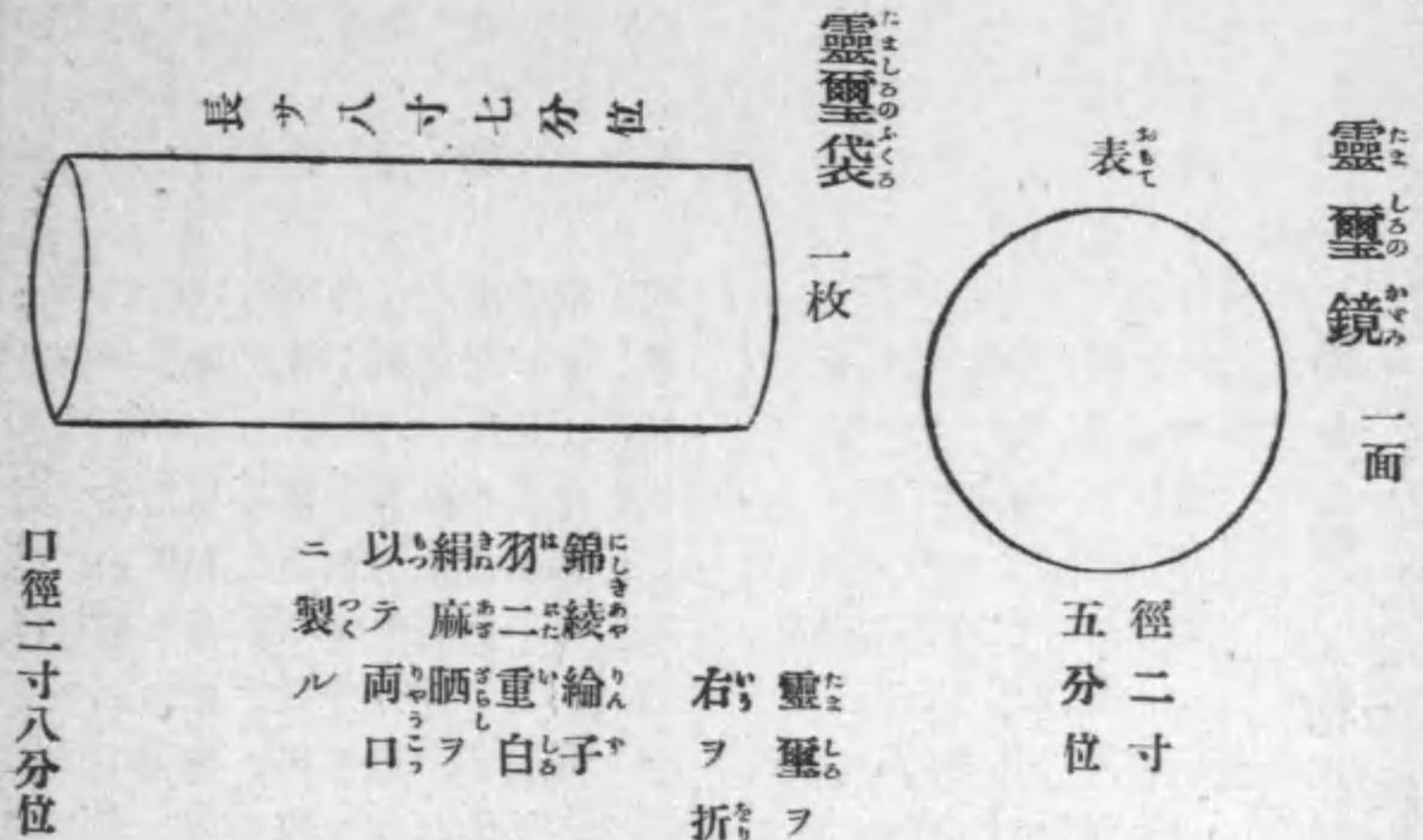
繪木ニテ造ル



全

此方ニ年号月日ノ
生歿ヲカクベシ

白絹又ハ麻晒ニテ製ル



靈主袋

一枚

表

靈鏡

一面

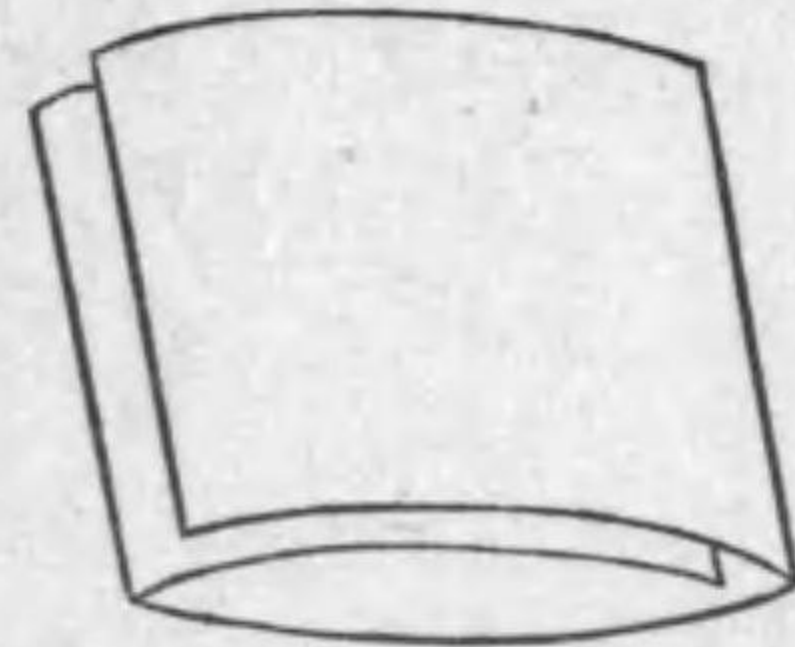
徑二寸五分位

錦綾ニ以テ製ル
羽織重晒口
子綸重晒口

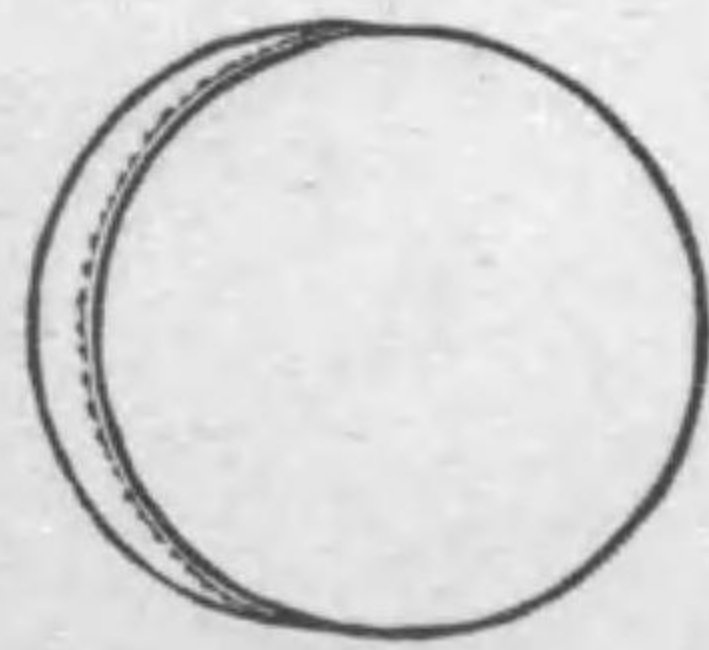
右ヲ折掛タル圖

口徑二寸八分位

全上



衾褥 各一枚

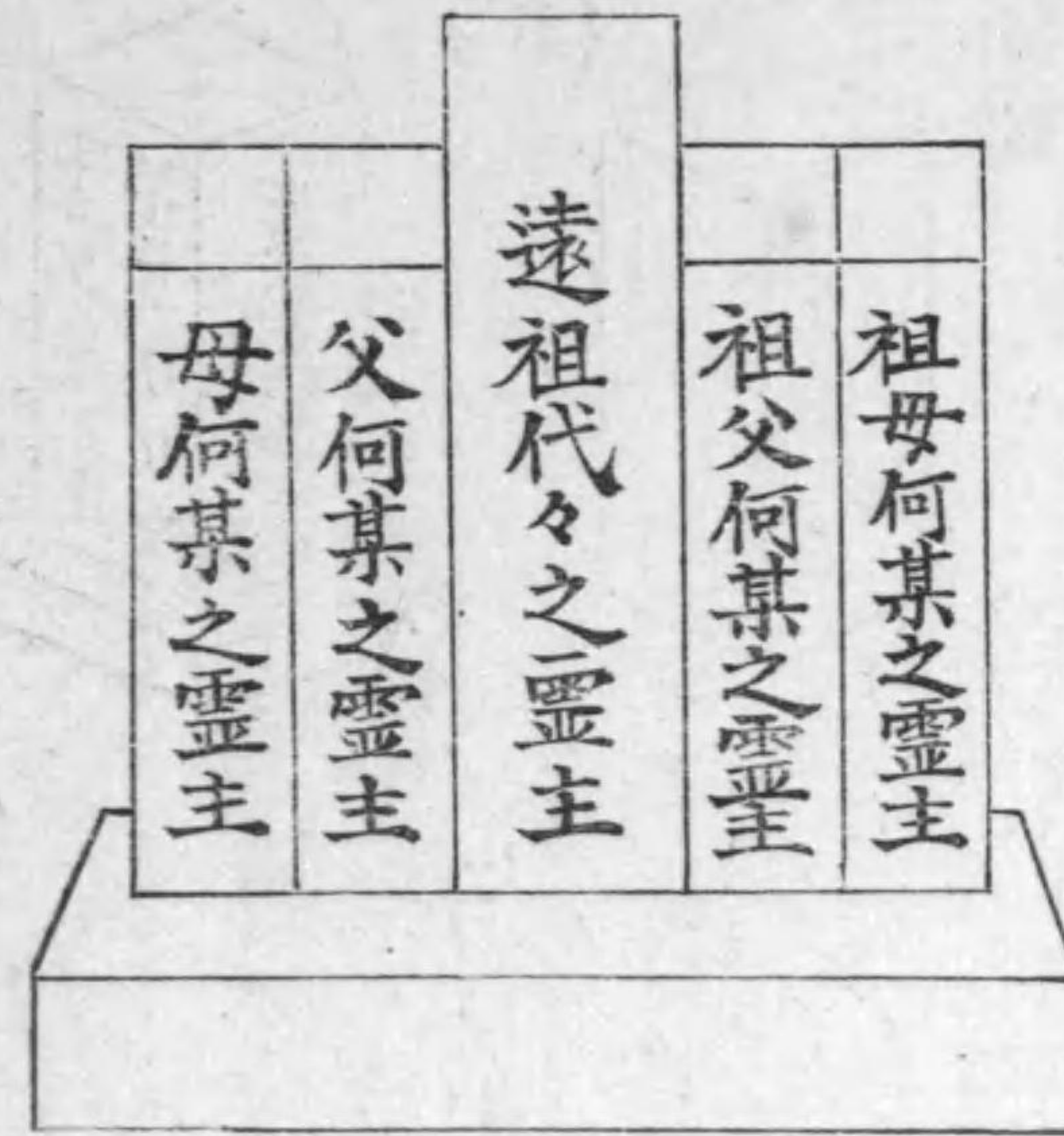


位八圍寸リ



靈鏡ハ鏡劍玉其外望ニ任スベシ

合祀ノ形



祖先ト合祀ルニハ横ヲ
取除ケ中ノ真ノ靈主ヲ
臺ヨリ拔取テ幾柱モ一
束ネニシテ祭ル圖ナリ

槿代 一具



槿代ノ形ニハ隨テ靈主ノ類ヲ造ルモノナリ
用キルノ類ヲ用キルモノナリ

高サ二寸六分位



檜ヲ曲テ製ル

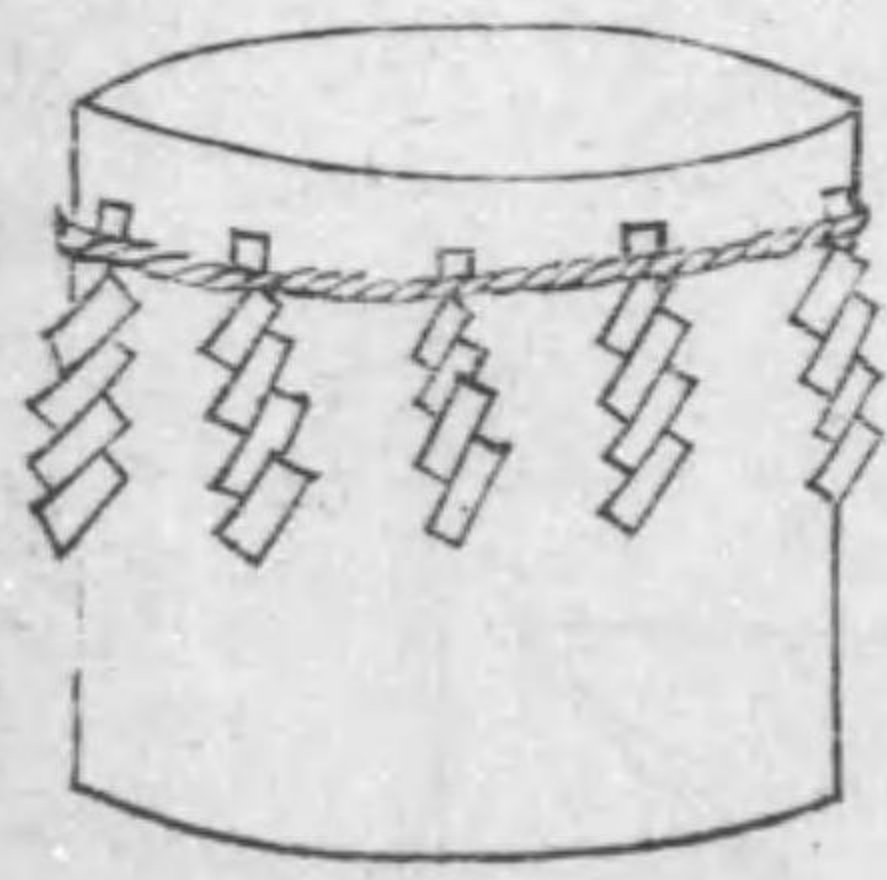
靶 一枚



高サ二寸八分位

錦綾綸子羽
二重白絹麻
晒等ニテ製ル

槿代ニ靈主ヲ納テ



繩ヲ覆ヒ注連
圖

表ニ如此書クベシ

立
タ
ル
圖
著
テ
筒
ニ
櫛
ニ
垂
ヲ

垂
櫛
三
本

高サ三尺位

筒
三
具

高サ九寸位

二本ハ靈屋ノ左右ニ立ツル料
一本ハ喪主ノ玉串料

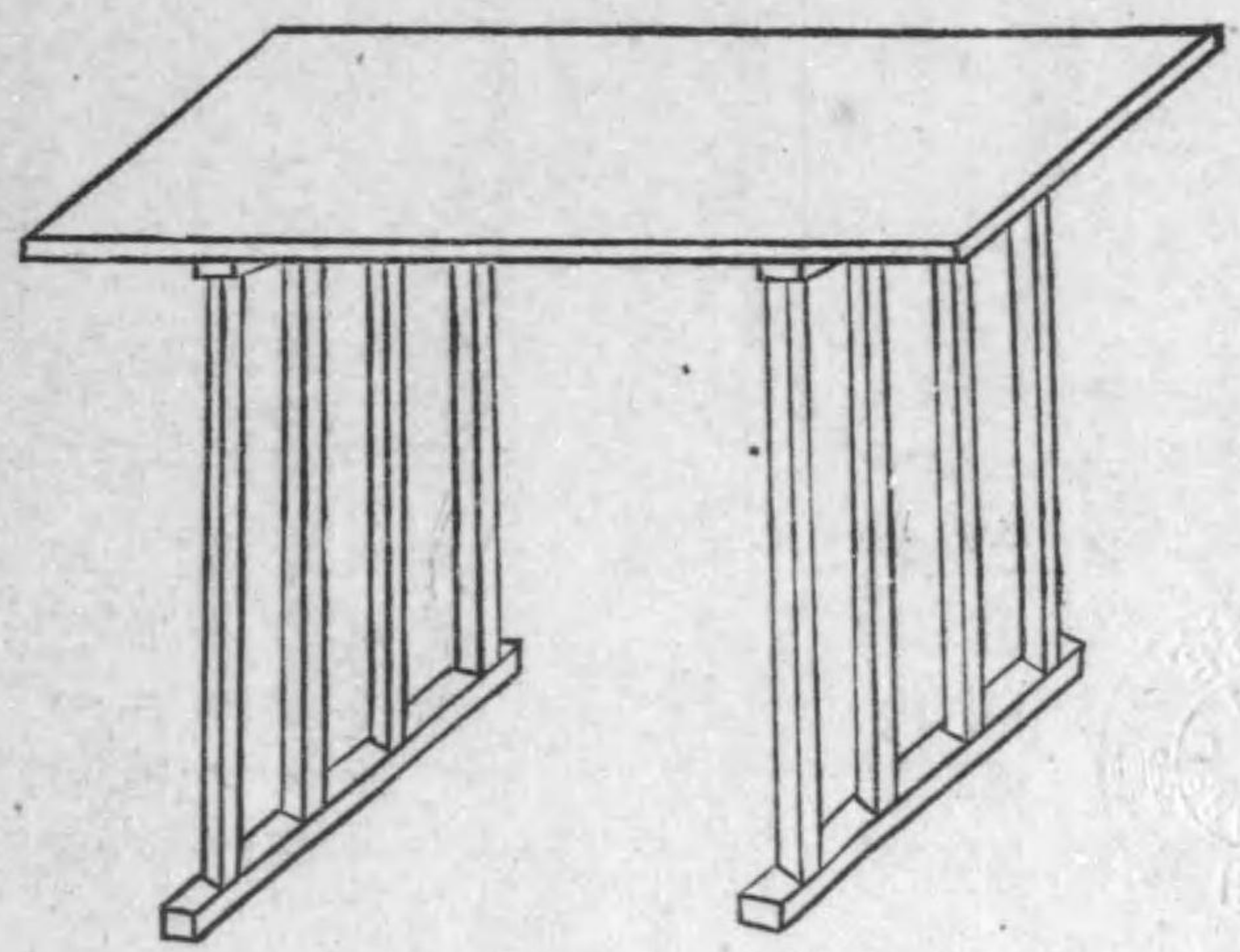
垂ハ五色絹又ハ紅白絹ニテ製
ルベシ

百三十七

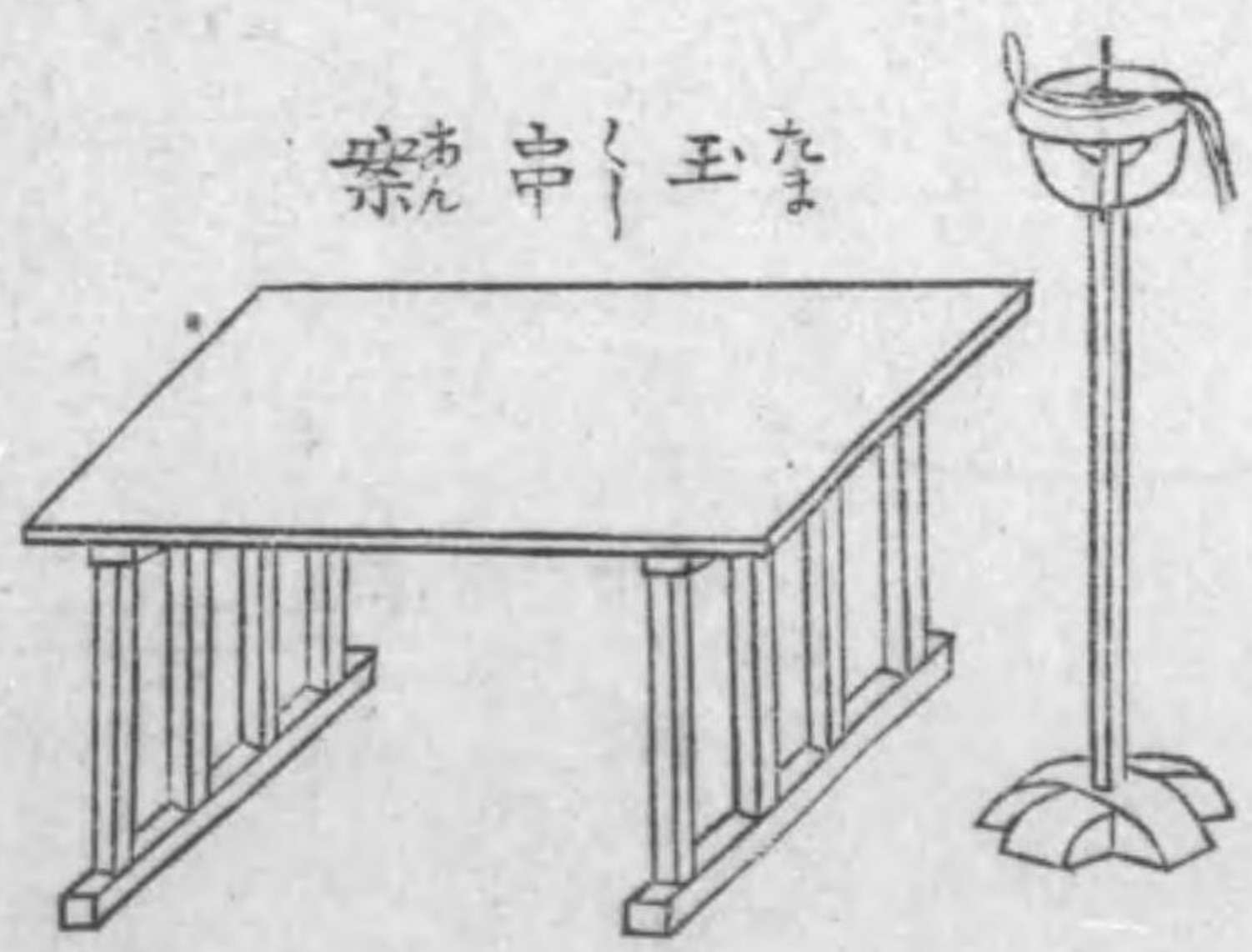


大
小
高
低
ハ
其
分
ニ
應
ジ
テ
造
ル
ベ
シ

案
高

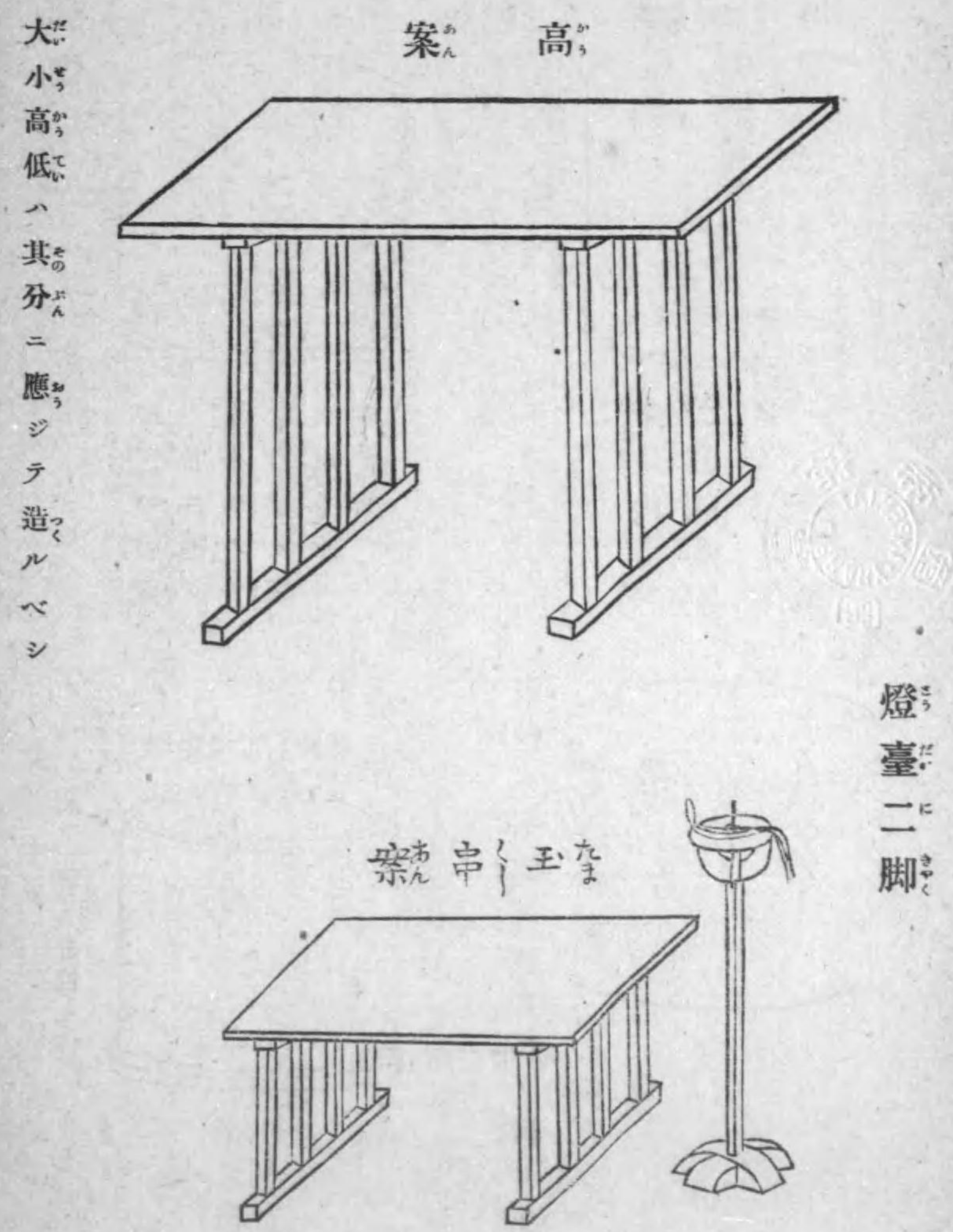


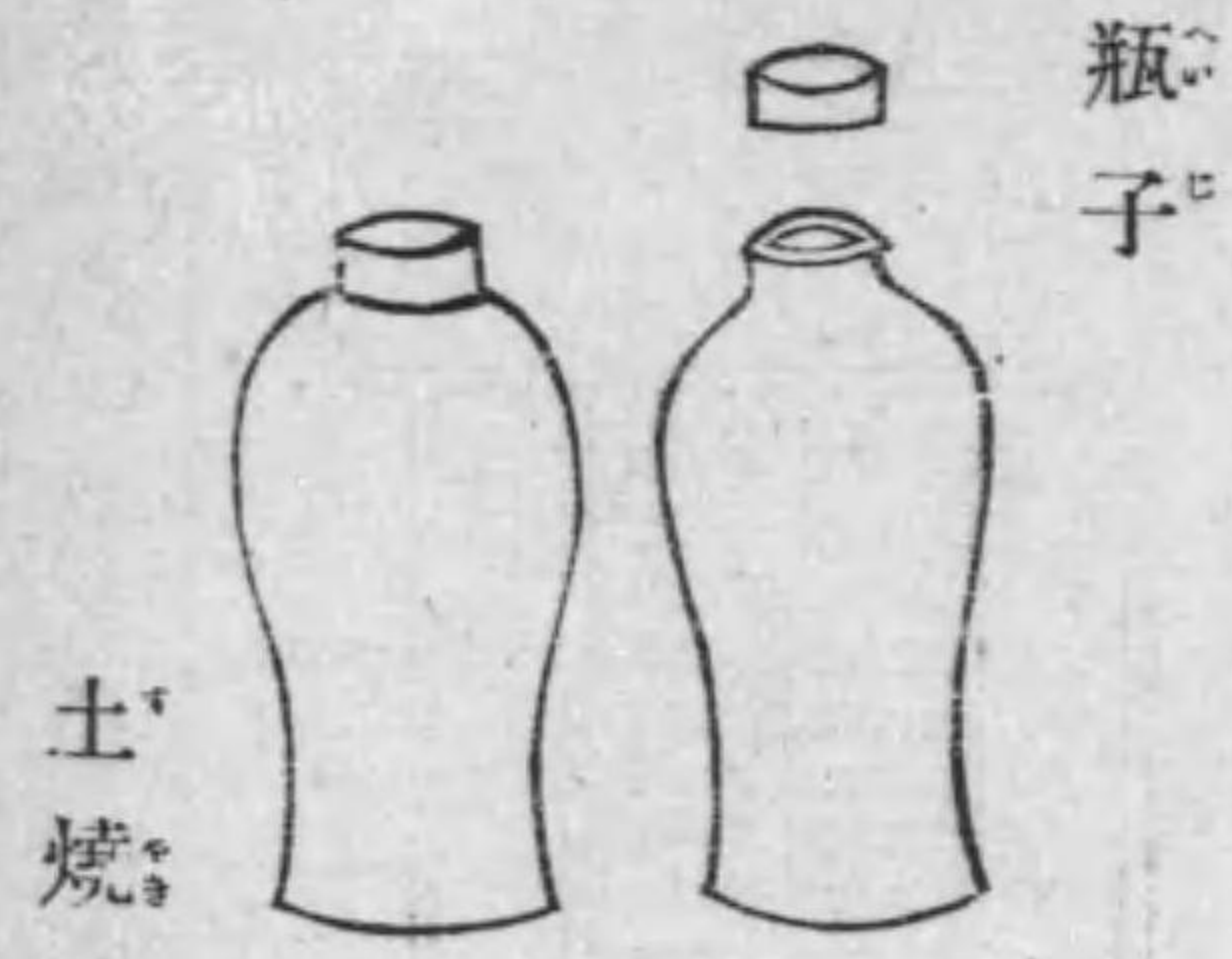
案
串
玉



燈
臺
二
脚

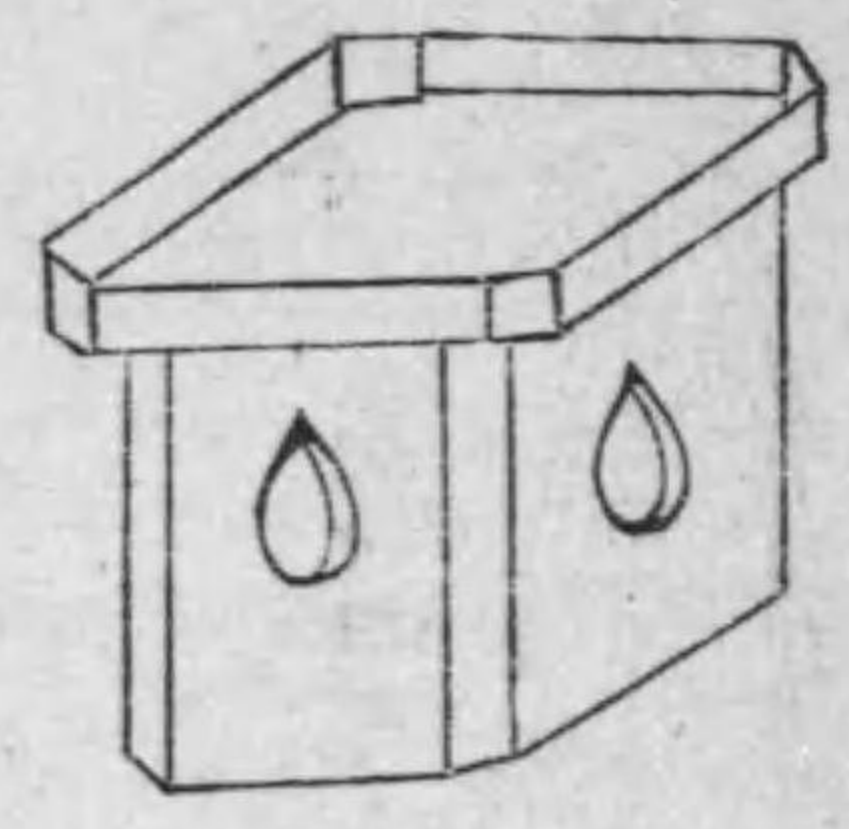
百三十六



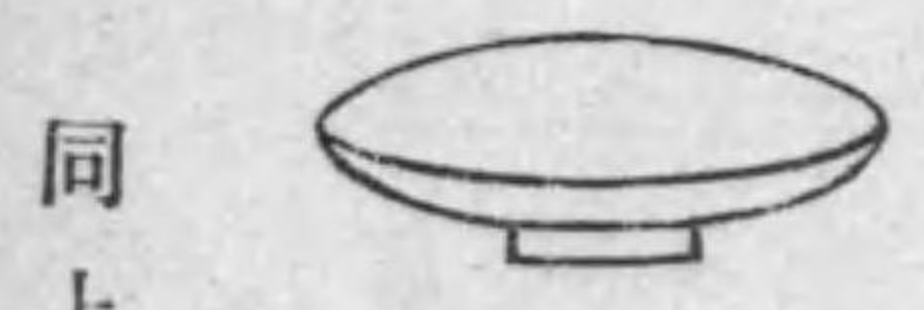


土焼

瓶子

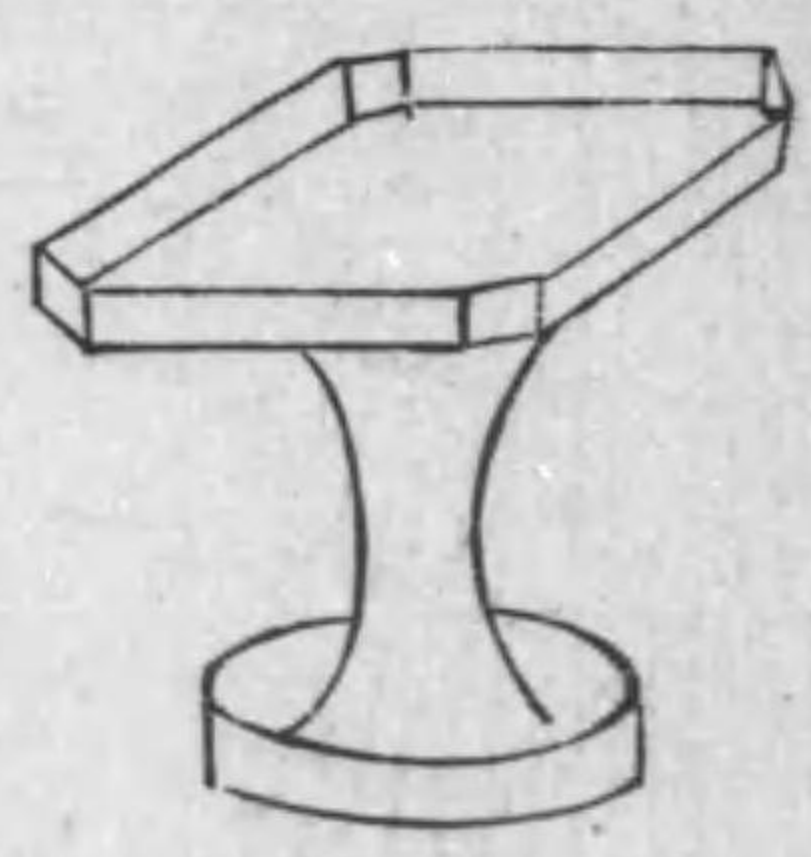


三方

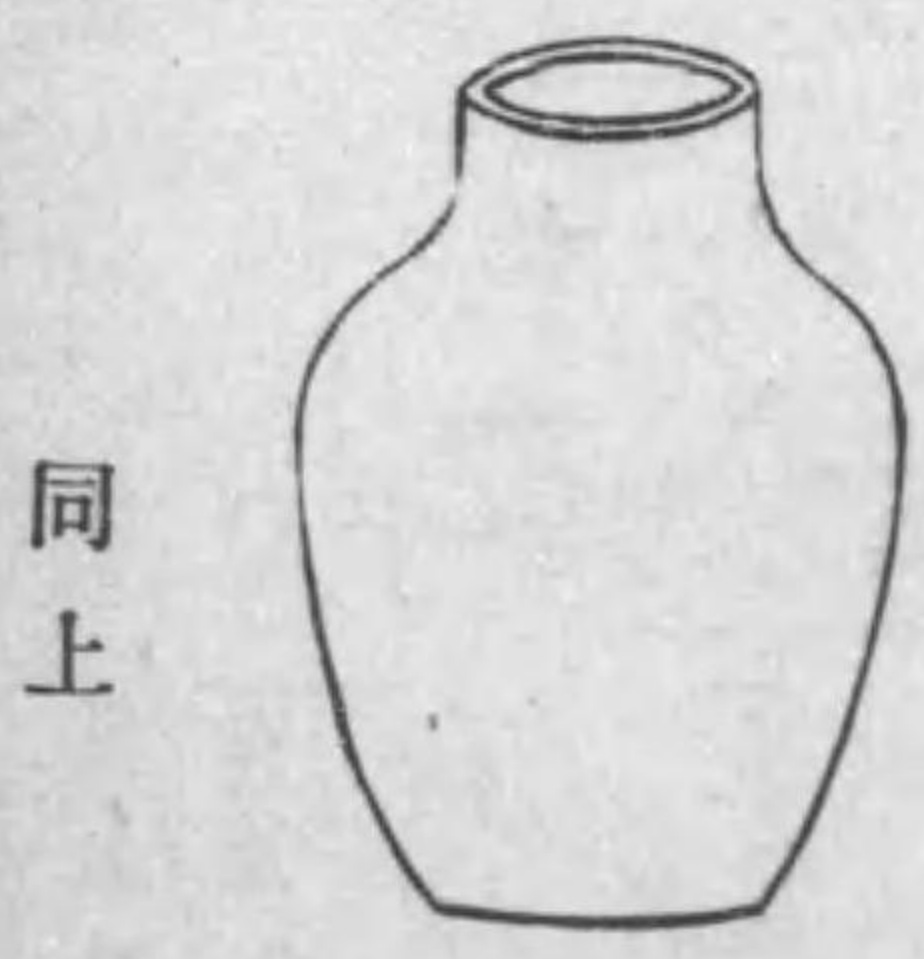


同上

盃



高坏



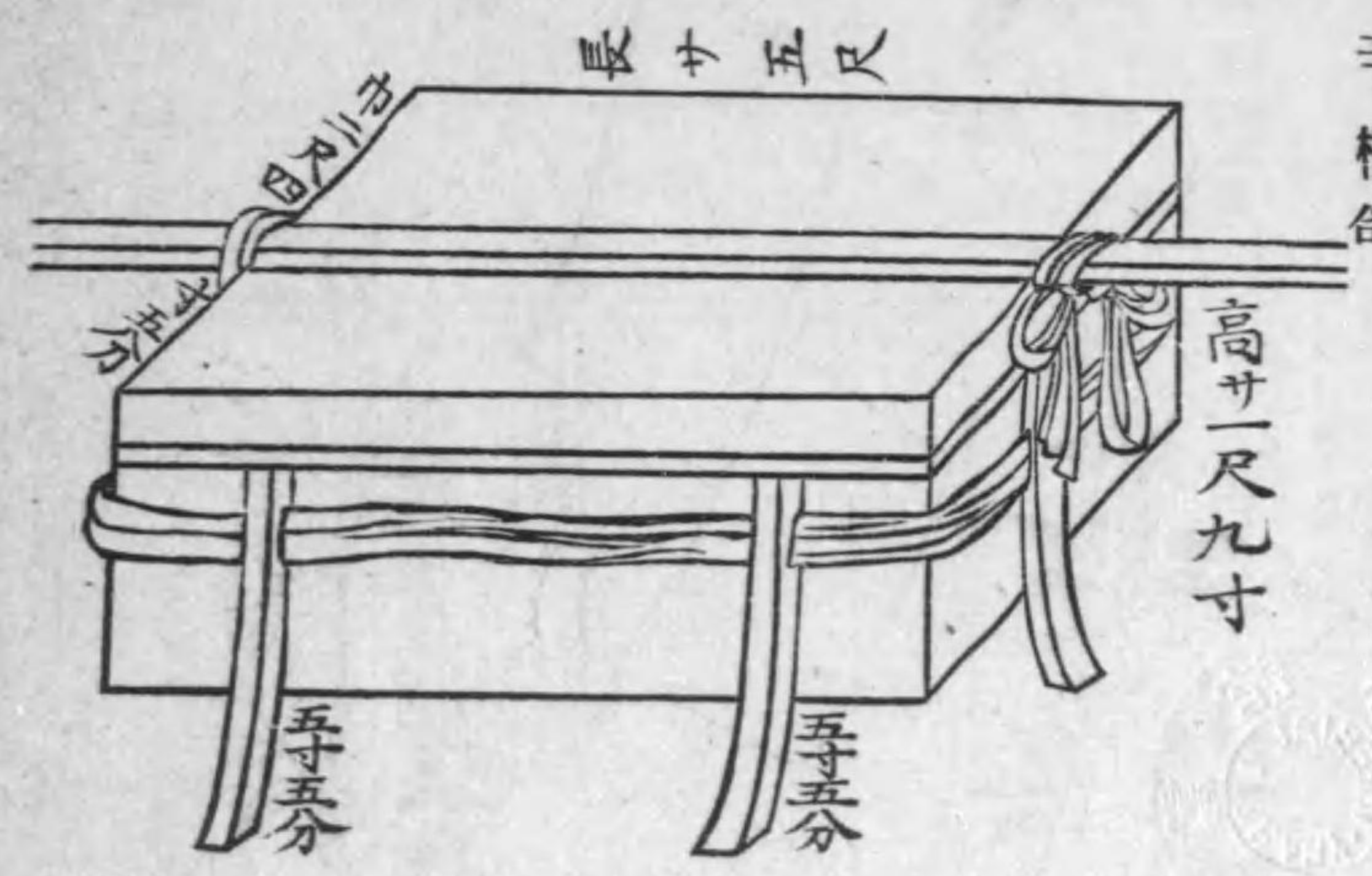
同上

花瓶



水器

百三十九



辛櫃合

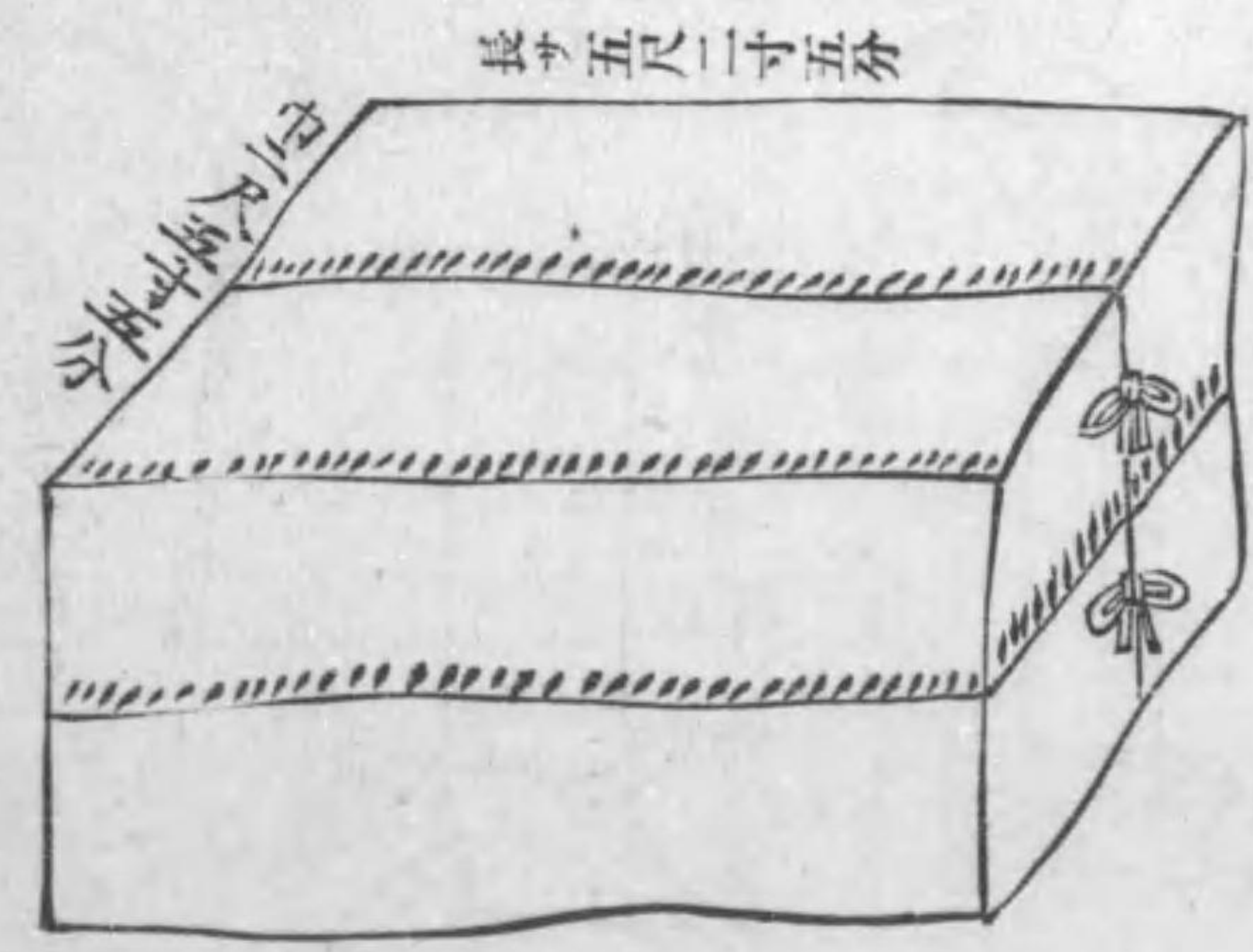
高サ一尺九寸

取寸五尺

手五分

手五分

靶

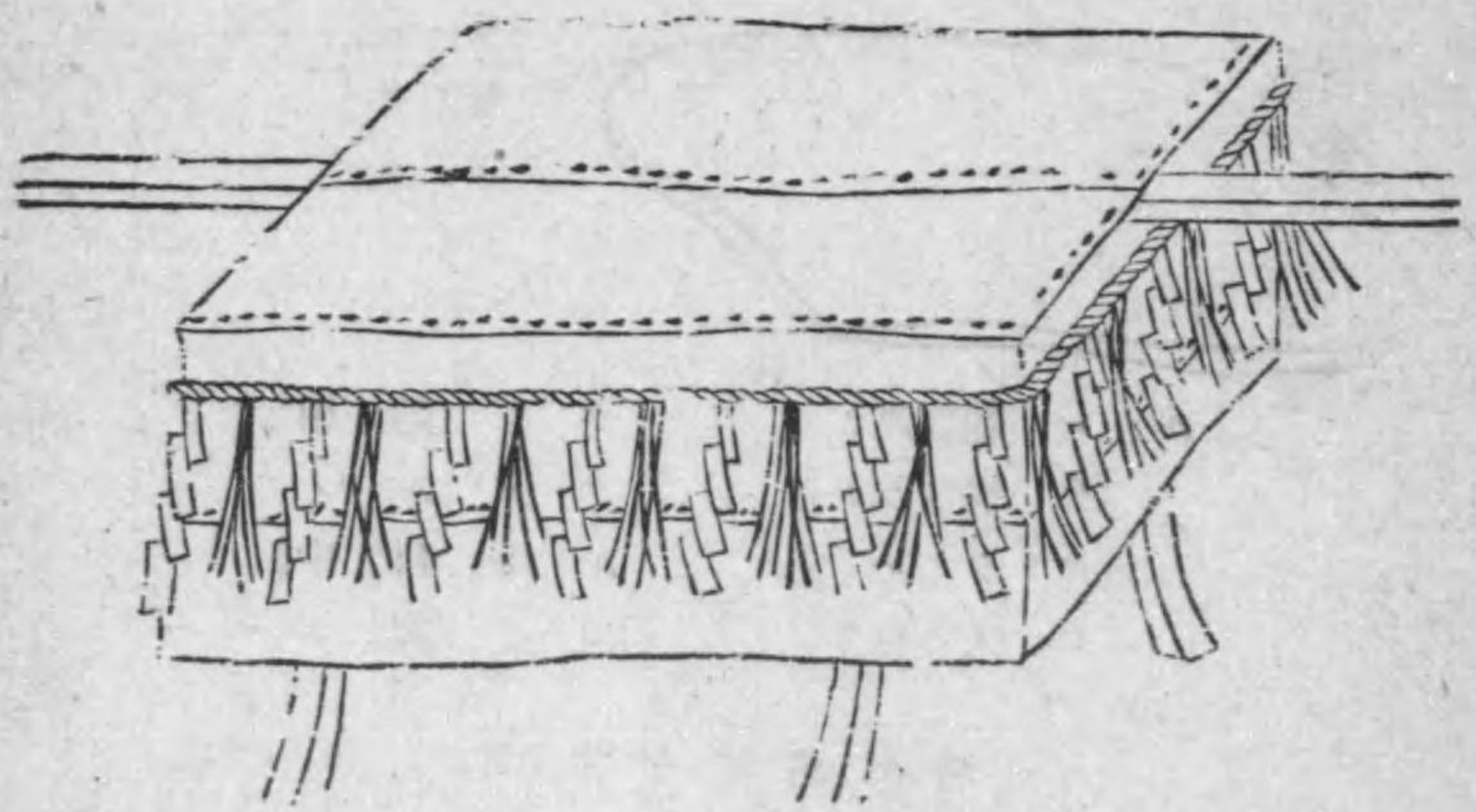


高サ一尺九寸八分

取寸五尺二寸五分

白絹麻木
綿等ニテ
調フベシ

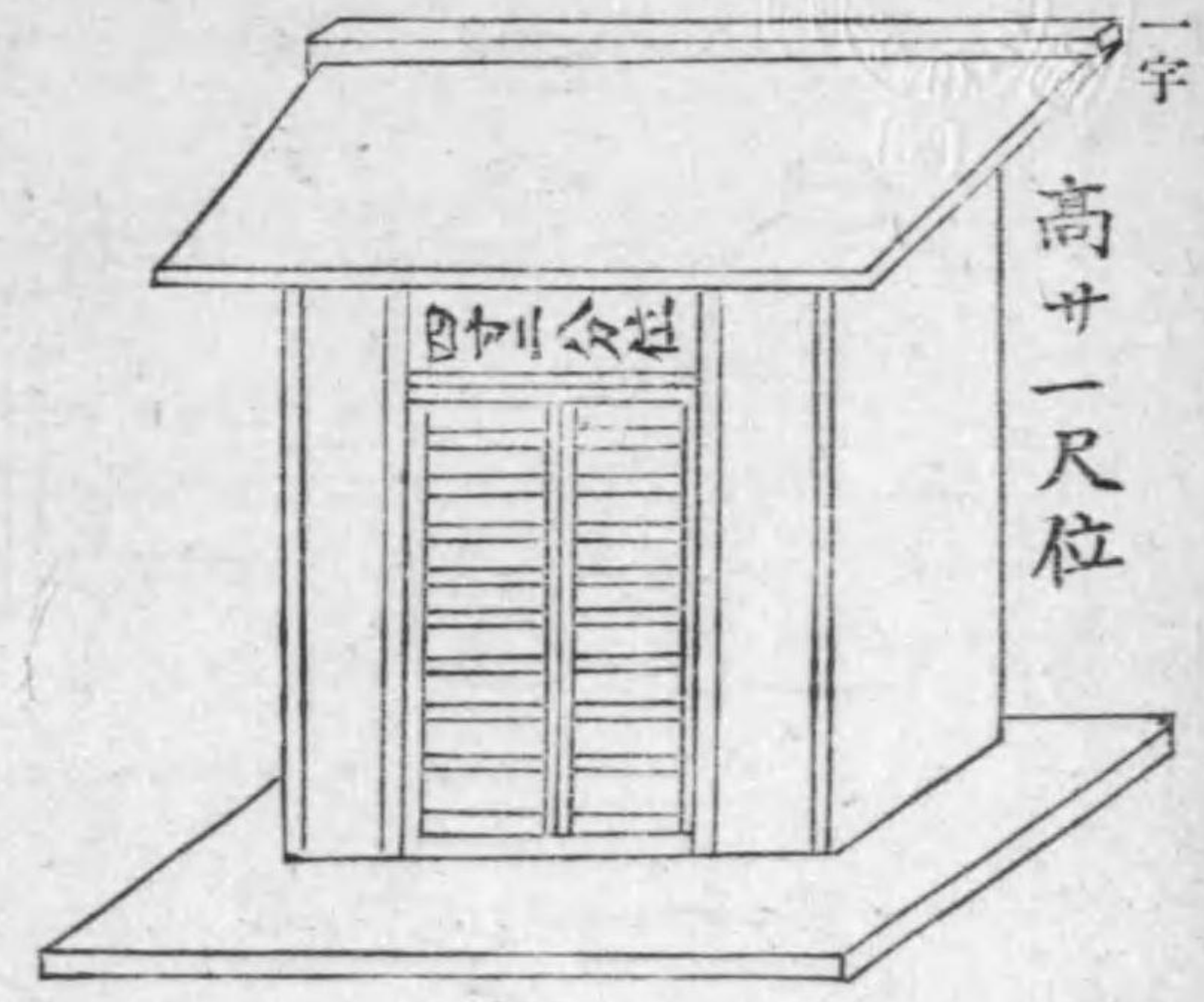
百三十八



辛櫃ニ杷
ヲオホヒ
注連繩ヲ
曳タル圖

靈屋たまご一字

高サ一尺位



材ハ檜
ヲ以テ
最上ト
ス又杉
ニ略ス
ルモ妨
ナシ

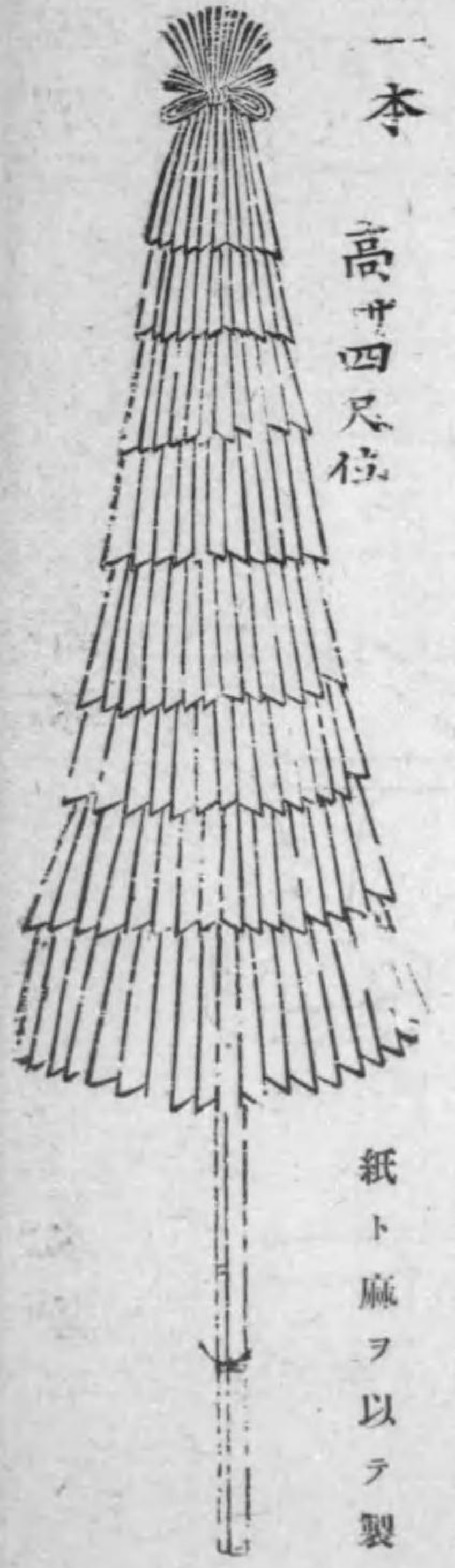
水
器
二口



一口ハ盥水料
一口ハ寄邊水料

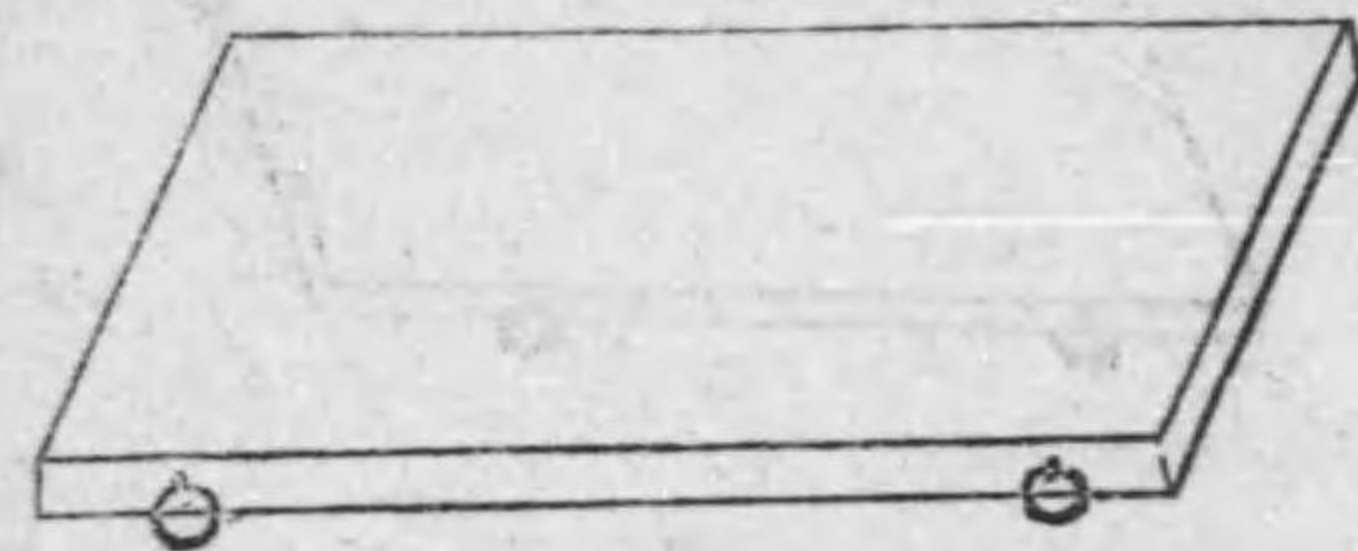
大麻おほ一本

高サ四尺位



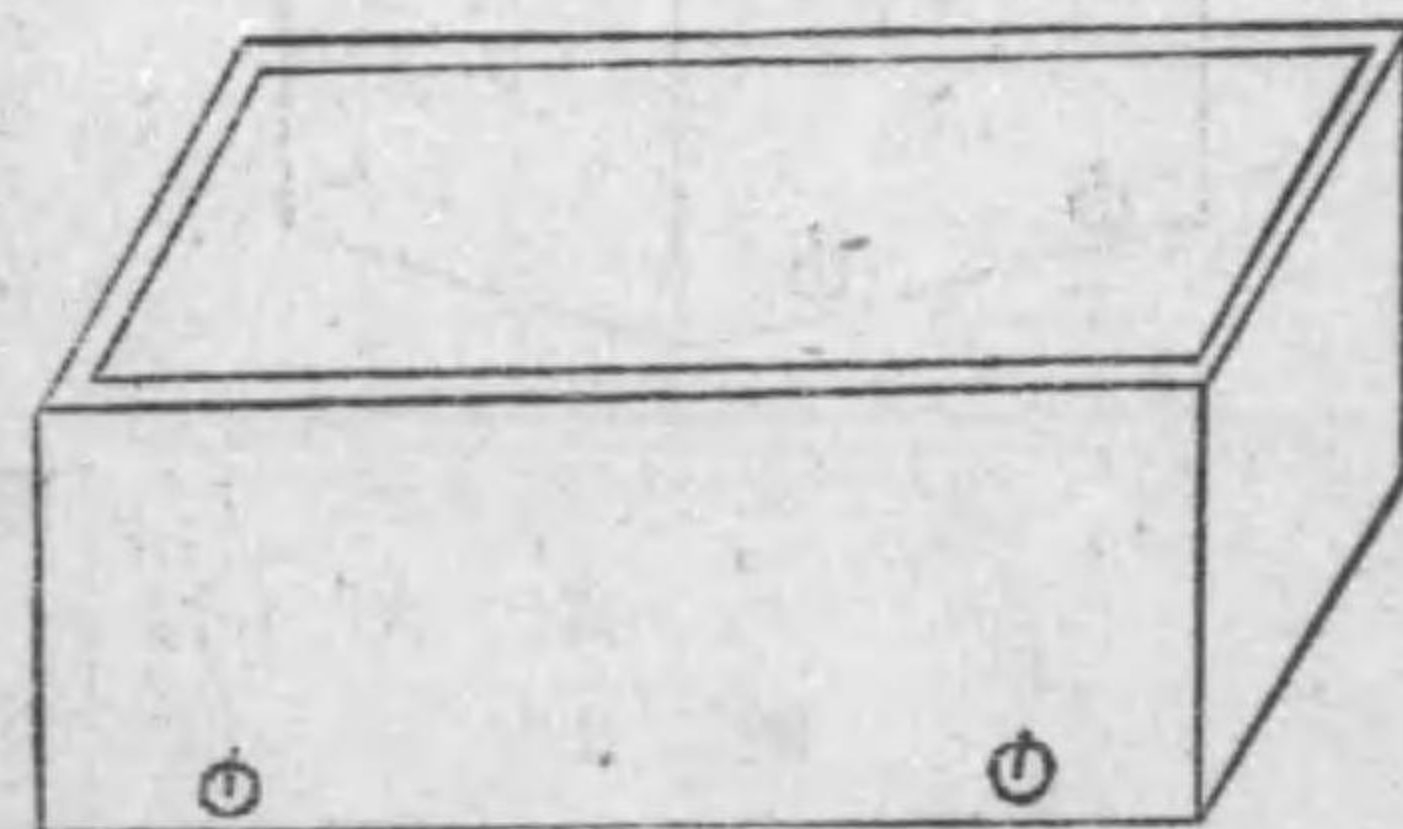
麻ハ祓料
串ハ楠ト竹ヲ合セ
テ製ル垂ハ八垂ノ
紙ト麻ヲ以テ製ル

棺蓋



料ナリ
カク
ルノ
銃ハ
綱ヲ

棺臥

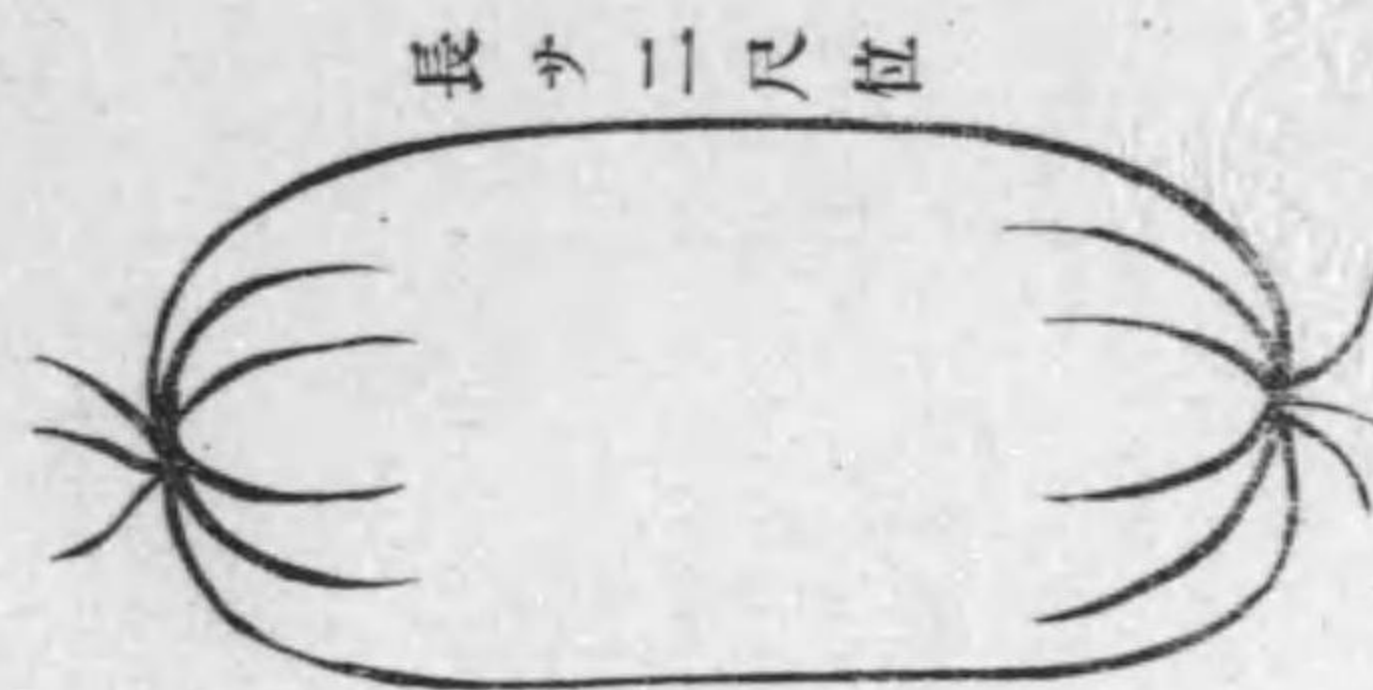


墓誌

是ハ何縣何国何郡何郷
何之何某、極ナリ生年月日
死年月日、、、、、、、、、

充袋

白何
麻レ
ヲモ
以テ
製ル



長ハ二尺位

枕一箇



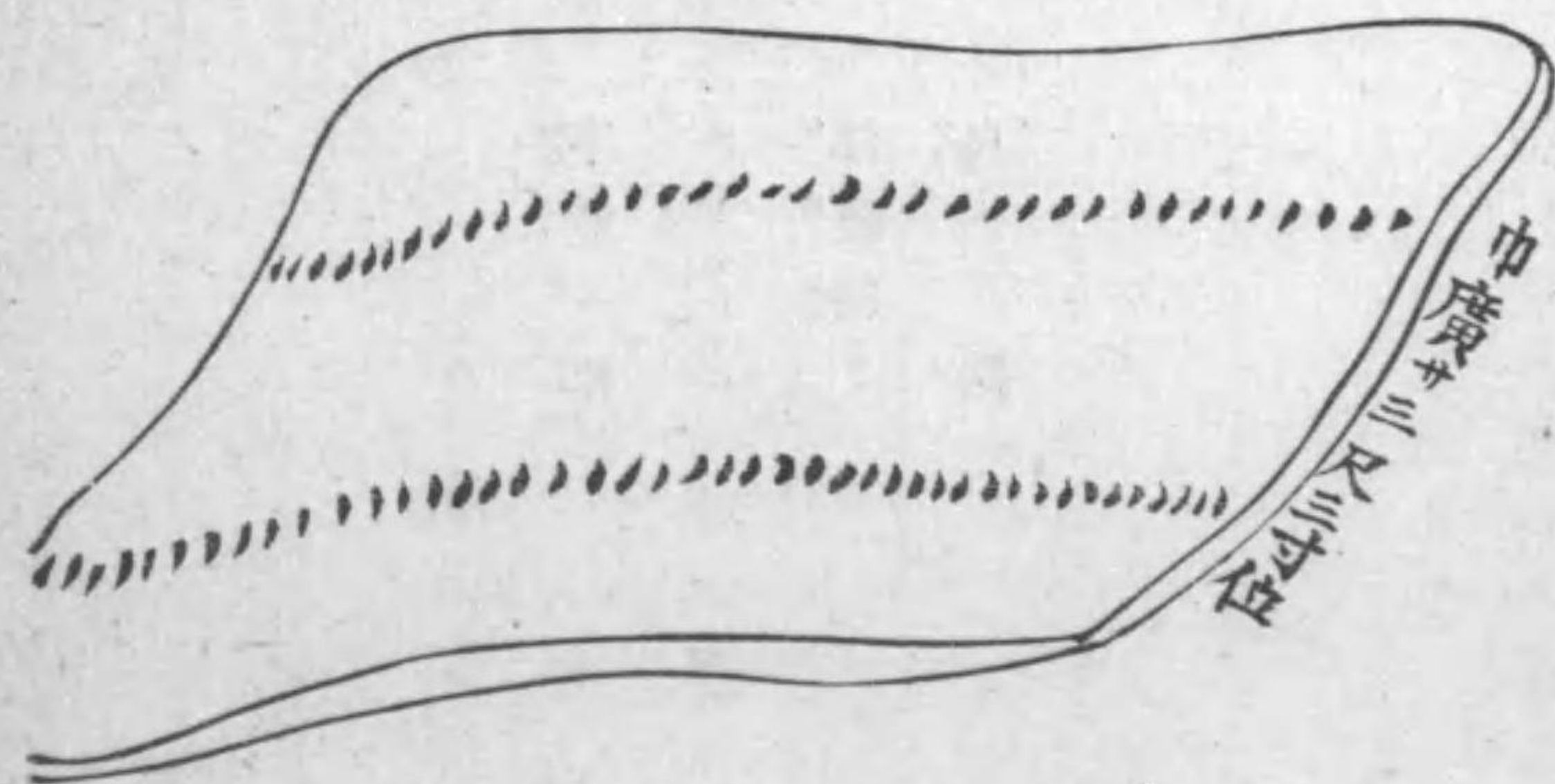
テ綿ヲ
製ル入

ルレ穀茶
テ等又
ツヲハ
ク入粉

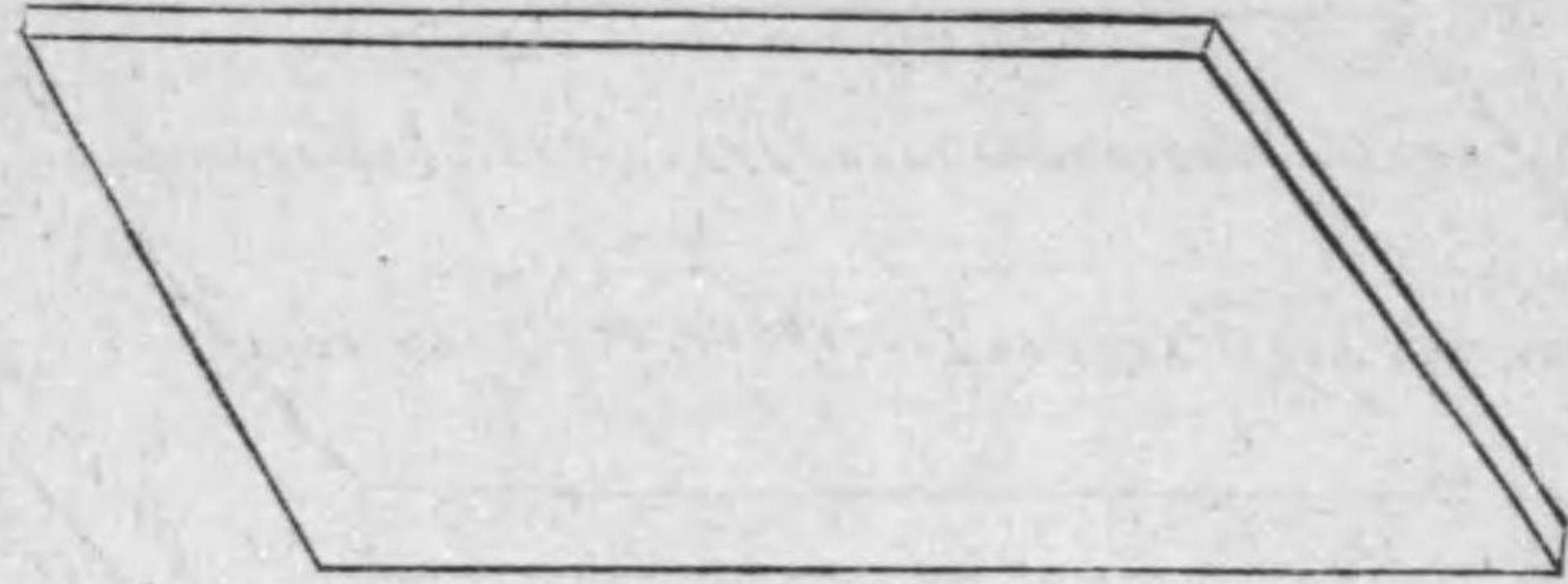
ツヲ詰棺
ク入ルノ
ルレ料中
テ綿ニ

衾褥各一枚

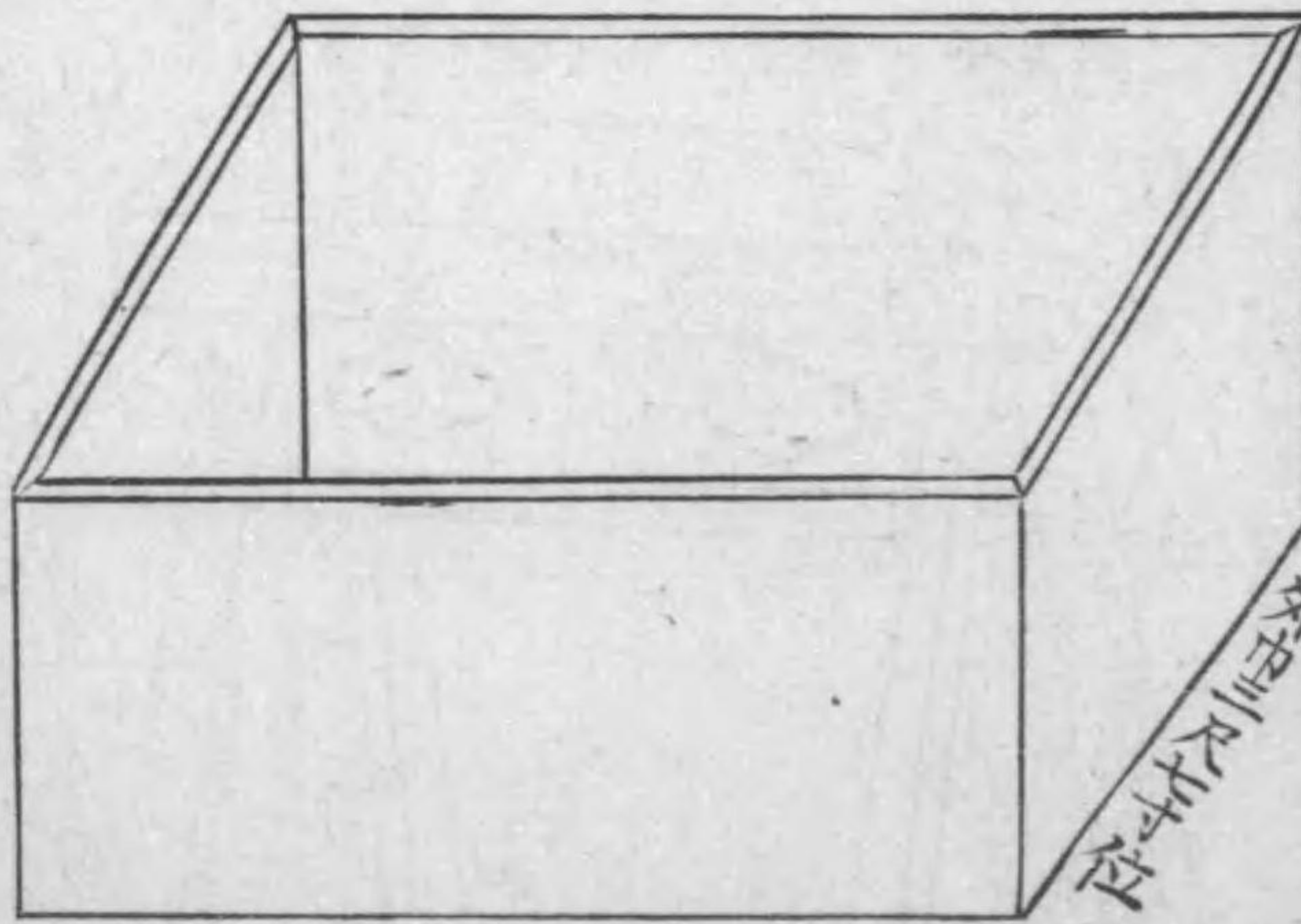
長ハ五尺七寸位



蓋



外高サ一尺六寸位

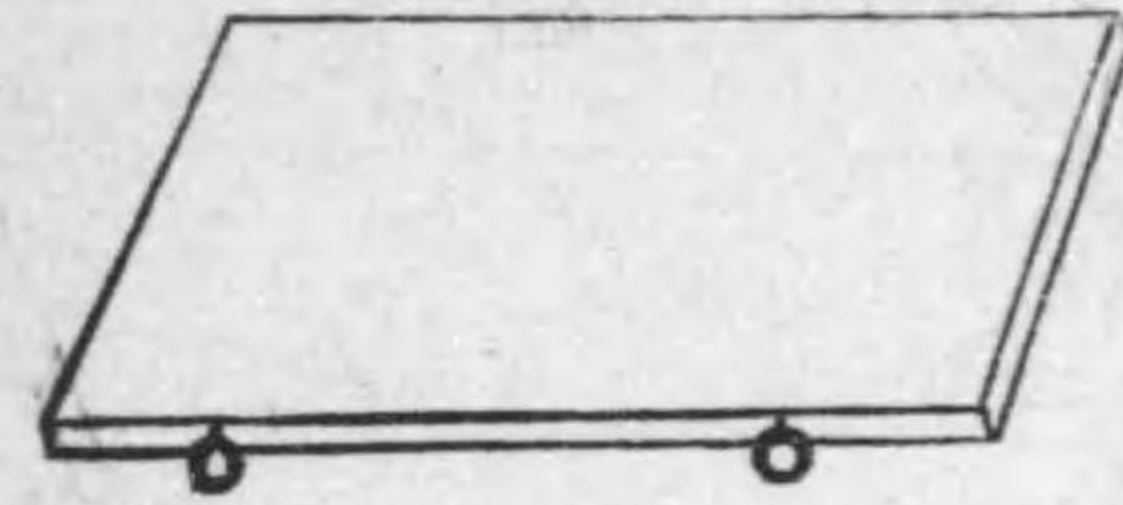


榔 外長サ六尺三寸位

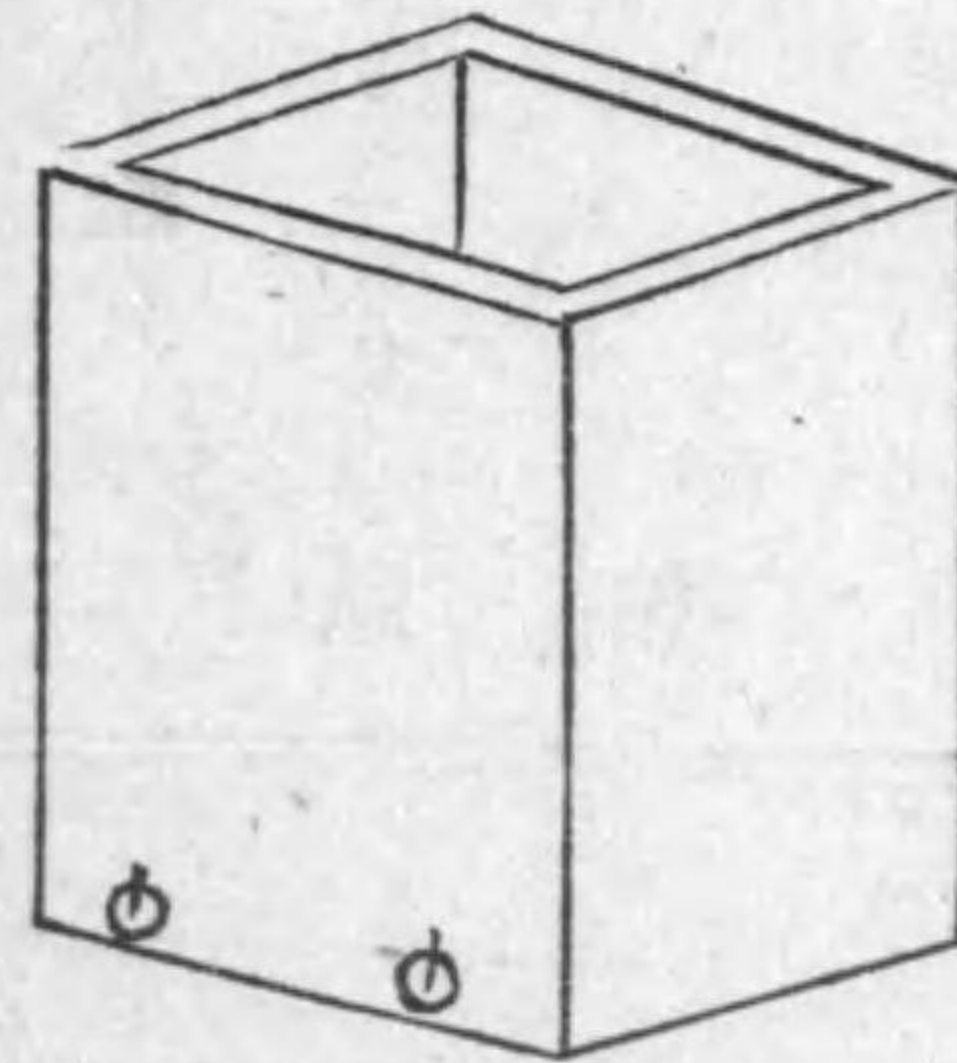
板厚サ一寸餘

松板ヲ用フ

蓋



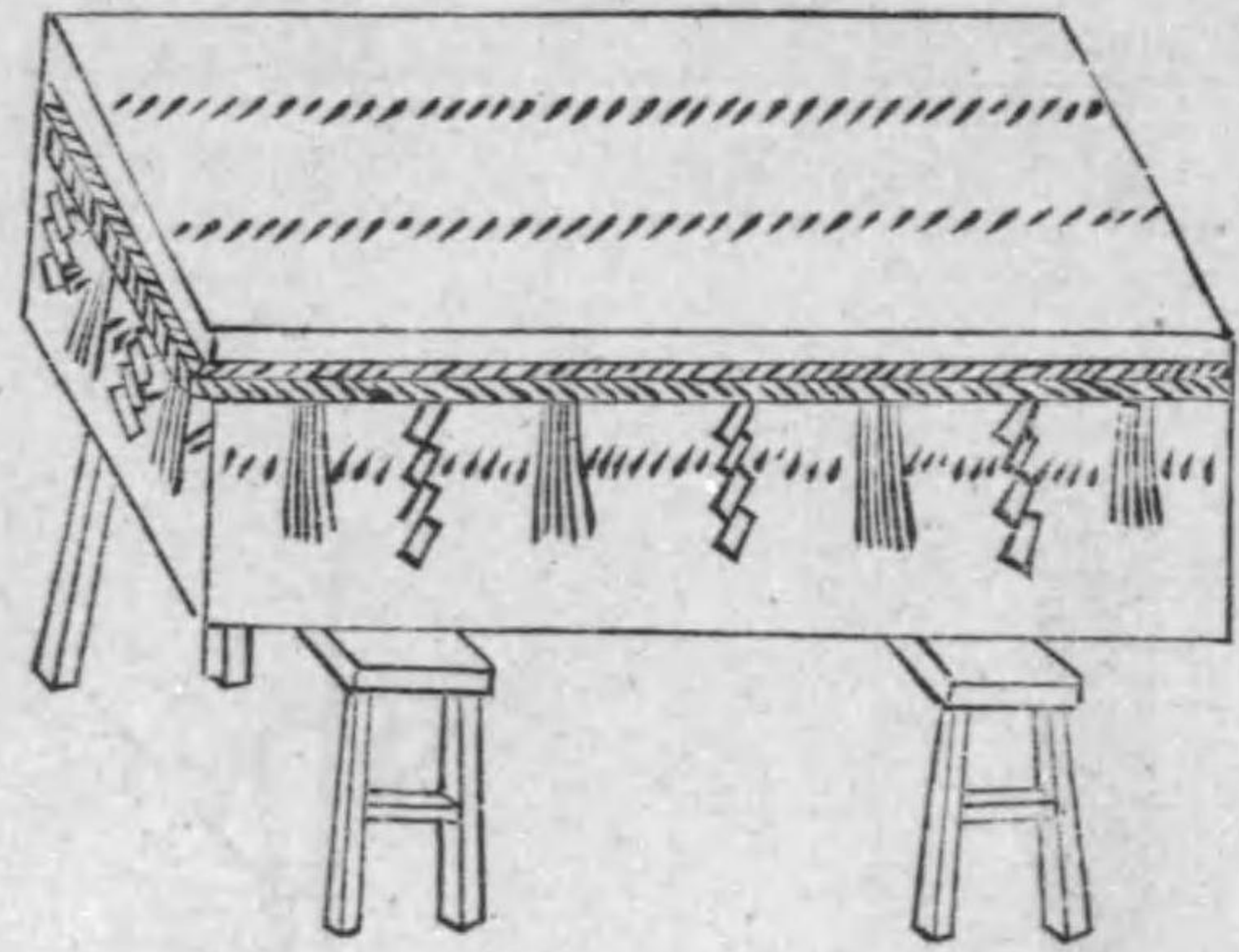
坐棺



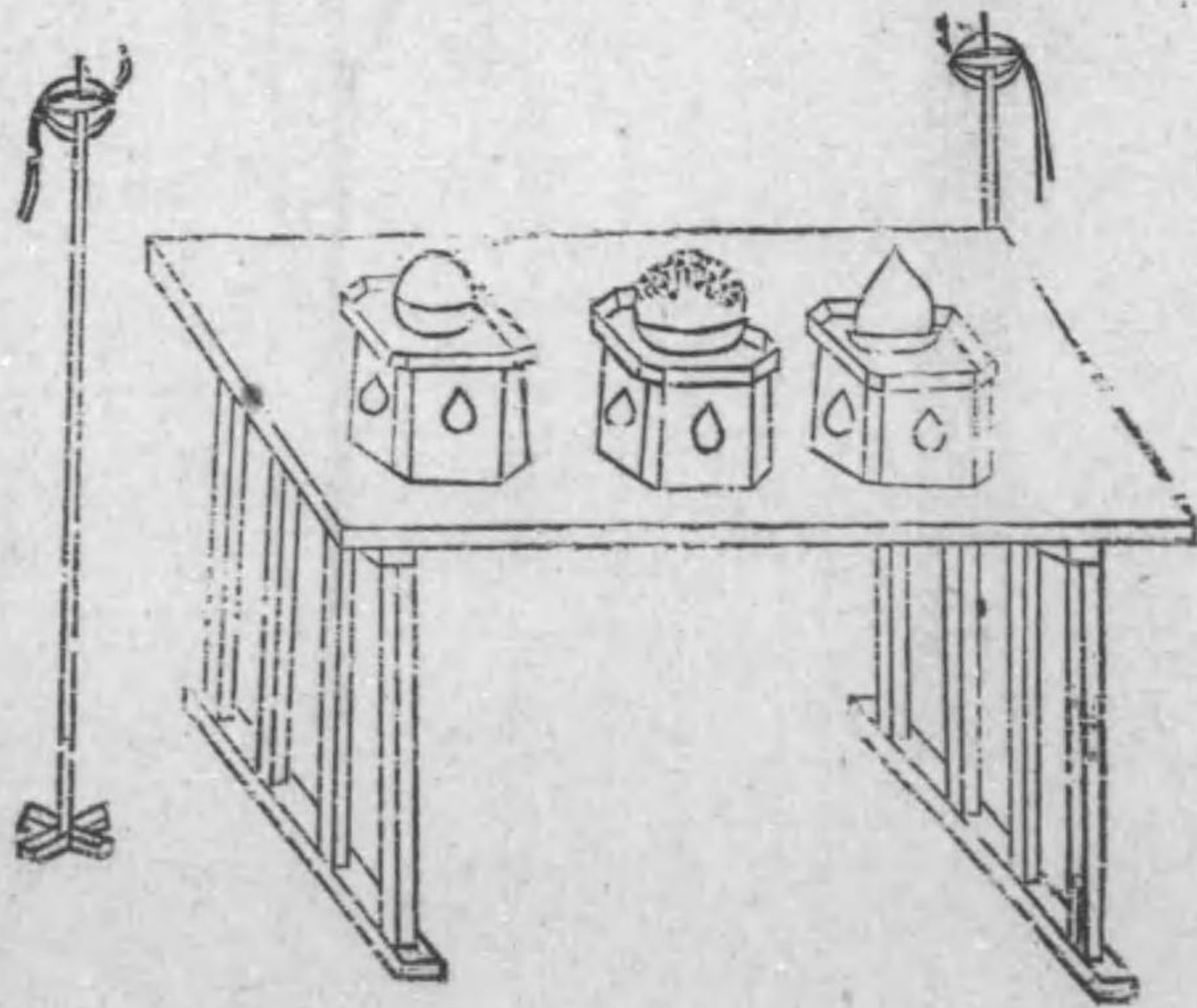
棺ノ造リ方ハ二重三重又ハ五重七重モアレハ其喪家ノ好ミニ任スベシ又積ハ番ヤ青ノ類ヲ用キベシ

坐棺ノ榔ハ後圖寢棺ノ形ニ准ヒテ作ルベシ

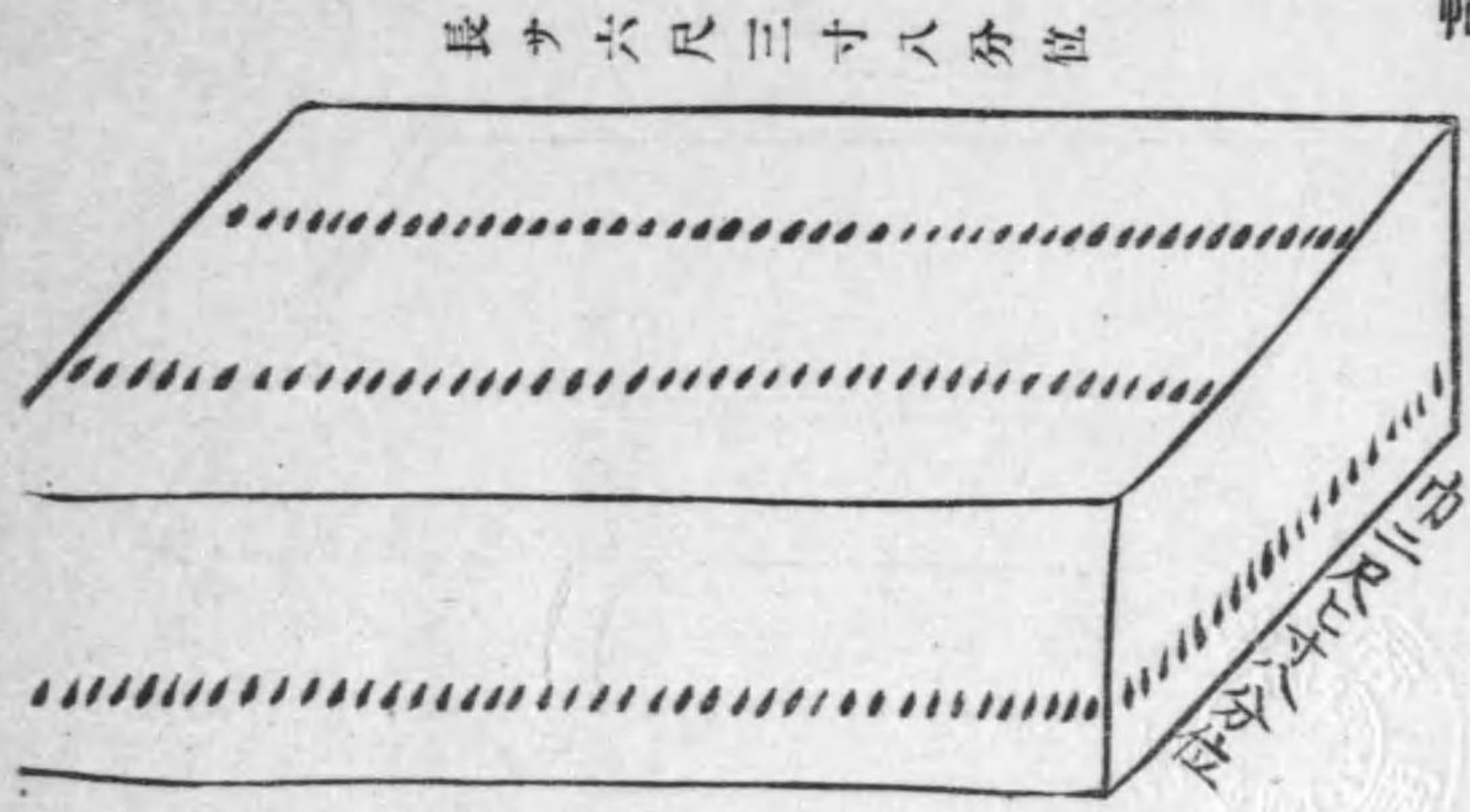
榔ハ棺ノ寸ニ應ジ二寸餘ノ甘キヲ付テ大ニ作ル土ヲ防ク爲ナレハ板モツスク削リモアラクテヨシ



張遺
リ體
テヲ
凳棺
子ニ
ニ欵
安メ
置靶
シヲ
タル掛
ルケ
圖注
連
繩
ヲ



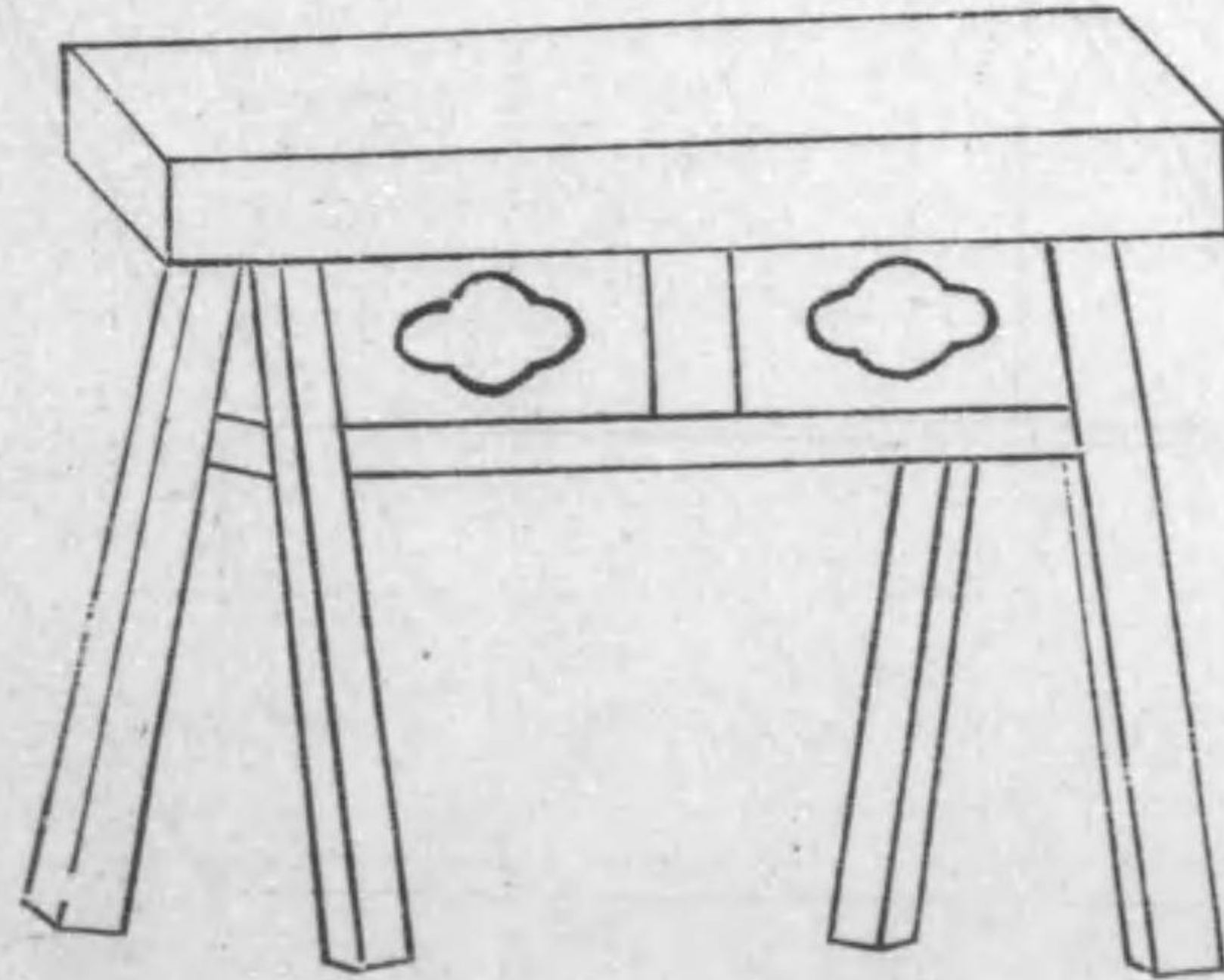
百四十七



長サ六尺三寸八分位

靶高廿一尺一寸五分

長六尺三寸八分位



凳子二脚

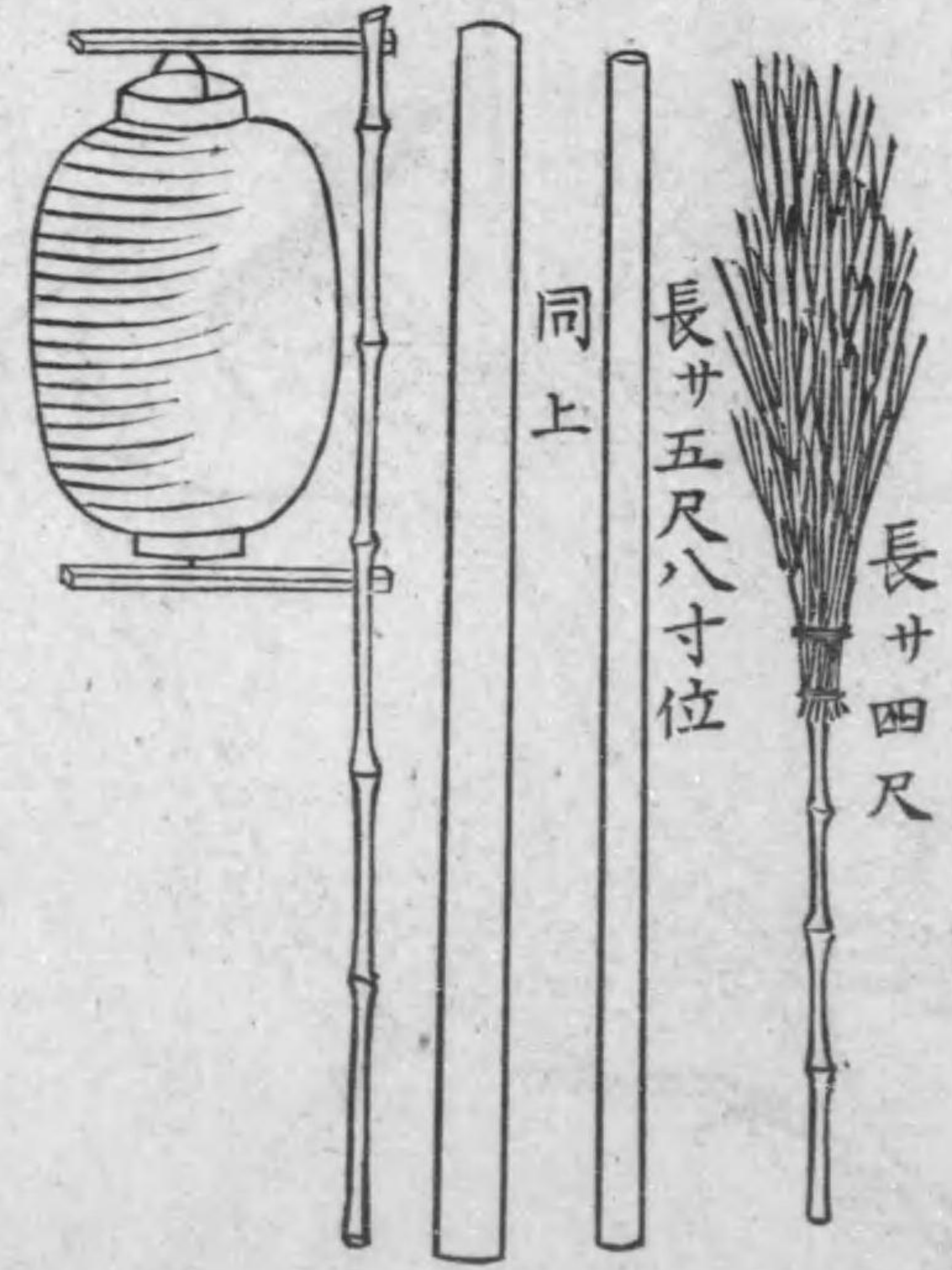
百四十六

灯
燈

杖
袋

白
杖

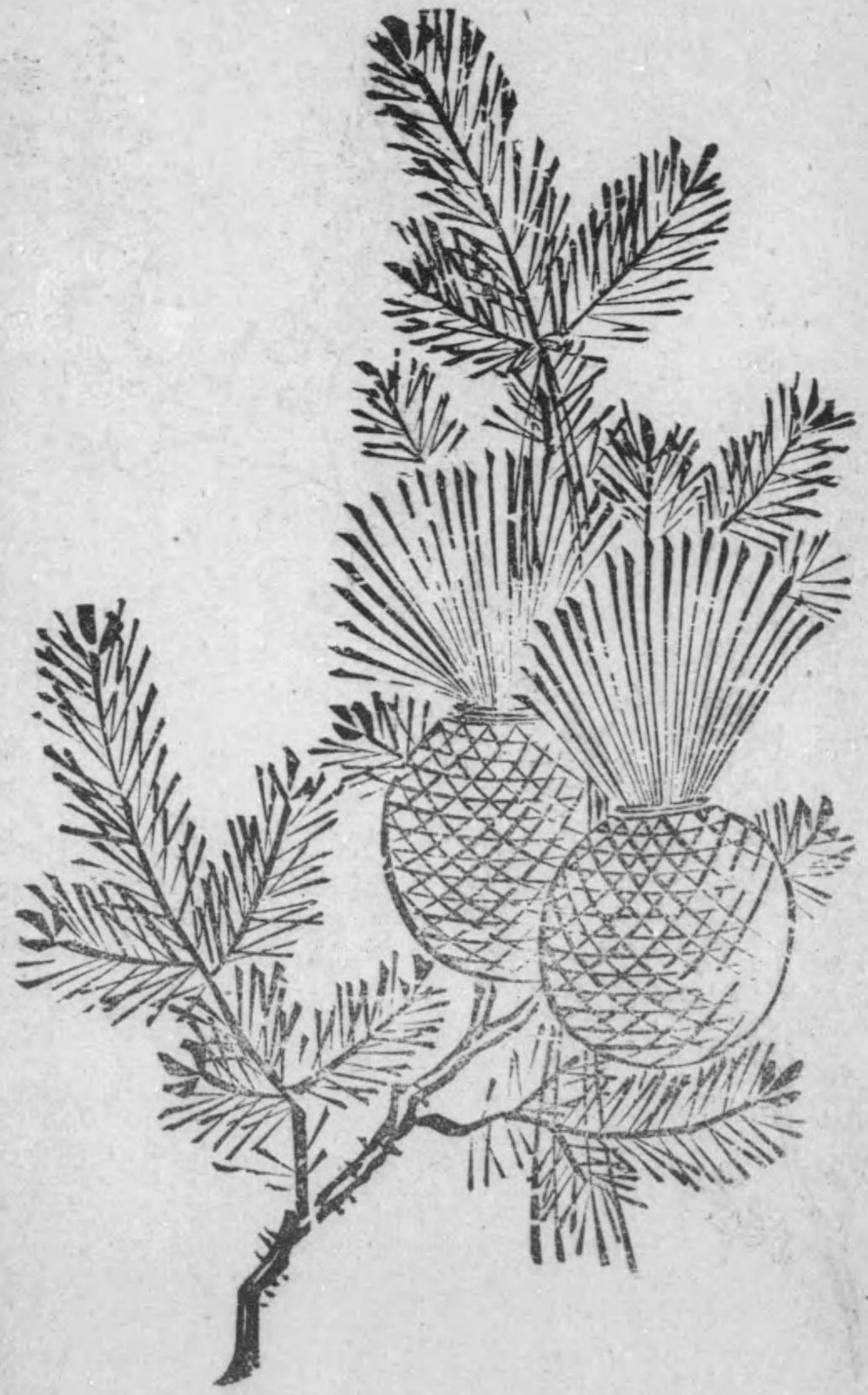
箒



秉
炬

桃
菊





若松鬚籠

高サ七尺餘

籠ニハ葉ヲ入ルベシ



紅梅雉子

高サ七尺餘

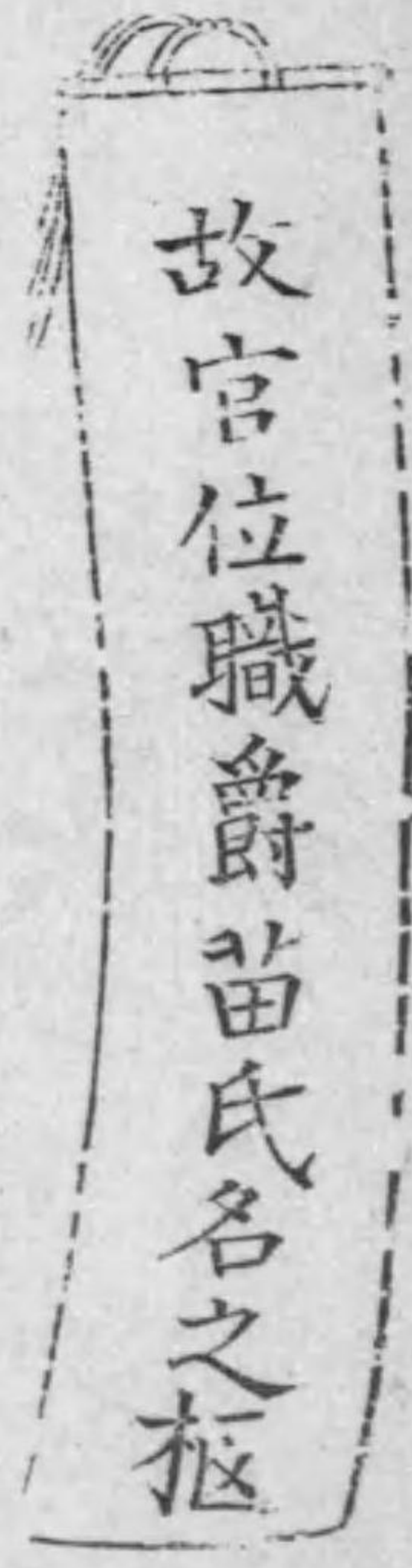
萩鶉



高サ七尺餘

百五十二

銘旗

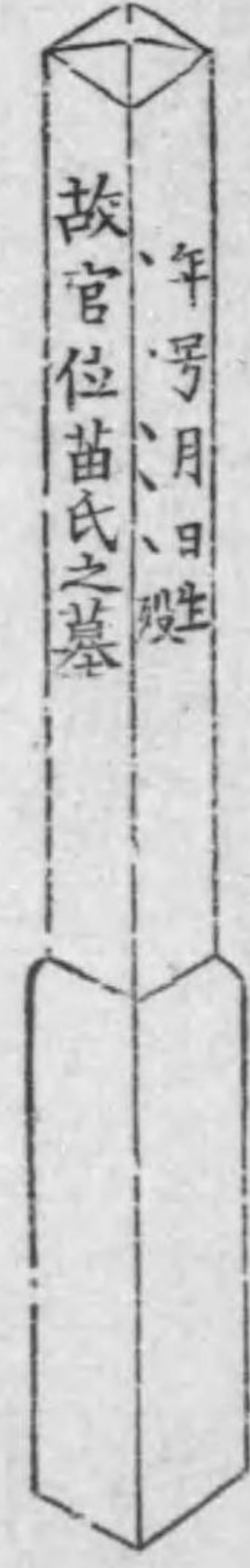


旗竿

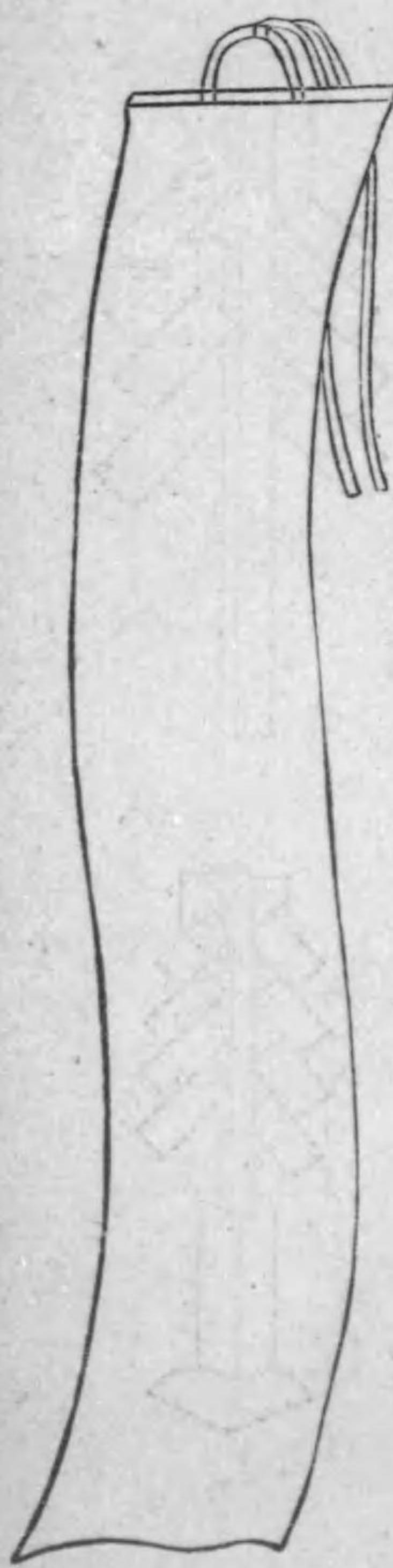


但シ紅白ノ旗モ此圖ニ同ジ

墓標



白旗赤旗



長サ七尺五寸

素絹

百五十三



紅楓鴨

高サ七尺餘

麻

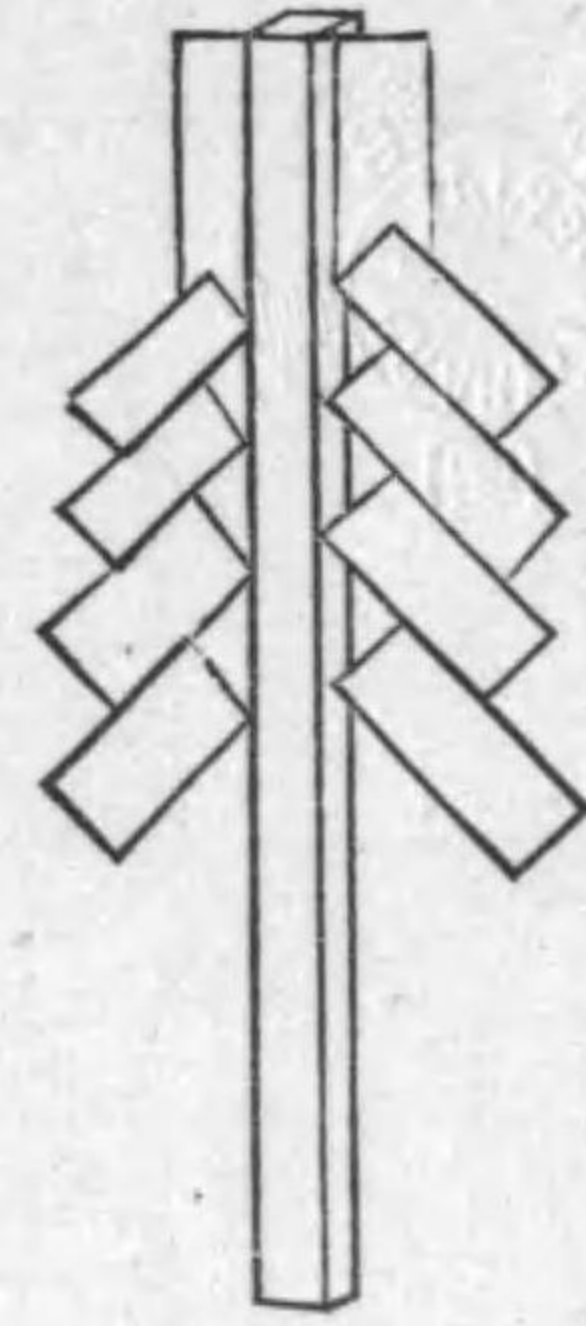
幣

玉串

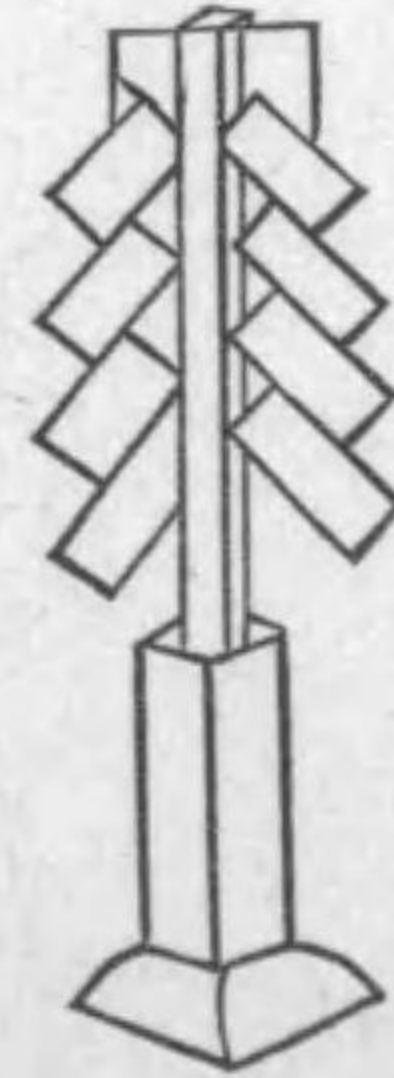


榊ニ垂ハ八垂ノ紙ト麻トヲ以テ製ル

垂ハ紙ヲ四垂ニ切テ著クベシ



大



小



白木弓二具

白羽矢四本

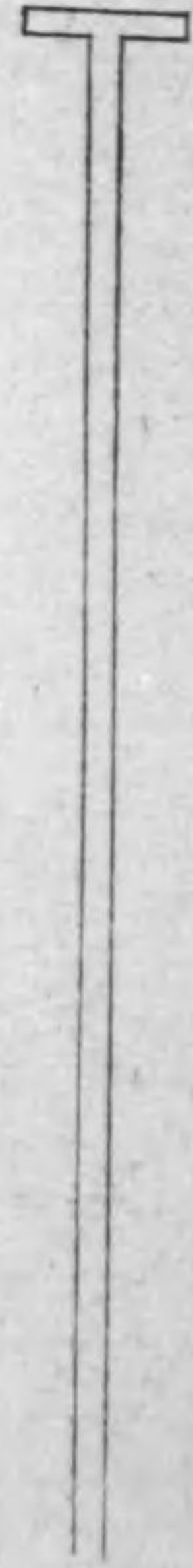
絹櫛に五色

太刀

同袋



撞木杖一本

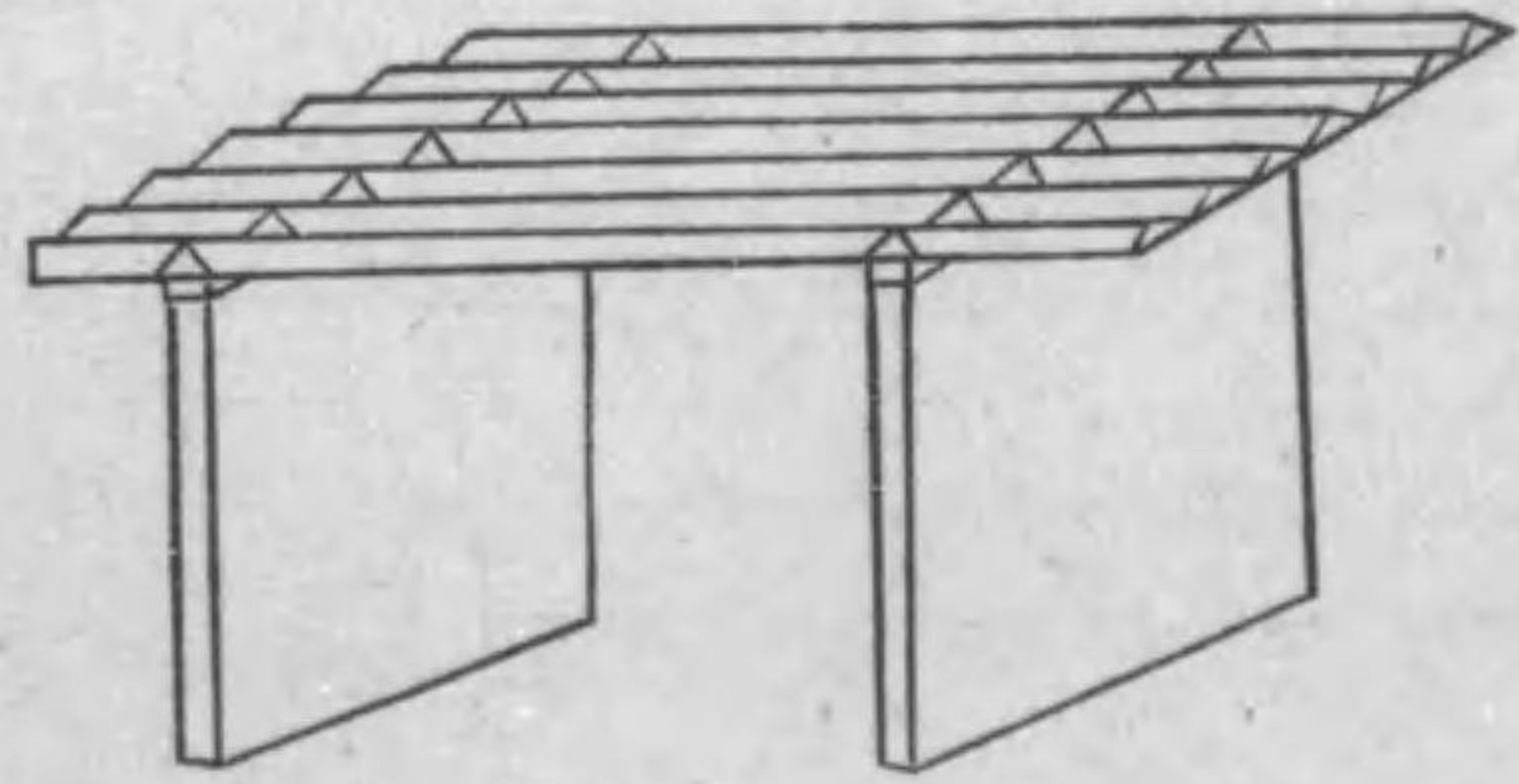
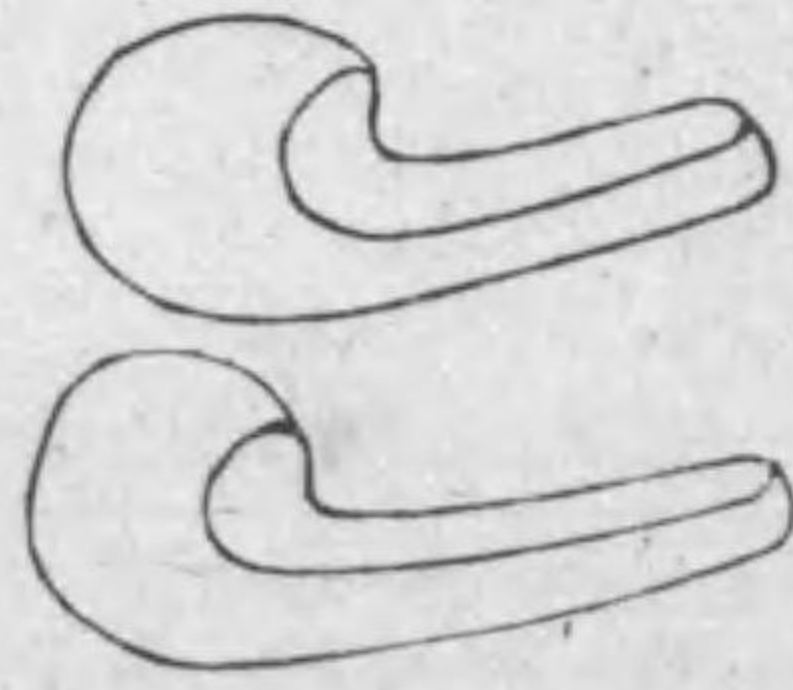


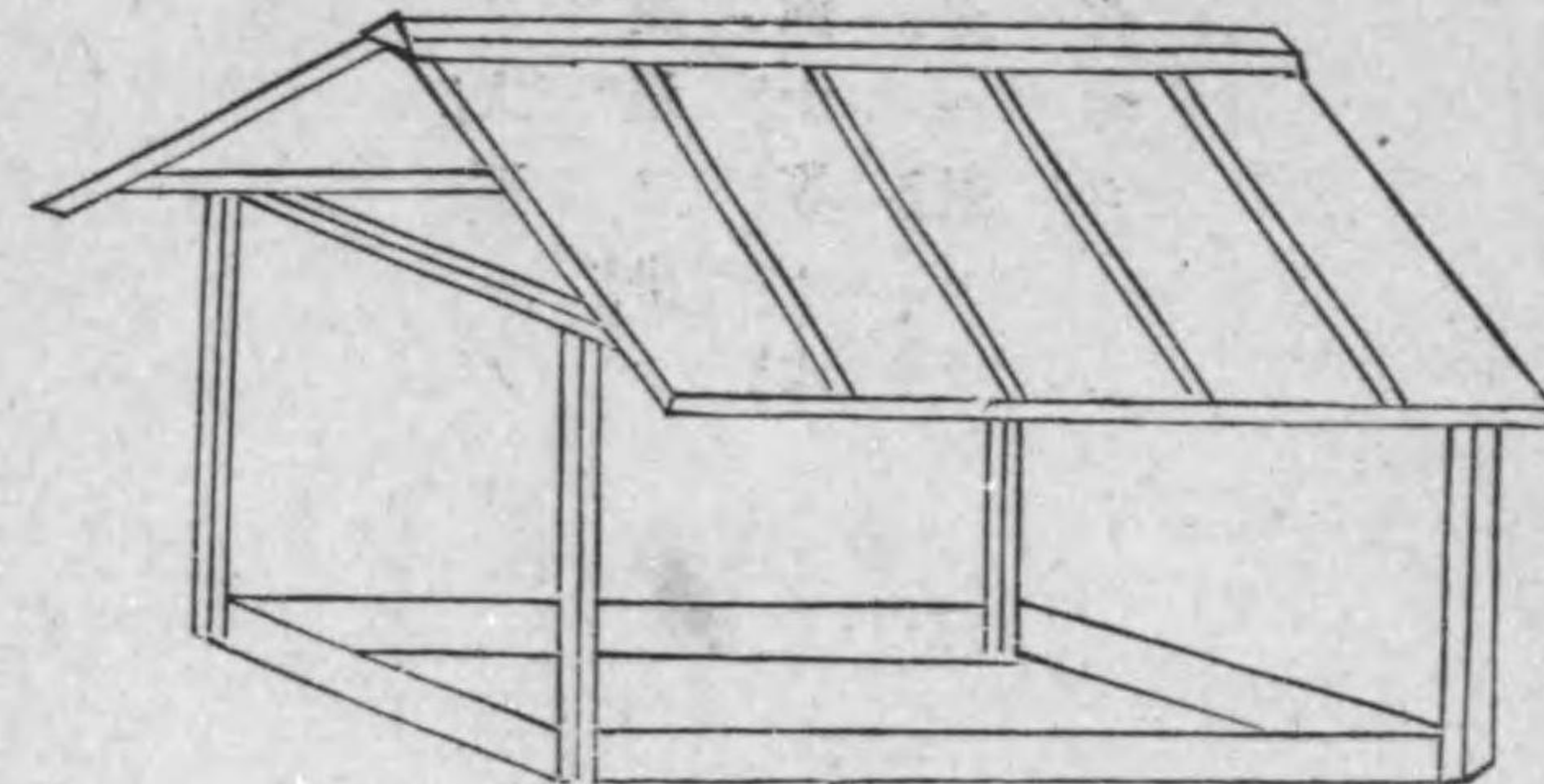
同袋一枚



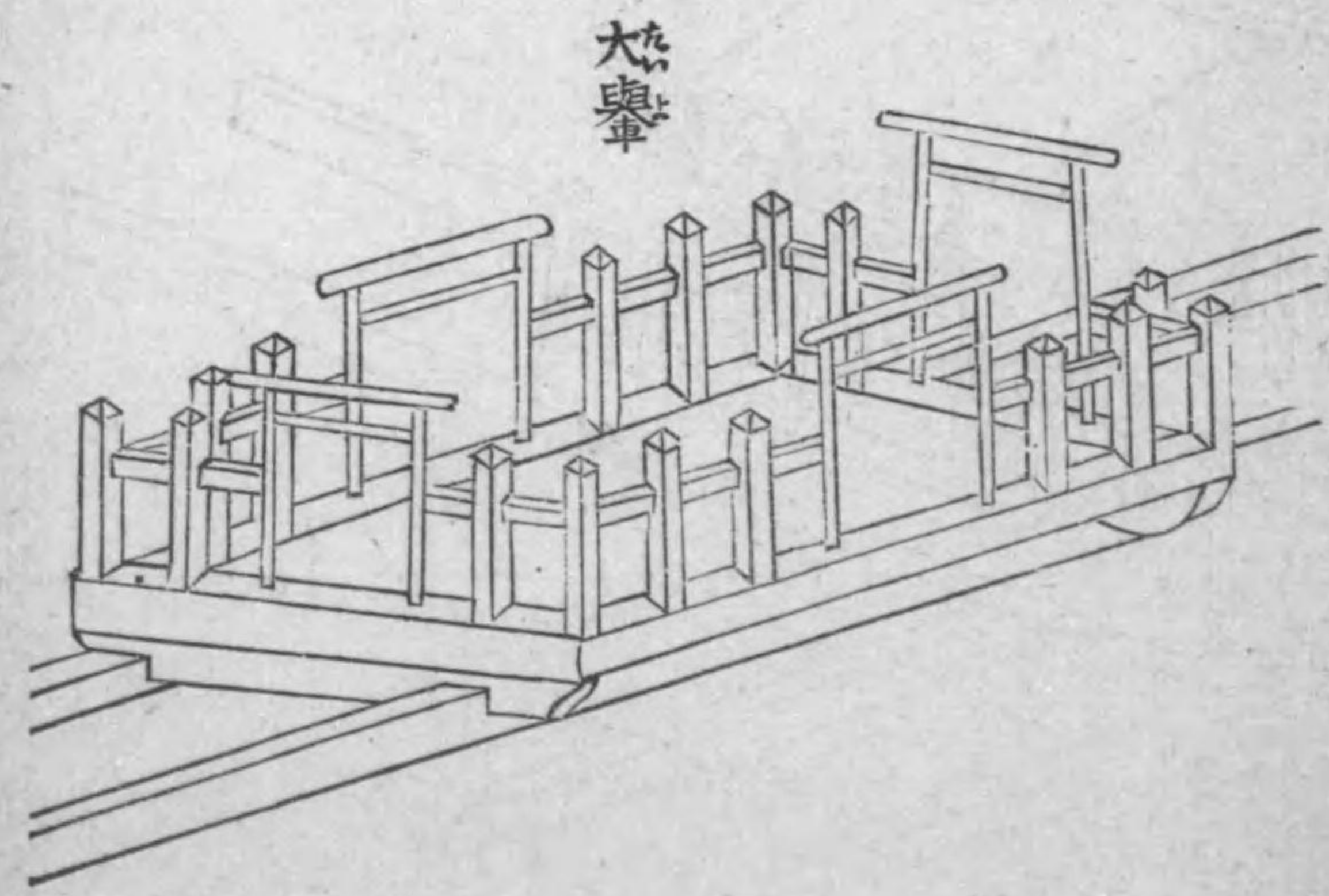
表素絹
裏白麻

沓一具
沓臺一脚





棺屋根



大擧

百五十九

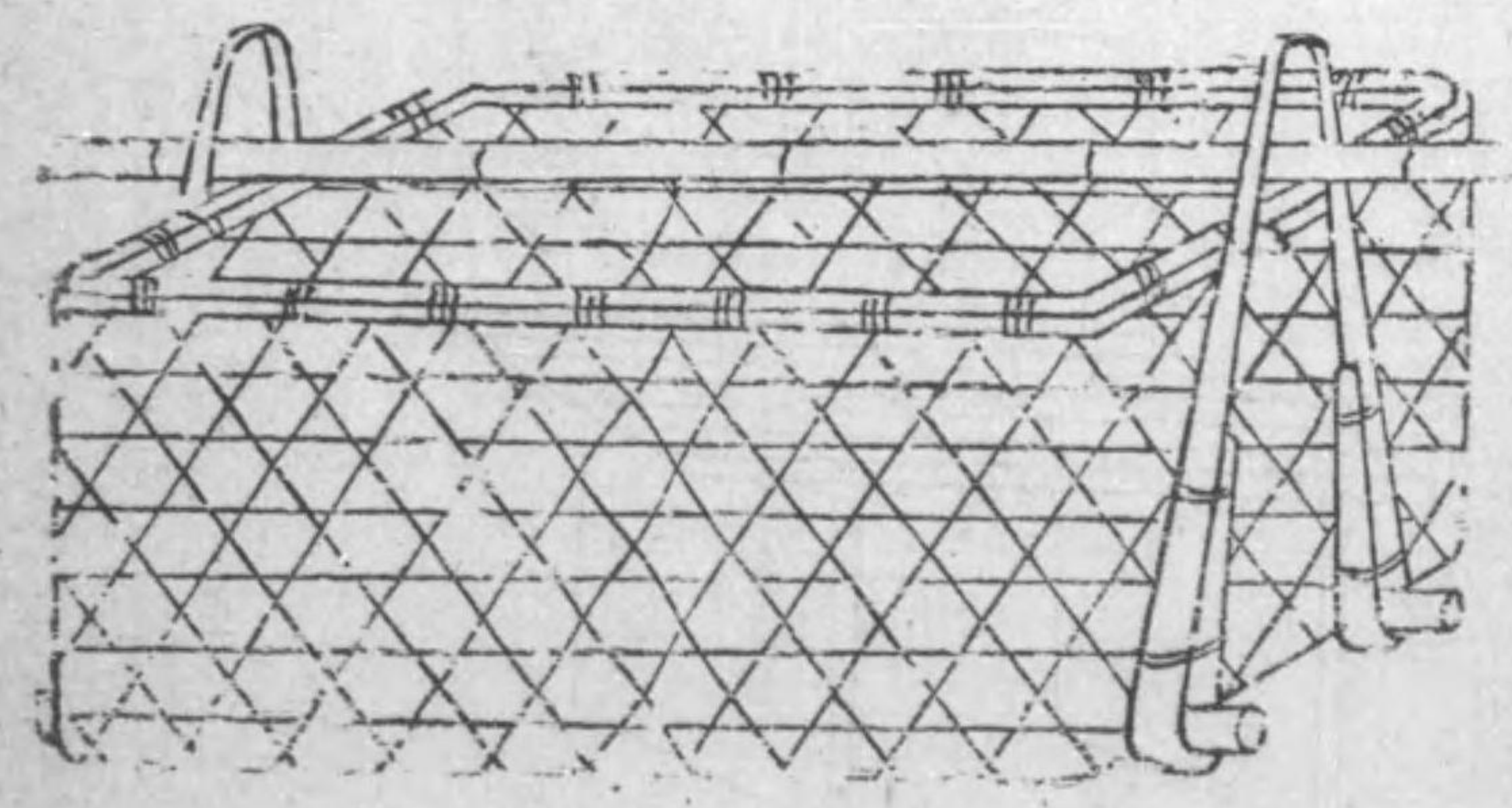
杓



手桶



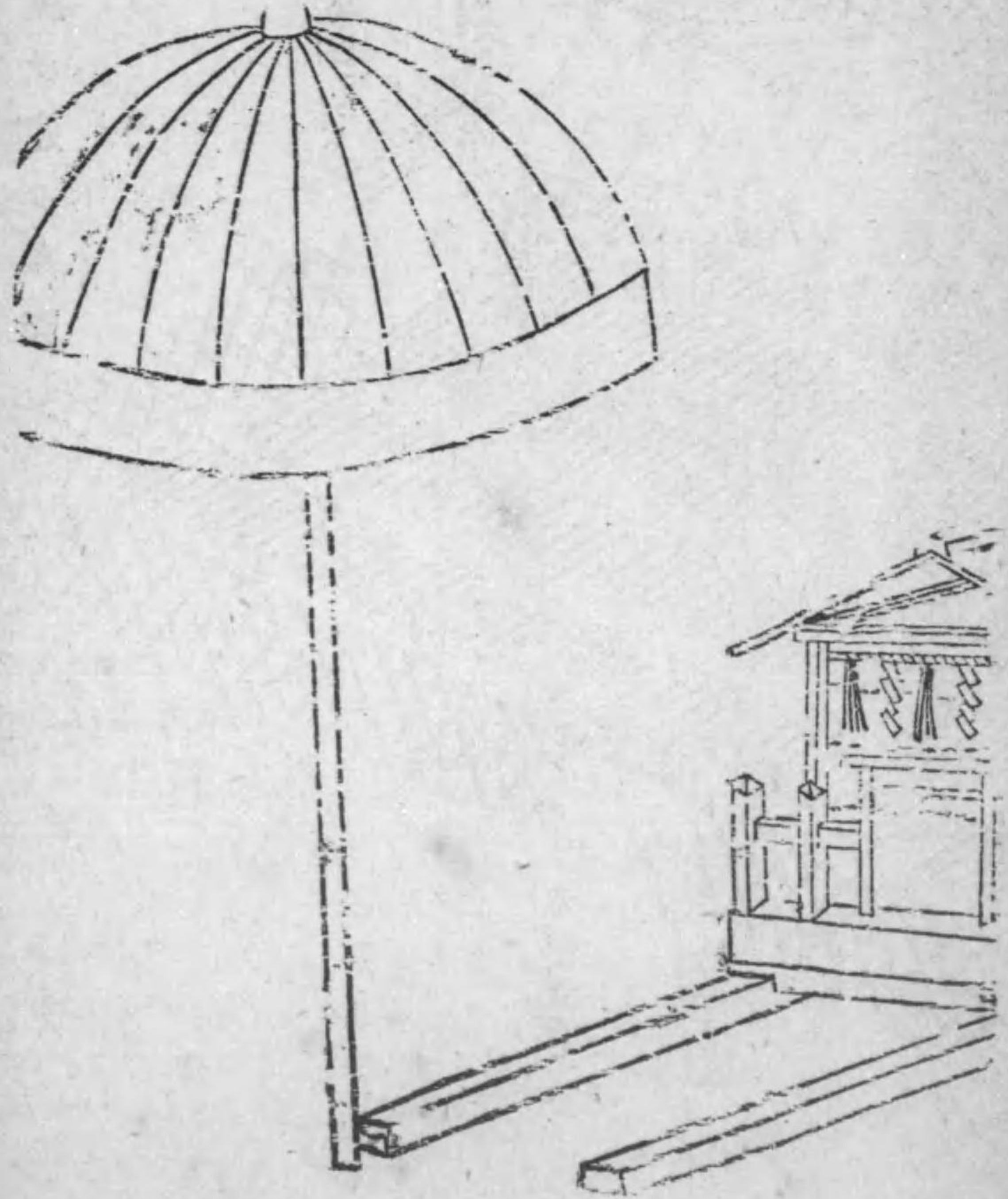
籠長持一荷



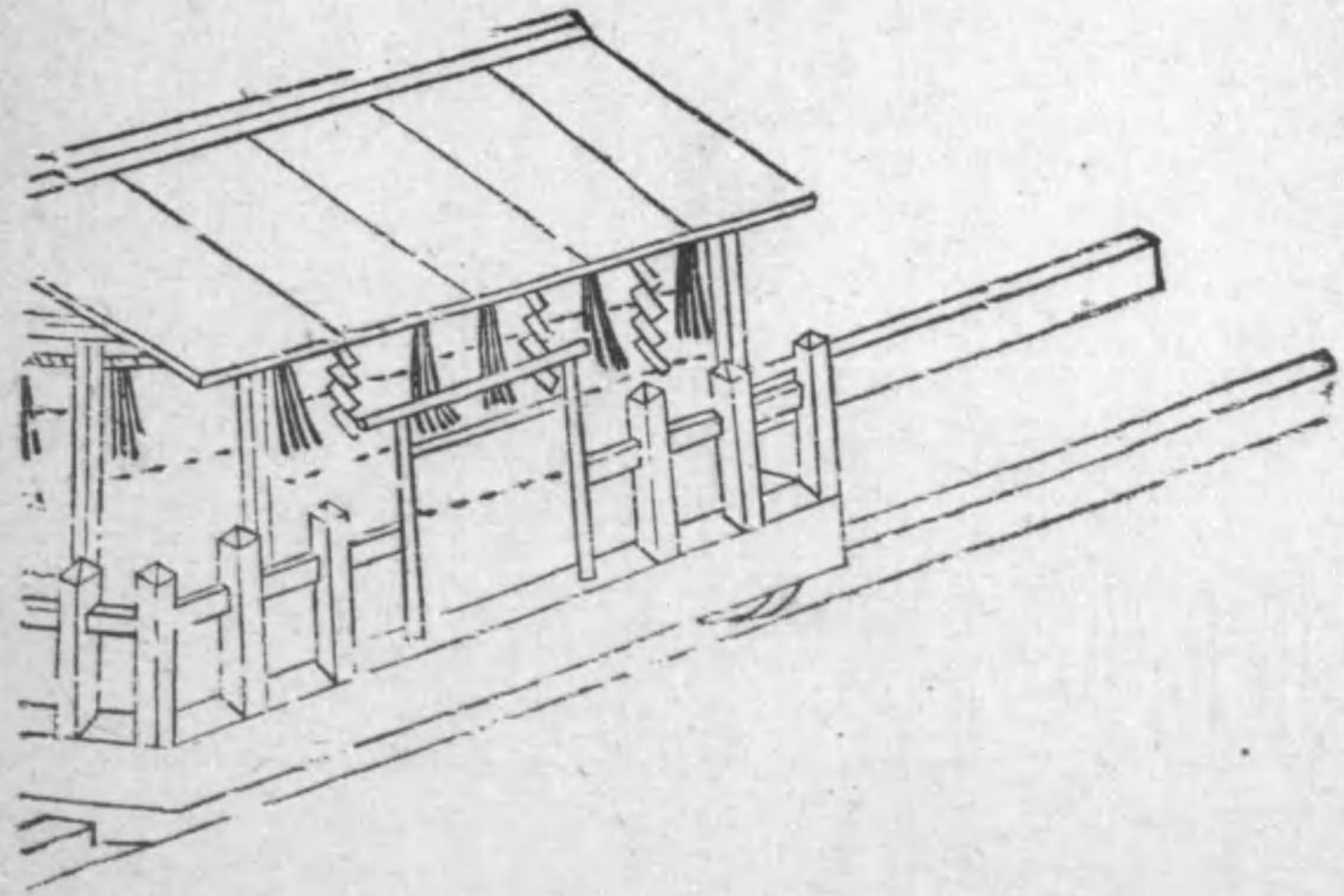
玉串手桶杓等ヲ入ルノ料

百五十八

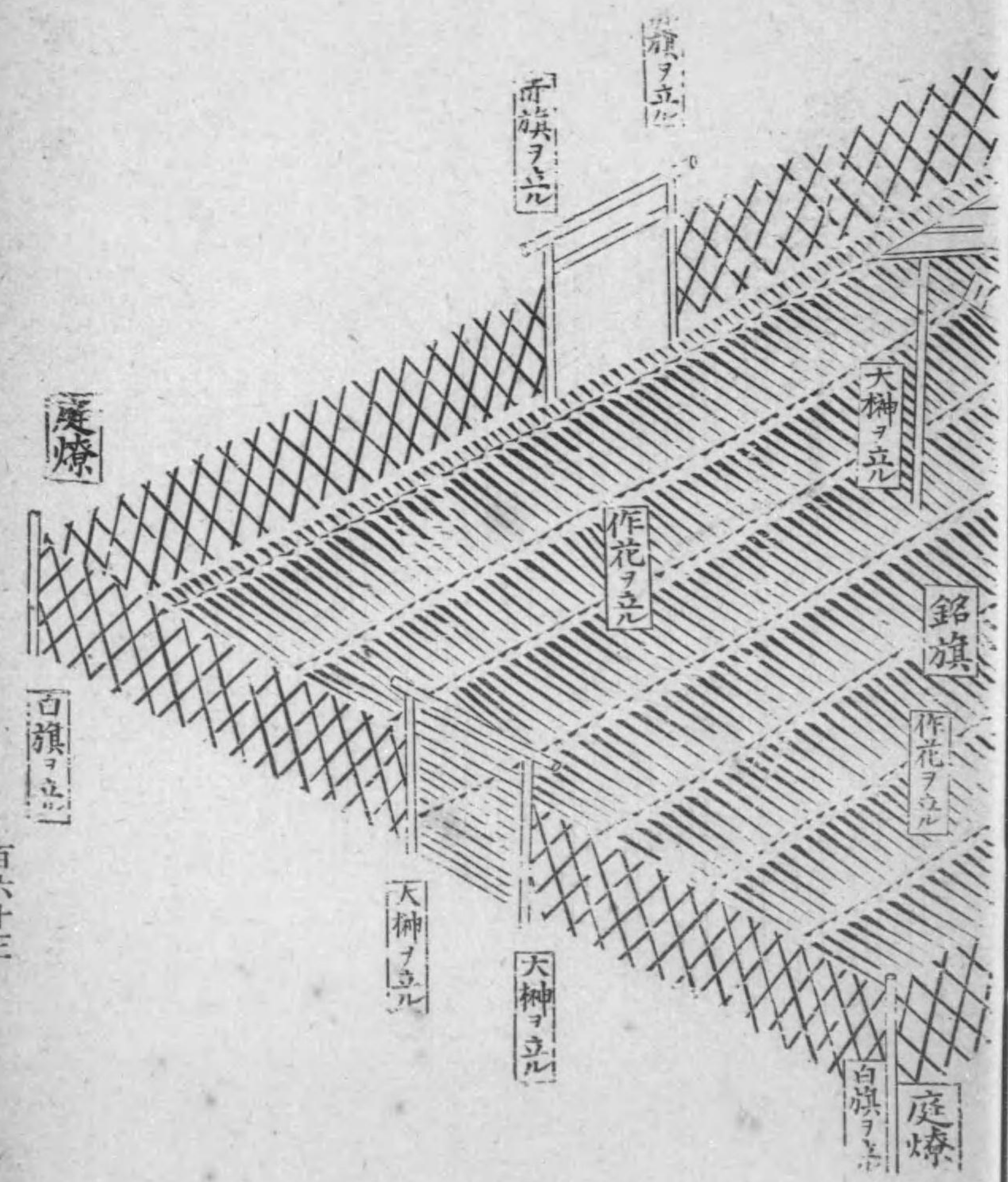
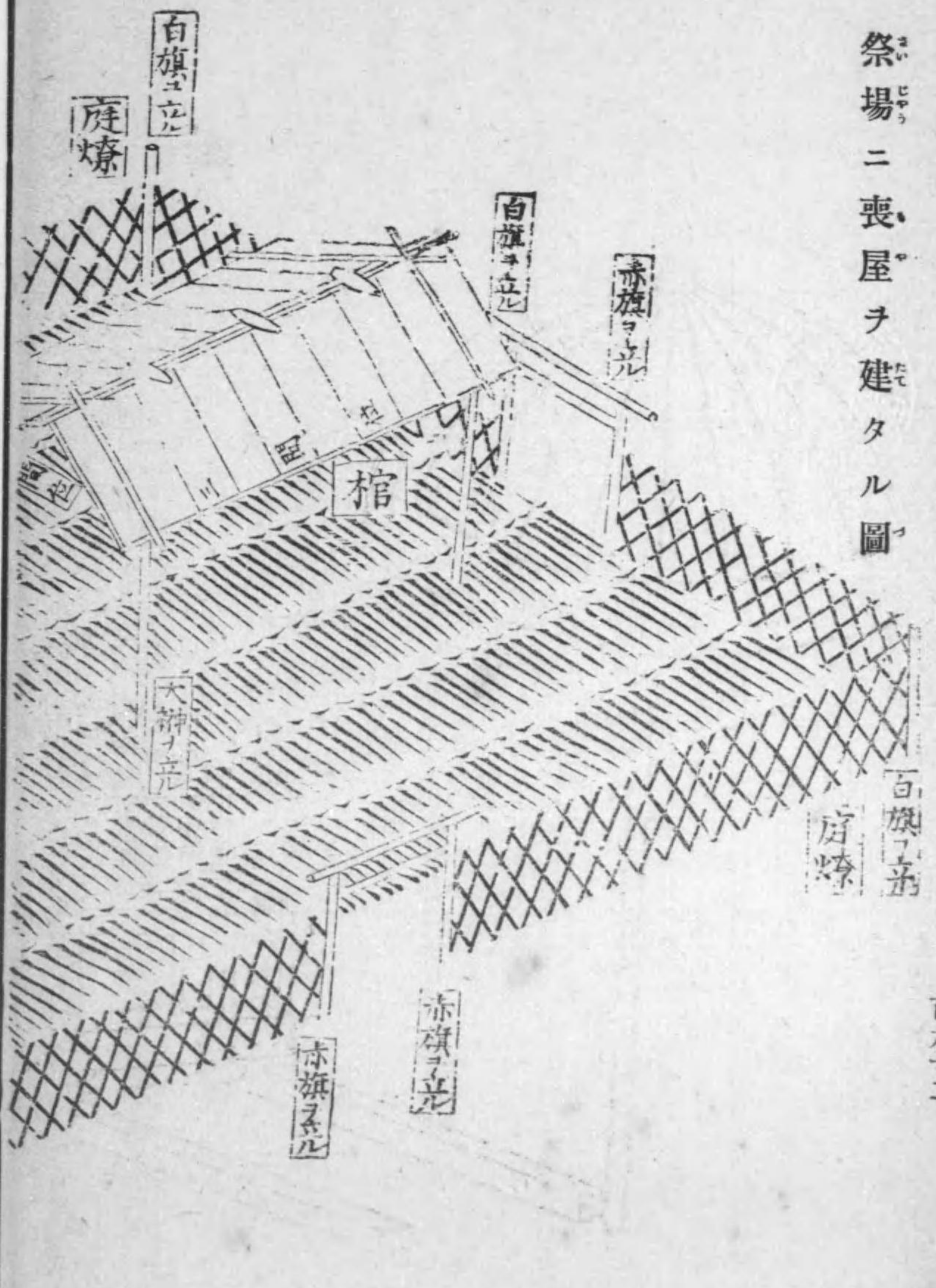
蓋



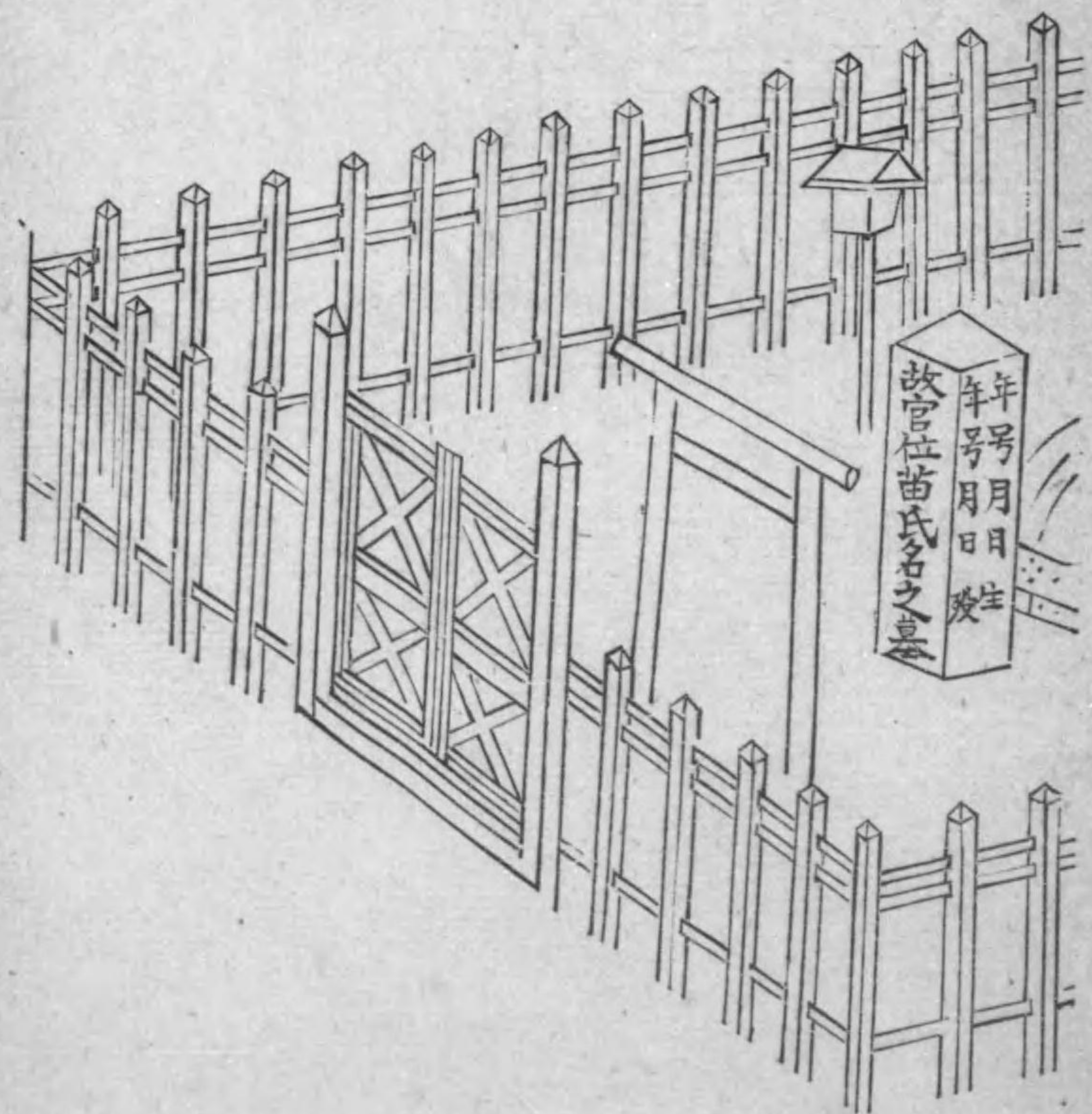
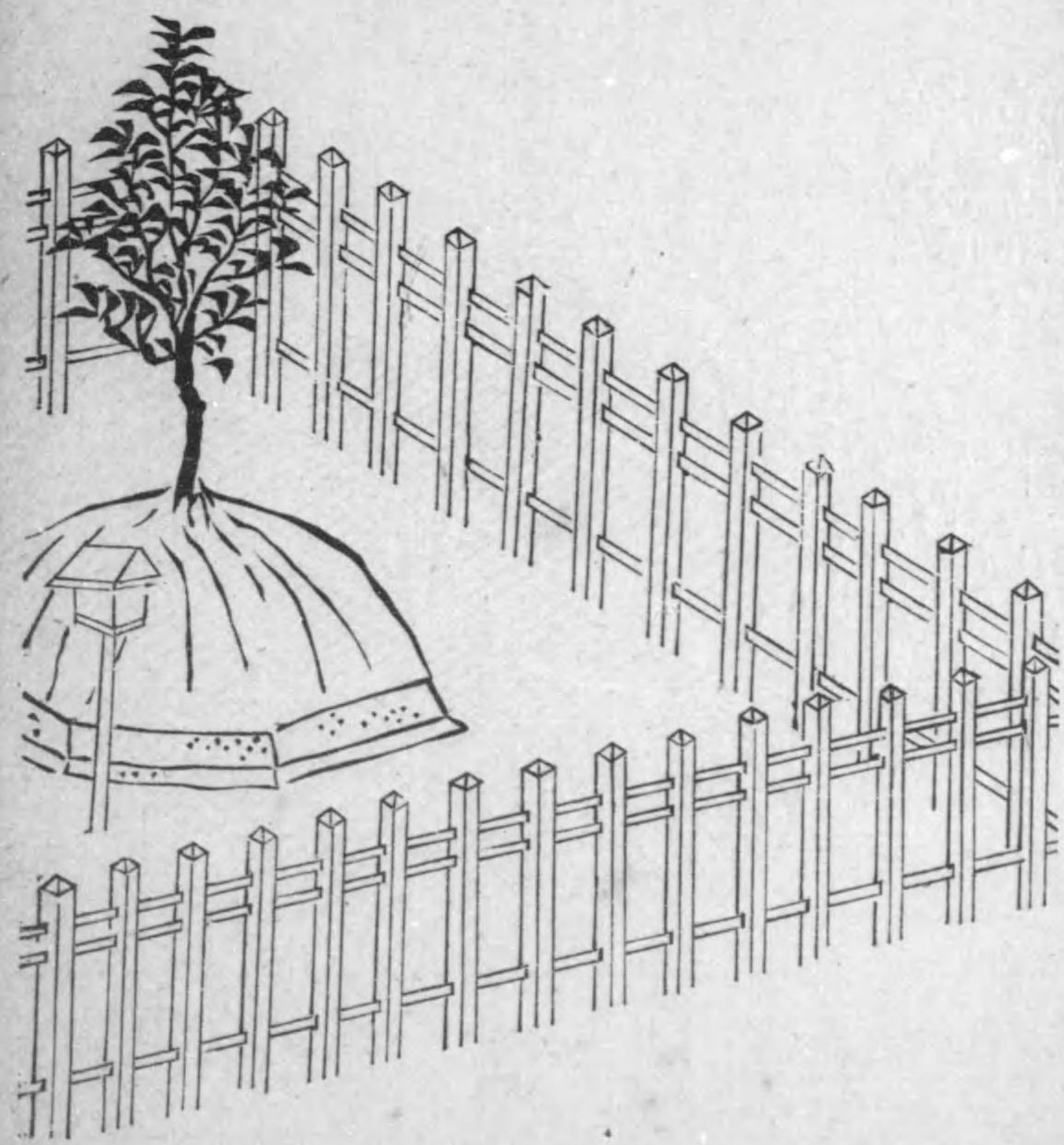
柩ヲ大蓋ニノ
セ屋根ヲ掛タ
ル圖中等ノ式
ハ是ニ倣ヒテ
作ルベシ



祭場ニ喪屋ヲ建タル圖

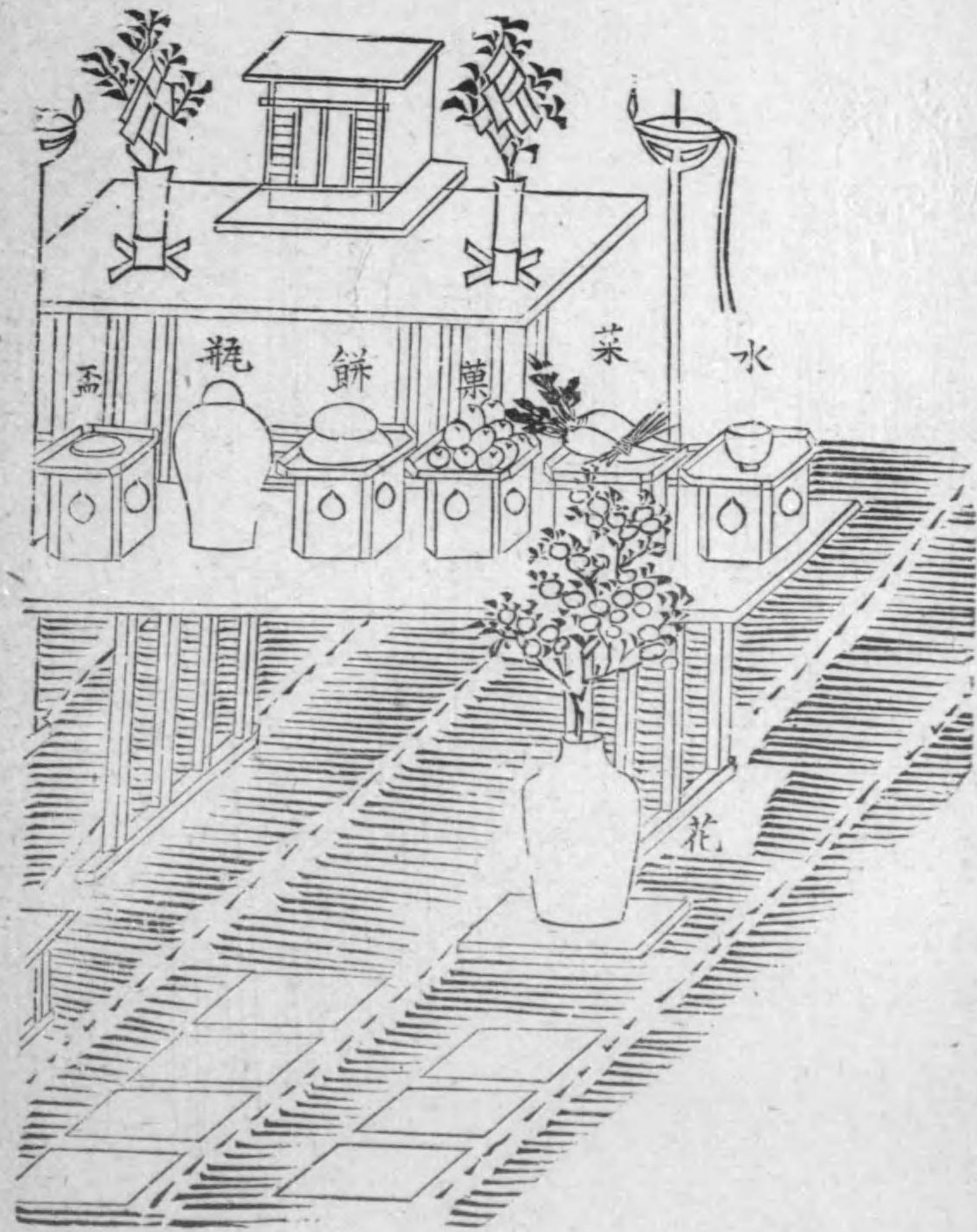


奥都城ノ圖



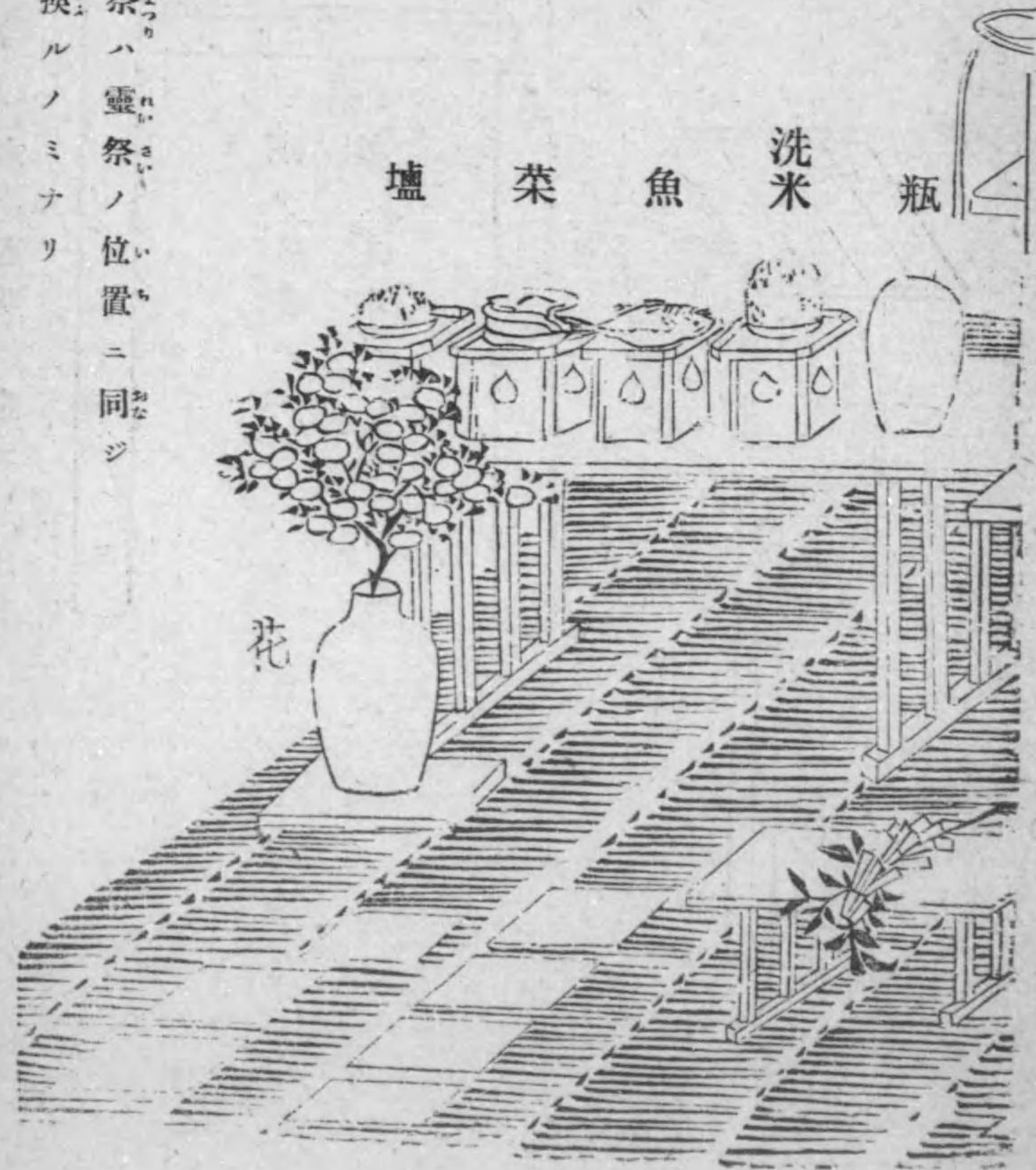
年号月日生
故宮位苗氏名之墓

靈祭ノ圖



靈舍ヲト換ルノミナリ
 墓所ニテノ祭ハ靈祭ノ位置ニ同ジ

瓶 洗米 魚 菜 壺



附錄 服忌令

總て服忌は父方は重く、母方は輕し、累喪と唱へて、父の服忌滿ざる中に
 母の服忌かゝる時は母死去の日より定まりの服忌かゝるなり、重き服
 忌の中に輕きかゝる時は、重き服忌の中にてなすなり、小兒の七歳未滿
 は服忌なし、跡目相續の養子は實子に同じ養子母遺跡相續分地配當の
 養子は實父母と同じ服忌なり。

五等親圖

- 一 等 親 父、母、養父、養母、實の父母、非すして我、夫、子、養子、他人の子をもらひそ、
- 二 等 親 祖父、母の父、祖母、母の母、嫡母、はゞ、繼母、まゝはゞ、伯父、伯母、兄弟、姉妹、夫の父、母、妻、妾、姪、孫、子の婦
- 三 等 親 曾祖父、母の父、伯父の母、夫の姪、從父兄弟、姉妹、異父兄弟、姉妹、夫の伯叔父、姑、庶子の婦、姪の婦、繼父、
- 四 等 親 高祖父、母の父、從祖々父、母、從祖伯叔父、姑、夫の兄弟、姉妹、兄弟の妻、再從兄弟、姉妹、外祖父、母、舅、姨、前父の子、兄弟の孫、從父兄弟の子、外甥、曾孫、孫の婦、

神社參詣ノ輩自今死葬ニ預リ候者ト雖モ當日ノミ可相憚事
但シ服忌ノ者ハ從前ノ通可相心得事

同年六月二十八日同第百九十二号達

近來自葬取扱候者有之哉ニ相聞候處向後不_レ相成_一條葬儀ハ神官僧侶
之内へ可相頼_一候事

同年十一月同第三百三十六号布告

皇靈御追祭御式年左ノ通被_レ改候事

一年 三年 五年 十年 二十年 三十年 四十年 五十年 百年
以後百年コトニ祭_レ之

同年十二月同第四百七号布告

御歴代皇靈ヲ初_レ其他御式年之儀從前一周者滿二年即二十月等之繰方ヲ
御追祭被_レ爲_レ在候處自今總テ滿年之全數ヲ以テ被_レ爲_レ行候條此旨相達
候事

同六年二月七日同第四十二号達

除服出仕 宣下候輩御祭典ノ節奉仕參拜不_レ及_一憚候事
但忌明ノ輩同様不_レ及_一憚候事

同年二月二十日同第六十一号布告

自今混穢之制被_レ廢候事

同年三月二十二日司法省ヨリ式部寮ニ問合

自今混穢之制被_レ廢候旨過日第六十一号御布告有_レ之候處右混穢ト申
者忌服中忌日數相過服日數中ノ者亦ハ死穢ニ觸_レ候者改葬主且其
事ニ預_レ候者或ハ神事ニ預_レ候輩産穢出血殺傷吊喪灸治及五辛獸
肉ヲ食類品々ノ觸穢ノ儀ト相心得可_レ然儀ニ候哉承_レ知致度候條至急
御指示有_レ之度此段申_レ達候也

同二十三日式部寮回答

混穢ノ儀ニ付御問合ノ趣致_レ承_レ知_一候混穢觸穢ハ同儀ニ有_レ之混穢ハ忌
服トハ別儀ニ有_レ之候尤死穢以下肉食穢ニ至_レ是迄混穢觸穢ノ儀ハ
惣テ被_レ廢候事ニ有_レ之候忌ハ從前ノ通服ハ神事ニモ不_レ及_一憚儀候得_レハ
自ラ消滅ノ姿ニ有_レ之候依_レ而此段及_レ御回答_一候也

同年二月二十日第六十三号華族ニ達

從來子細ノ所勞ト稱シ候忌服ハ自今相受_レルニ不_レ及_一候事

同七年一月二十九日太政官第十三号達

葬儀ハ神官僧侶ノ内へ可相頼旨壬申六月第百九十二号布告候處自
今教導職ノ者へハ信仰ニ寄葬儀相頼候儀不苦候條此旨布告候事

十年六月二十九日山梨縣ヨリ内務省へ伺

教導職試補以上ノ僧侶ノ依頼ニ依リ葬儀取扱候ハ勿論ナリト雖モ
自己ノ父母亦ハ妻子等ノ葬儀ニ至リテハ本寺或ハ法類ノ内ニ依頼
シ葬儀施行爲致可然哉又ハ喪主自ラ取扱可然哉相伺候也

同七月二十一日指令

書面伺ノ趣ハ教導職ト雖モ自葬不相成儀ト可爲心得事
右ノ伺指令ハ僧侶教導職試補以上ノ儀ナレモ神道教導職モ之ニ
准ヒ不注意ナキ様相心得ラルベシ

同七年七月二十九日達第三十四号

葬儀ニ付テハ壬申第百九十二號本年第十三号公布ノ趣モ候處轉宗
又ハ葬儀相改候節其寺院ノ離壇狀ヲ以爲願出候向モ有之候哉ニ相
聞右ハ其儀ニ不及専ラ人民ノ望ニ任セ任頼爲致不苦儀ト可相心得
此旨相達候事

同十一年三月四日太政官乙第二十号布告

舊教部省九年一月第二号ヲ以相達候轉宗改式之節承認書授受之儀
向後廢止候條渾テ壬申月第六百九十二号七年二月第十三号公布ノ通相
心得自今轉宗改式之者ハ是迄葬祭受ノ者へ及通知置其旨管轄應へ
可爲二届出此旨相達候事

但同宗派ニテ甲乙相轉候モ同様タルベシ

同十七年十月三十日内務省乾戸第四三九号訓令

從來戸籍簿ニハ宗旨ヲ記載セシ處以來記載ニ及バス此旨及訓示候
也

神祭ニ改式セント欲スル者ハ左ノ書式ノ手數ヲナスベシ
復祭通知書

抽者義是迄貴寺檀家ニ居申候處豫テ神道尊信罷在候ニ付今般神祭
ニ復式致候條此段御通知申候也

府縣國區郡市町番邸戸

年号月日

何之誰印

何々寺(院)御中

復祭式願書

拙者義是迄何字何寺(院)檀家ニ有之候處豫テ本教尊信罷在候ニ付今般神祭ニ復式致度候條來ル何月何日午後第何時教師(職名何ノ誰ト認ムベシ)御差向復式御執行被ニ成下度尤自今葬儀ハ不申及春秋式年祭等總テ御依頼申上度候條各靈簿相添此段奉願候也

年号月日

黒住教

何々小教會所(説教場所)

御中

何府(縣)何國區郡市町番邸地戸

何之誰印

埋葬取扱

埋葬取扱ひ方神祭は土葬に執行ふが本義なれども衆人の中には本縣より他縣に寄留せる者又旅行中死去せる者もあり然る時は其遺体を土葬にするは勿論なれども然あらずして遺族の都合を以て該縣に連歸らむとするには不便なるが故に火葬にする事もあるべければ其心得あるべし然る時は左の達に據るべきなり
太政官第二十五号(明治十七年十月四日)

墓地及埋葬取扱規則

- 第一條 墓地及火葬場ハ管轄廳ヨリ許可シタル區域ニ限ルモノトス
- 第二條 墓地及埋葬場ハ總テ所轄警察署ノ取締ヲ受クベキモノトス
- 第三條 死骸ハ死後二十四時間ヲ經過スルニ非サレバ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス
- 但別段ノ規則アルモノハ此限ニアラス
- 第四條 區長若クハ戶長ノ認許證ヲ得ルニ非ザレバ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス
- 但改葬ヲナサントスル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クベシ

324
542

第五條 墓地及火葬場ノ管理若クハ區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得タル者ニ非ザレバ埋葬又ハ火葬ヲナサシム可ラス又警察署ノ許可證ヲ得タル者ニ非ザレバ改葬ヲナサシム可ラス

第六條 葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行フベシ

第七條 凡碑表ヲ建設セント欲スル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受ク可シ其許可ヲ得ズシテ建設シタルモノハ取除クベシ

但墓地外ニ建設スルモノ又之レニ準ス

右の條々教師喪家共心得おくべし

明治二十二年十二月十八日印刷出版
 大正六年八月三十日再版印刷
 大正六年九月五日再版發行



發著
行作
者兼

三
木
惟一

發行所

黑
住
教
日
新
社

岡山縣御津郡今村三十五番地

印刷者

安
井
宇
吉

岡山縣岡山市船頭町八十二番地ノ一

印刷所

山
陽
新
報
社

岡山縣岡山市西中山下百五十四番地

終

